博士論文

論文題目　張恨水文学と民国期「古都」北京の残照

氏名　　王　暁白

目録

はじめに.....3
第一節　張恨水と北京との絆に関する先行研究.....3
第二節　ケヴィン・リンチの都市イメージ理論とその文学研究への応用.....8
第三節　本研究の意義.....11
第一章　総合的北京イメージ.....13
第一節　明清両王朝の北京城.....13
第二節　民国期の北京城.....14
一、朱啓鈐と京都市政公所.....14
二、袁良と北平市政建設.....17
第三節　全体性：建築、分布と自然.....18
第二章　北京を舞台とする張恨水小説における北京イメージ.....21
第一節　パス、エッジ、ノードとランドマーク.....21
第二節　ディストリクト.....25
第三節　イメージの出現頻度：外部要素と内部要素の共同作用.....27
一、住所と通勤地から考察する張恨水の北京イメージ.....28
二、1928 年以後：北京イメージのブーム.....32
三、上海発表作品における北京イメージの増加.....34
四、伝統的イメージの優位.....35
第三章　張恨水文学における都市の系譜：上海・南京・重慶.....37
第一節　張恨水と上海.....37
第二節　張恨水と南京.....40
第三節　張恨水と重慶.....43
第四節　エッセー集『両都賦』で確立された都市の系譜.....45

一、テクストが対象とする読者.....46
二、テクストの基本構成：「夢」の枠組み.....47
三、隠れた第三の都市ー重慶.....48
第四章　張恨水による「新中国」の叙述（1949－）.....51
第一節　「新中国」時期における張恨水の創作.....51
第二節　北京イメージを集大成した『記者外伝』.....53
一、創作の背景.....53
二、『記者外伝』における北京イメージ.....54
結論　北京における南方人アイデンティティー.....59
第一節　歴史上の江南と北京.....59
第二節　南方出身者の目で見た北京イメージ.....61
一、張恨水早期作品のなかの北京と江南.....61
二、転換点としての『啼笑因縁』.....64
三、抗戦期：重慶における「下江人」.....66
第三節　陶然亭のイメージ：張恨水の心理・身分の反映.....68
第四節　結び.....74
付 録.....81
表１：13 部の北京を背景とする作品における北京イメージの統計.....81
表２：13 部の作品における種類別のイメージの統計.....88
表３：13 部の作品の字数に基づくイメージの統計.....89
表４：出現した頻度が高いイメージの統計.....90
表５：4 部の作品における南京イメージの統計.....91
表６：5 部の作品における重慶イメージの統計.....93
表７：『記者外伝』における北京イメージの統計.....95
参考文献.....97

はじめに

第一節　張恨水と北京との絆に関する先行研究

中国南方出身の文学者が北京との関わりにおいて独特なアイデンティティーを形成することは、意味深い文化現象といえる。1928 年以後の中華民国期後半の北京は北平と呼ばれ、首都の地位を失ったとはいえ、周作人、郁達夫、林語堂、張恨水などの文学者たちにより賛美され興味深く描写されていた。老舎のような北京出身の作家による描写とは異なり、彼らの北京に対する描写には北京居住の他地域出身者の共感を呼ぶ表現が見られる。それは、伝統的な北京が近代化していく過程において、外来者にとっての近代的北京イメージが形成されていく過程とも重なるものであろう。

張恨水（1895－1967）は新聞編集者兼作家として北京（北平）に前後あわせて三十七年ほど滞在し（1919－35、1946－67）、数多くの北京に関する作品を残した。彼の北京に関する描写は、北京の「風俗画」と言われた。[1]彼は何度も公の場で、北京が彼の第二の故郷であり、彼の心の支えであり、魂を託す場所だと表明している。[2]

張恨水は安徽省潜山県に生まれ、伝統小説を愛読し、少年期に父親を亡くした。経済的に余裕がなかったため、学校をやめて、南方諸省の蘇州、南昌、漢口、上海、安慶などの各都市を転々とし、記事の投稿や新聞編集業などで得た収入で家族を養った。1919 年、24 歳の時に張は初めて北京に上った。北京に着いたとき、前門の鉄道駅を出ると、前門の壮大さに驚かされたという話がある。[3]その後、彼は新聞業に従事し、新聞記者や編集者として活躍している。それは同時に北京社会に広く接触することでもあった。新聞記者の経験を生かして彼は北京を限なく訪れ、北京の社会、風俗、民情、地理などを熟知して、創作の素材を蓄えた。

1924 年、友人の成舎我が「世界晩報」という新聞を創刊し、張恨水を招請した。のちに張は同紙文芸欄に小説『春明外史』の連載発表を始めた。「春明」は唐代の首都である長安の城門のひとつであり、転じて首都を指す言葉になっている。張は「春明」を首都である北京を指して使用した。『春明外史』は彼の初めての北京を背景とする長編小説で、作家生涯のなかで最初の重要な作品でもある。『春明外史』は 5 年にわたって連載され、数多くの北京読者を魅了し、行列購入の現象まで生じさせた。創作上、張は「『紅楼夢』の方法を用いて『儒林外史』を創作する」[4]と自ら述べているように、「恋愛」と「社会」を

[1]原文は「風情画」。趙孝萱「雅人趣俗、俗人却雅――張恨水北京小説雅俗錯位的文化意涵」、陳平原等編集『北京：都市想像與文化記憶』、北京大学出版社、2005 年。
[2]張伍『雪泥印痕－我的父親張恨水』、団結出版社、2006 年、200 頁。
[3]張伍『我的父親張恨水』，春風文芸出版社 2002 年，68 頁。
[4]原文は「用作《紅樓夢》的方法來作《儒林外史》」。張恨水：「我的小説過程」（四）、1931 年 1 月 27 日－2

融合し、主人公の楊杏園と梨雲、李冬青との愛情を通して、北京社会のさまざまな人物と出来事をつなぎ合わせながら物語を展開した。小説が北京の新聞紙上で発表されたので、読者は主に北京の市民であった。連載という発表方式により、読者を長期にわたり魅了することができた。

張は『春明外史』と類似した、『京塵幻影録』『春明新史』『斯人記』を相次いで連載発表した。ここでも前作と同じく北京社会の様子を描写、暗黒面を暴露し、恋愛の物語を織り込んだ「恋愛－社会」という手法を用いた。

1927 年に張恨水は「世界日報」文芸欄「明珠」で『金粉世家』の連載を始めた。1932 年までの五年間、『金粉世家』は百万字以上の長編として発表され、多くの読者の注目を集め、センセーションを巻き起こした。この作品は金燕西と冷清秋の恋愛と婚姻を軸に、国務総理金氏の大家族や北京上流社会の面々を描写しており、「民国の『紅楼夢』」と称された。[5]

張恨水の北京および瀋陽で発表した北京を背景とする作品は以下の表の通りである。

題名	発表時間	発表地点
春明外史	1924-1929	北平「世界日報」文芸欄「明珠」
京塵幻影録	1926-1928	北平「益世報」
金粉世家	1927-1932	北平「世界日報」
春明新史	1928	瀋陽「新民晩報」文芸欄「星期画報」
斯人記	1929-1930	北平「世界日報」文芸欄「夜光」

この間、張恨水は北方では著名な作家となっていたが、南方ではあまり知られていなかった。1929 年、張恨水は上海「新聞報」（その発行量毎日 15 万部は当時は全国最大であった）文芸欄の編集者である厳独鶴の要請で『啼笑因縁』を創作し、1930 年に同紙で連載小説を発表した。『啼笑因縁』は青年の樊家樹と女性の沈鳳喜、関秀姑、何麗娜の四角関係を大筋として、多くの北京の風物を描写した。本作は 1930 年 11 月 30 日まで連載され、12 月に単行本となり、1949 年以前に 20 刷以上発行され、[6]ベストセラーとなった。張自身も、「今回の南方滞在の間、上は国家の官僚から、下は遊女まで、私に会うとすぐ『啼笑因縁』のことを聞いた」と述べている。[7]『啼笑因縁』は南方読者やさらには全国の読者の大好評を博し、張のもっとも著名な作品となった。

「啼笑因縁」を発表した後、張恨水は全国にわたって誰でもが知っている作家となった。原稿依頼も次から次へとやってきた。これ以降、張恨水の北京を背景とする小説は主に南方の読者に向けて上海で発表された。1930 年に張は上海で世界書局と四部の作品の独占出版を契約し、原稿料を先払いしてもらった。後に『落霞孤鶩』と『美人恩』が直接世界書

月 12 日「上海画報」、張占国、魏守忠編集『張恨水研究資料』、知識産権出版社 2009 年、232 頁。

[5]張伍『我的父親張恨水』、春風文芸出版社 2002 年，104 頁。

[6]張正『魂夢潜山――張恨水紀伝』、山西人民出版社 2001 年、165 頁。

[7]原文は「这次南来,上至党国风流,下至风尘少女,一见着面,便问『啼笑因縁』」。張恨水「我的小説過程」、1931 年 1 月 27 日―2 月 12 日「上海画報」、張占国ら編集：『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、233 頁。

局によって単行本として出版された。

張恨水が上海で発表した北京を背景とする作品は以下のとおりである。

題名	発表時間	発表地点
啼笑因縁	1930	上海「新聞報」文芸欄「快活林」
天河配（欢喜冤家）	1931	上海「晨報」出版社
落霞孤鶩	1931	上海世界書局
似水流年	1931-1932	瀋陽「新民報」、上海『旅行雑誌』
現代青年	1933-1934	上海「新聞報」文芸欄「快活林」
美人恩	1934	上海世界書局
芸術之宮	1935-1937	上海「立報」
夜深沈	1936-1939	上海「新聞報」文芸欄「茶話」

1935 年、北平の時局が緊張したため、張恨水は自身の安全を考慮して北京を去り、上海へ行った。以後、抗日戦争が終わるまで北京へ戻らなかった。抗日戦争の期間、戦争前から連載していた『夜深沈』を書き終えたほか、張は北京を背景とする小説を二度と書かなかった。

1936 年、張恨水は南京で「南京人報」という新聞を創立した。中日戦争勃発後、1938 年に張は重慶に着き、「新民報」に就職して文芸欄を編集すると同時に、『八十一夢』などの小説を創作し続けた。戦後の 1946 年、張は北京へ戻り、北平「新民報」の経理に就任した。1948 年、張は「新民報」の経理を辞職した。1949 年、脳出血で創作能力をほとんど失い、1967 年に世を去った。

張恨水の生活と創作と緊密に関連している都市といえば、第一に北京であり、以下は重慶、南京、上海と続く。

張恨水と北京、その関係に関する先行研究は、ほとんど「京味」（北京の言語、飲食、技芸等に関する描写）、民俗文化など博物館と類似した概括と終始している。より独自性のある論者は台湾の学者趙孝萱であろう。張恨水の小説における平民文化の「京の味」は、「地方情緒と文化情緒を伝えるだけでなく、作者の伝統文化精神の陥落に対する深い憂慮をも体現している」と趙は論じた。[8]張恨水と北京の関係を討論するとき、論者の劉少文は、張恨水と北京及び上海の関わりを整理し、張の上海嫌い、北京好きという現象に注意し、その原因を張恨水の伝統文人の属性に求めた。[9]この張の論述は相当に説得力があるが、張の作品における都市の個性の体現についてのさらなる論述はない。また、留学経験と西洋体験をもつ複数の新文学作家が示す上海嫌い、北京好きという傾向を考察していない。

尹瑩は博士論文のなかで張恨水と重慶の関わりを論じた。そのなかで張恨水の北京好きと上海嫌いに言及し、張が重慶を「愛していると同時に恨んでいる」と認め、重慶時期の張が「精神の構造が大いに変化し」、「人生を幻想する」創作を捨て、「人生を叙述する」

[8]原文は、「不僅是地方風土、文化情調的伝遞，還体現了作者對伝統文化精神淪陥的深切憂慮。」趙孝萱「雅人趣俗、俗人却雅――張恨水北京小説雅俗錯位的文化意涵」、陳平原ら編集『北京：都市想像と文化記憶』、北京大学出版社、2005 年。

[9]劉少文『大衆媒体打造的神話』（中国社会科学出版社 2006 年）第二章を参照。

創作を始めたと論じている。[10]張の重慶時期の心理についての論述は興味深いが、重慶時期の作品を実力以上に評価している傾向が見られ、北京、上海との比較もおおざっぱである。

南京師範大学教授の魏宏瑞は、張恨水が北京を背景とする小説を北京に滞在する江南人の視点から叙述して成功を収めたのに対し、南京を背景とする小説は下層民衆を対象とするのみで、南方の地域文化の描写に欠け、大きな影響力を持たない作品であると指摘した。[11]この論文は北京を背景とする小説に登場する南方人の文化的心情を重視した意味深い研究であるといえるが、南京を背景とする小説についての議論がやや主観的で、創作の時代背景（とくに抗日戦争）を無視し、張恨水と南京、江南との関わりを軽視しているのではないかと考えられる。

卞秋華は張恨水の想像した南京が空間と地域としてだけでなく、文化的郷土という象徴的な意味も含んでいると認め、張が南京を上海と対照して、伝統的で、調和した郷土都市という南京イメージを築いたと論じた。[12]卞氏が提示した南京―上海の対照モデルは啓発的で、張の作品のなかのほかの都市を研究するときにも参照できる。

先行研究の中で筆者がもっとも注目しているのは李在珉の博士論文「老舎と張恨水の北京記述と想像」である。[13]この論文は、二人の作家の作品のなかに体現された北京地図を整理して、「東西南北城」「住居空間」「外部交流空間」の三つに分類し、北京人の老舎と外来者の張恨水との「北京地図」がどのように異なるかについて論じている。作家の生活の経歴と都市空間認識との関係についての分析は興味深い。ただし、都市空間の分類はやや大まかで、二作家それぞれの都市空間イメージの構成の違いが十分には検討されていない。

日本における張恨水研究はわずかで、日中戦争期に翻訳が刊行されたものの、本格的研究が始まるのは 1980 年代以後中国における張恨水に対する再評価開始後のことである。これらの研究は、中国の張恨水研究を紹介し、張の通俗文学における傑出した成果を認め、張を「小説の巨匠」と称した[14]。張が「超党派」の性格[15]をもったこと、章回小説に新しい思想、新しい手法を注入したこと[16]、新文学者たちがふれることのあまりなかった視点を持つこと[17]などは時々議論されている。1930 年代以来左翼作家が張に対して行った批判に反論してもいる。[18]『啼笑因縁』は張のもっとも成熟した作品として、数名の研究者より

---

[10]尹瑩「小説中的重慶」、華中師範大学博士論文 2009 年。
[11]魏宏瑞「世説秦淮――地域文化視角下張恨水小説中的江南呈現」、『名作欣賞』2011 年第 34 期。
[12]卞秋華「張恨水小説中的南京書写」、『中国現代文学研究叢刊』2013 年第 4 期。
[13]李在珉「老舎与張恨水的北京叙述和想象」北京大学中文系博士論文 2006 年。
[14]笠征「張恨水とその作品」、樋口進先生古稀記念論集刊行会編『樋口進先生古稀記念中国現代文学論集』中国書店 1990 年。
[15]斉藤泰治「張恨水の「八十一夢」について--並びに張恨水の伝記ノ-ト」、法政大学教養部『法政大学教養部紀要』（53）、1985 年 1 月。
[16] 同注 14。
[17] 同上。
[18]高建平「張恨水代表作《啼笑因縁》小論―兼与左翼作家的批評商権」、『名古屋大学中国語学文学論集』9、1996 年。高建平「談張恨水代表作《金粉世家》」、 『名古屋大学中国語学文学論集』10、 1997 年。

注目されてきた。まず 1943 年に訳本が出版されたとき、訳者の飯塚朗は同書まえがきでこの作品を紹介し、芸術的成果を評価した。[19]1980 年代以後の研究者も、『啼笑因縁』が張のもっとも人気が高い作品として、張のもっとも成熟した作品でもあると認めた。『啼笑因縁』と同時代の作品との比較研究も展開されている。[20]

それらの研究者のなかで、阪本ちづみの研究は本論文がとくに参照した先行研究である。彼女は論文「都市小説として『啼笑因縁』を読む」のなかで、初めて『啼笑因縁』を都市小説として分析すべきだと論じ、小説に散在している地名に注目した。異邦人である樊家樹が天橋という特殊な空間に入り込んだことに注目して物語を分析し、天橋、北京飯店、北海公園などの地名が文化的、歴史的イメージを与え、そして同時に小説の構造に有機的に結びついていると、興味深い指摘を行った[21]。他の論文では、張の作品のおける当時の人々の上海への憧れと上海への嫌悪、言い換えれば都市嫌悪と都市憧憬の矛盾が共存していた状況と、張自身の都市嫌悪（上海嫌悪）を論じている。[22]阪本は張の作品と都市の関係に関心を示した最初期の研究者であろう。

日本において都市空間と都市文学に関する古典的専門書として前田愛の『都市空間のなかの文学』を挙げるべきであろう。この論集では前田氏は文学作品の中に描かれている都市空間を都市の実情に合わせて解読する一方、さらに都市空間の実情を文学作品の人物やストーリー設定から解読した。それによって文学研究と都市史研究を有機に結びつけた。先行研究の阪本論文は主に前田氏の方法を用いて『啼笑因縁』の北京イメージを解読したものである。ただし、一編の作品を解読するには前田氏の方法はよいアクセスであるが、一人の作家により何十年ものの間に執筆・発表された多数の作品を対照として、都市イメージを全体的に捉え、その時間の推移につれての変化を考察する際には、前田愛の方法はそのままには応用しがたいのではないだろうか。ただし、阪本論文の場合のように、ある作家の作品群における代表的なイメージを論じるとき、個々の小説のなかのイメージと現実の状況とを対照するとよい結果を得られるだろう。

都市イメージに関する日本の研究のなかでは、米澤佑一の「文字情報から見た観光地イメージの特性に関する考察」は啓発的である。この論文は、雑誌のなかの名所の写真、キャッチフレーズ、掲載回数などを整理、統計し、大阪、神戸、京都、奈良の都市イメージを検討した。[23]文学的な分析ではないとはいえ、その文字情報処理の方法は参照できるだろう。

本論文は、張恨水の作品のなかの立場、経験、物語の背景から見る北京イメージを主に

---

[19]飯塚朗「訳者まへがき」、　張恨水作、飯塚朗訳『啼笑因縁』、生活社、1943 年。

[20]彭妮妮「張愛玲『十八春』と鴛鴦胡蝶派--張恨水『啼笑因縁』との比較にみる作品表現について」、日本思想史・思想論研究会『思想史研究』(7)、2007 年。

[21] 阪本ちづみ「都市小説として『啼笑因縁』を読む」、『お茶の水女子大学中国文学会報』10、 1991 年。

[22]阪本ちづみ「張恨水『平滬通車』論ー「近代」に乗り遅れた男」、『お茶の水女子大学中国文学会報』16 、1997 年。阪本ちづみ「中国文学あれこれ(76)小説と映画化--張恨水『銀漢双星』の場合」、季刊中国(87)、2006 年。

[23]米澤佑一「文字情報から見た観光地イメージの特性に関する考察」、Kwansei Gakuin policy studies review 6, 2006。

ケヴィン・リンチ『都市のイメージ』の方法を援用しながら整理、比較して、1930 年代までの北京イメージの形成要素を分析する。具体的な作業としては、まず各作の登場人物の活動地点と各作が言及する地名を整理分類し、各作品に基づく北京地図を作成したのち、この北京イメージの地図と作家自身の経験および北京の都市環境とがどのような影響関係を有するのかを検討したい。また北京イメージ研究に対する補助線として、張の作品における上海、南京、重慶の各都市イメージも考察したい。

第二節　ケヴィン・リンチの都市イメージ理論とその文学研究への応用

本論文で討論する都市イメージの「イメージ」という言葉は、英語の「image」に基づく外来語である。「image」に相関する解釈は「イメージ、面影、印象、表象；観念、概念；心象」と解釈されている。[24]日本語の「イメージ」は①「心の中に思い浮かべる姿や情景。心象。形象。イマージュ。」②「心の中に思い描くこと。」③「目の前にない対象を直観的・具体的に思い描いた像。」と解釈されている。[25]これらの解釈の共通点は、主観性の色濃さ、観察者の主観的意志の強さである。ケヴィン・リンチの著作『都市のイメージ』（*the Image of City*）の用語もこれと共通する。リンチが「image」を使用するときも、『都市のイメージ』の訳者が「イメージ」を使用するときも、観察者と客体が相互作用した結果の、観察者の頭のなかの所産を指している。リンチは「環境のイメージ」を「観察者と環境との間に行われる相互作用の産物。」[26]と述べている。「環境のイメージ」はリンチの提出した重要な概念で、観察者と環境の相互作用の結果である。観察者は強い適応能力と、観察者自身の意志とによって、見つけた事物を選択、組織し、意義を与えるのである。このイメージは個体の頭が外部環境から帰納した映像、直接の感覚と過去の経験による産物であり、これによって情報をマスターして行為を指導する。これに基づいてイメージアビリティ（Imageability）が提出される。イメージアビリティとは、わかりやすさ（legibility）と見えやすさ（visibility）で、客体が見られるだけでなく、鮮明に強烈に観察者の感覚に訴えるという意味でもある。

リンチの基本的な方法論は認知地図（cognitive map）あるいはイメージマップ（image map）の制作である。具体的には、リンチがインタビュー対象者に都市の略図をスケッチするように頼む。これらのインタビュー対象者の略図は数多くの重要なディテールを省略し、複雑な幾何形状を理解しやすい直線と直角に置き換えて処理する。個人の都市に対する認知表現は点、線と面によって構成される。これらの点、線と面の関わりは人の環境の

[24] 『ジーニアス英和大辞典』による。
[25] 『スーパー大辞林』による。
[26] ケヴィン・リンチ著，丹下健三，富田玲子訳『都市のイメージ』，東京 ： 岩波書店，2007 年，7 頁。

なかの経験によって異なる。このように人々のそれぞれの「認知地図」が構成される。リンチはそれぞれの都市の住民の認知地図を綜合して、住民の都市イメージに影響するエレメントを示した。これらのエレメントをパス、エッジ、ディストリクト、ノード、ランドマークの五つの種類に分類し概括する。リンチはこの五つのエレメントから都市計画の利害得失を評価する。

この五つのエレメントをリンチは以下のように定義している。１．パス：「パス paths とは、観察者が日ごろあるいは時々通る、もしくは通る可能性のある道筋のことである。街路、散歩道、運送路、運河、鉄道などである。多くの人々にとっては、これらがイメージの支配的なエレメントになっている。人々は移動しながらその都市を観察している。そしてこうしたパスに沿ってその他のエレメントが配置され、関連付けられているのである。」[27]２．エッジ：「エッジ edges とは、観察者がパスとしては用いない、あるいはパスとはみなさない、線状のエレメントをいう。……2 つの局面の間にある境界であり、連続状態を中断する線状のもののことである。」[28]３．ディストリクト：「ディストリクト districts とは、中から大の大きさをもつ都市の部分であり、2 次元の広がりをもつものとして考えられ、観察者が心の中で『その中に』入るものであり、また何か独自な特徴がその内部の各所に共通して見られるために認識されるものである。」[29]４．ノード：「ノード node は点である。……観察者がその中に入ることができる点であり、彼がそこへ向かったり、そこから出発したりする強い焦点である。ノードとなるのは、第一に接合点である。すなわち交通が調子を変える地点、あるいは道路の交差点ないし集合点、あるいは一つの構造が他の構造に移り変わる地点などである。」[30]５．ランドマーク：「ランドマーク landmark も点を示すものであるが、この場合観察者はその中に入らず、外部から見るのである。……何かをランドマークとして用いるということは、必然的に、限りない多くの可能性の中から、あるひとつのエレメントをとりだすということを意味している。……それらは都市の内部にあるかもしれないし、またかなり遠くにあるために、あらゆる実際的な目的のために、一定の方位を示しているものもある。」[31]ランドマークの性質を考えると、ある特定の都市のランドマークはかなり明確である。

リンチの研究においては、形式自身の作用を掘り起こすため、都市の社会意識、風土風習、歴史的変遷、都市機能、名称などのイメージの形成と関わる要素を排除し、都市の実体環境だけが注目されている。リンチはその作用を物理と生理上の識別に限り、社会文化的意義を無視した。ランドマークを例としてあげれば、天安門は北京の重要なランドマークとして民国期から重大な政治的意義をもち、中華人民共和国期に入ってからはさらにイデオロギーの象徴的な意義をもち、位置を識別し道を探すというランドマークの普通の機

[27]同上。56 頁。
[28]同上。
[29]同上、57 頁。
[30]同上。
[31]同上、58 頁。

能を大いに超えている。

日本において、リンチの理論、特にイメージマップ、パブリックイメージと五つの要素は建築学、都市計画、環境心理学に広く応用されている。「都市の形態や空間などの「物的位相」と人間のイメージや表象作用などの「人的位相」との相互作用的な関係性を明らかにして、まったく新たな視座を開示した。」「5 つの形態要素が、やがて都市計画や都市デザインの分野における「共通言語」の役割さえ担うようになる。」[32]リンチの理論によって、ある都市のイメージを五つの要素に分類し、分析した研究もある。[33]

リンチの理論を文学研究に応用することには少からぬ意義があるだろう。もし作家をリンチのインタビュー対象者と考えると、作家の作品は意識的または無意識なアンケート回答と考えられる。作家の言及した場所は相違なく作家の認知地図のなかに存在している。作家が意識的に描写した場所は必ず作家が注目している場所であり、作家の好みも反映しているのであろう。もしある作家のある都市を背景とする作品が数多く存在すれば、これらの作品に出現する場所を整理すると、作家のこの都市の認知地図をおおよそスケッチすることができる。この認知地図はある程度該都市の状態を反映するが、作家の心の中の都市の状態をより強く反映している。さらに、もし複数の作家の作品「アンケート」を重ねると、意味深い結論が導き出せるであろう。リンチが述べたように、「どんな都市にも、たくさんの個人のイメージが重なり合った結果としての一つのパブリック・イメージが存在するようである。あるいは、それぞれかなりの数の市民たちにより作られるパブリック・イメージがいくつか集まっているのかもしれない……各個人が描く心像はそれぞれ独自のものであり、その内容の一部はめったにまたは絶対に他人に伝達されないということもあるのだが、大体においてそれは、パブリック・イメージに近いものなのである。」[34]

ただ、文学作品を単純にアンケートへの回答と同列に論じることはできない。とくに小説を議論する場合、小説に出現する場所は主人公の活動と緊密に関わっている。上流社会の主人公を描く小説には、下層民衆がよく訪れるところは当然わずかしか出現しない、あるいは全く出現しない。ある場所は作家の認知地図のなかに存在しているとはいえ、ストーリーの需要のためどんな作品にも出現しない可能性もある。このような状況を最小化するため、まず作家の作品では都市の各面が広く描写されていなければならない。すなわち、この作家はある都市を背景として、各種の主人公を登場させた作品をもつ、あるいはこの作家は一部の作品の中に色々な主人公たちを網羅している。次に、作家の回想録、日記、エッセーなどのノンフィクションをフィクションの補足として、作家の認知地図作成に反映できる。

文学作品はアンケートやインタビュー以上の機能を持つ。「イメージ」の意味をさらに見れば、「image」は美学的意味も持っている。同じ語根を持つ Imagism 写象主義、imagination 想像、imagery 心象（文芸上）などいずれも主観的、虚構的意味を含んでいる。

[32]三村翰弘「ケヴィン・リンチの逝去を悼む」、建築雑誌 99(1222)、1984 年。
[33]石上文正「岡崎市のイメージ」、『こころとことば』2、2003 年。
[34]ケヴィン・リンチ著，丹下健三，富田玲子訳『都市のイメージ』，東京 ： 岩波書店，2007 年,55 頁。

「イメージ」のもつ強い主観的、審美的意味は文学作品の研究と同一性をもつといえる。「イメージ」における個体の心理、性格などのエレメントは作家に対する研究とも共通している。この同一性と共通性はリンチの都市イメージの理論と方法を文学作品の研究に応用することを可能にする。もっとも、リンチはインタビュー対象者の簡単な背景だけを紹介し、教育レベル、心理性格などの属性まで深く調べてはいない。これに対し、作家研究はこの不足を補うことができ、観察者とイメージの関係を深く討論できる。

総じて、都市の政治、社会、文化的背景及び作家の経験、心理、性格などを研究に組み入れると、リンチ理論の欠陥を補うことができるのである。

本研究で多数の作品に出現する数多くの地名を処理するために、リンチの理論を応用するのは、都市イメージの功能と性質を考慮して分類・整理するためであり、それは張恨水の北京イメージの特徴の概括と、同時代の他の作家との比較研究の出発点となるからである。張恨水の認知地図のスケッチとその形成過程に関する考察により，作家と都市の関係に関する基礎的認識を得て、さらなる作家の都市アイデンティティー問題の分析が容易になるのである。

第三節　本研究の意義

グローバリゼーションの下、都市の同質化がますます進行している。地域文化の多様性と特徴がだんだん衰え、消えていく。都市の建築物の標準化と商品化が建築の特徴を隠す傾向がある。都市のイメージアビリティ（Imageability）が大いに低下していくのである。われわれは千篇一律の都市を見ている。類似した街と都市のなかを歩くと、この都市はどこだろうかと困惑をおぼえることさえある。

北京には 600 年来の多重の記憶――明清の 500 年の帝国の首都としての記憶、民国遷都後の故都としての記憶、中日戦争期の陥落の記憶、共和国の首都としての記憶と 1980 年代以後の国際的大都市建設の記憶が充満している。これらの記憶が重なり、現在の北京イメージが形成されているのである。

あらゆる時代の歴史と遺跡はこのような有名な文化都市のなかでよく保存されるはずである。しかし、近年、あるイメージが膨大化し、ほかのイメージを抹消することがある。簡単に言えば、北京の歴史文化遺産がモダナイゼーションによる空前の厳しさの挑戦を受けているのである。

この挑戦には二つの側面がある。まず、歴史を有する都市の歴史的建築が破壊されていること。北京の城壁がほとんど取り壊されてから 50 年、北京の歴史的な町並みがさらに大規模に破壊され続けている。1990 年代末以来、北京旧市街の胡同（フートン）の数は、毎年約 600 ずつ減少してきた。[35]胡同に取って代わったのが西城区の「金融街」、「中信城」、

[35] 『北京晩報』、2001 年 10 月 19 日を参照。

東城区の「金宝街」、「新世界」などの大型不動産プロジェクトである。

北京の宣武門の外で育ち、1949 年以後台湾に移住した作家林海音は、北京城壁が取り壊された以後の 1980 年代に「私はよくここの親友に笑って言った『北平は城壁までなくなってしまった。帰っても何も見るものがないわ。』」と書いた。[36]国内外の華人にとって、北京の建築とそのイメージは深い意義を持つ。現在、北京の旧市街地が全面的に破壊されつつあるため、北京のイメージは激しく変化している。この傾向が放任されると、北京は中国文化の根幹としての使命を担うことができなくなるであろう。

つぎに、伝統的ライフスタイルが破壊されていること。北京の代表的な歴史的建築である胡同四合院が取り壊され、胡同の住民が転居させられるにつれて、旧北京のライフスタイル、民俗、文化記憶が徐々に消滅してしまう恐れがある。時代が進むにつれて、ライフスタイルなどの無形文化伝統は変化していくが、歴史的な町並みがこれらの無形文化遺産に存在空間を与え、文化伝統の変化を緩めている。いったん存在空間が失われれば、大規模な変化がもたらされる。伝統的な食物、手工芸が市場を失い、伝統的な近隣関係も崩れてしまう。2007 年北京前門地域の改造に伴い、多くの老舗（中国語で「老字号」）は改造後の家賃が高騰したため、やむをえず立ち退きしているのである。[37]

北京の文化遺産が破壊されている原因を考えると、経済的利益の要素以外にも、摩天楼に代表される現代建築と胡同四合院に代表される伝統的建築とに対する審美的評価と文化的アイデンティティーと拮抗していることが指摘できる。この文化アイデンティティーの問題はグローバリゼーションの下で厳しくなっていく。もし都市のイメージが徹底的に変えられ、北京が上海、東京、二ューヨークへと日増しに同化し、独自性を失っていくならば、北京の都市アイデンティティーは危機的状態に瀕することであろう。

2008 年 4 月、北京オリンピックの直前、「歴史文化名城名鎮名村保護条例」が公布され、北京の伝統的な町並みを保護する法律的な依拠となった。北京オリンピックの間、修繕した什刹海地域の胡同と四合院は伝統的な姿を見せ、大勢の海外の観光客を魅了していた。文化遺産と伝統民俗は海外からの観光客の注目を集めていた。伝統的「老北京」は再び意識的に呈示されたのである。この伝統的な「老北京」イメージは一体どのような様相を呈しているのか、どうやって形成されたのか。グローバリゼーションの下、これらの問題点は再考に値するであろう。

本論文は民国時代を代表する流行作家のテクストをめぐり、ケヴィン・リンチの理論を借用して、当時の都市景観を再現し、張恨水の都市アイデンティティーのありようを考察すると同時に、北京イメージの成立過程を探求するものである。このような都市文化研究は現在の北京アイデンティティーの再確認に対し、少からぬ意義を有することであろう。

---

[36]林海音『家住書坊辺』、江蘇文芸出版社、2007 年、96 頁。原文は「我常笑対此地的親友説：“北平連城牆都没了，我回去看什麽？」

[37]記事「回不去的北京前門：高額租金迫使百年老号隠退」、「経済観察報」2007 年 9 月 17 日。

第一章　総合的北京イメージ

本章では北京の都市史と都市計画史料に基づき、全体的な民国期までの北京イメージをスケッチしたい。さらに、北京イメージの特徴を初歩的にまとめたい

第一節　明清両王朝の北京城

歴史的な地理・空間の角度からみると、北京の歴史と文化のイメージは、所在地が安定してから徐々に作られた。歴史を遡ると、1153 年金代の中都を北京の比較的安定した最初の空間イメージとしてあげられる。元代の首都である大都の時代を経て、とくに 1421 年明成祖朱棣が首都を南京から北京へ遷移して以来、北京は巨大な統一帝国の首都として 500 年ほど安定したイメージをもっている。

明清両王朝の北京城には三重の城壁がある。真ん中にある紫禁城は朝廷と寝宮を含んでいる。二重は紫禁城を取り囲んでいた皇城で、太廟などの祭る儀式地、西苑（北海、中南海）、官署などの行政区を含める。もっとも外の三重である京城は内城と外城を含め、「凸」字の形を呈している。明、清の時代にも天安門の前に広場はあったが、皇城以内の皇室専用の丁字型の小さな広場で、皇室の儀式が行われていた。北京城を平面的に見た場合の最大の特色は南起点の永定門から、正陽門（前門）、天安門、紫禁城（太和殿）、景山、北終点の鼓楼・鐘楼まで形成された「中軸線」およびそれを基本として生まれた東西対称という都市配置構成である。建築家の梁思成はこの「中軸線」を「世界中もっとも長く、もっとも偉大である」と認め、「北京の独自な壮美なる秩序」はこれによって生まれたと述べた。[38]「中軸線」とは、「礼治」思想を体現するもので、「天子は中心にあり、北を背にして南を向く」という考えからなる。紫禁城（故宮）を中心にして、重要建築物を南北に一直線上に配するというこの構造は、皇帝の権力は絶対であることを示す。

清代に入ると、満族（八旗）は内城に住居し、漢族は外城に住居すると規定されている。この分離政策は外城の繁栄をもたらした。特に宣武門の南の地域は、「宣南」と呼ばれ、科挙に参加する文化人や学者が住む「会館」が集中したところであり、また商業の中心としても栄えた。故宮の一帯が皇帝や官僚の世界だったとすれば、宣南は庶民文化が花開いたところでもあった。

清末の 1860 年以後、内城の東交民巷でしだいに各国使館区が建設された。1900 年の「辛丑条約」（「北京議定書」ともいう）によると、東は崇文門内大街に至り、南は内城の城壁に至り、西は兵部街に至り、北は東長安街に至る地域を特に各国公使館の使用のみに

[38]原文は「一根长达八公里，全世界最长，也最伟大的南北中轴线穿过了全城。北京独有的壮美秩序就由这条中轴的建立而产生。」梁思成「北京――都市計画中的無比傑作」、『新観察』1951 年 4 月。

充て、この区域内における清国人の居住を認めていない。使館区にはヨーロッパ風建築物が立ち並び、伝統北京の建築様式を豊かにした。陣内秀信らは、「北京の近代化もまた歴史的文脈の中に西洋の様式や技術を巧みに取り入れるという柔軟な対処がなされていたのである」と総括している。[39]

第二節　民国期の北京城

清代の末年、都市北京は破損し、道路の状況と衛生の条件が悪化し、紫禁城さえ壊れてぼろぼろになっていた。[40]これは帝国の衰微、財政問題および管理問題と緊密に関わっているとともに、帝政の体制のなかに都市計画と管理の機構がなかったことも原因の一つであろう。

一、朱啓鈐と京都市政公所

民国に入ると、この状況が一変した。民国初年から 1928 年まで北洋軍閥政府の時代は「京都市政公所」が北京を管理した時期であり、北京で近代的市政体制が初めて作られた時期でもあった。この時期、北京の都市建設と管理は大部分「京都市政公所」によって行われていた。

1913 年当時の内務総長である朱啓鈐は京都市政公所の設立を提起して実現させた。そのうえ京都市政督弁等も兼任した。京都市政公所は大量のかつてない価値ある作業を行った。「成立当初、市政は草創期で、措置は極めて簡略であった。ただ旧京の宮苑を公園区として開放すること、道路を建設すること、城壁を修整することなど、非難を顧みず毅然として行った」。[41]

朱啓鈐が主管した北京の都市計画と建設は主に以下のとおりである。

１．正陽門（前門）地域と皇城の改造

前門はもともと内城と外城の交通の要所で、ひどく込み合っていた。1901 年に前門東車駅が落成し、1906 年に前門西車駅が落成した後、前門車駅が地方から北京に入る主な関所となり、前門大街では交通量が激増した。

この渋滞した状況を緩和させるため、朱啓鈐が正陽門（前門）地域の改造を促成した。改造の方策は主に甕城[42]を撤去し、東西両方の城壁に出入口を開設するものだった。その

---

[39]陣内秀信，朱自暄，高村雅彦編『北京：都市空間を読む』、東京 ： 鹿島出版会、1998 年、90 頁。

[40]史明正著、王業龍、周為紅訳『走向近代化的北京城――城市建設與社会変革』（北京大学出版社 1995 年）73―76 頁を参照。

[41]原文は「成立之初，市政草創，措施極簡。惟於開放旧京宮苑為公園遊覧之区，興建道路，修整城垣等，不顧当時物議，毅然為之。」同上、31 頁。

[42]中国の城門の外側に突出して設けられた半円形または方形の城壁。城門の防御を強化する目的のもので，しばしば二重，三重につくられる。『世界大百科事典』 第 2 版による。

結果、内城と外城の交通が滞りなく通じるようになった。特に、外城から天安門広場までの交通がさらに便利になった。

天安門広場はもはや皇室の立ち入り禁止区域ではない。1910 年代から 20 年代年にかけて、皇城の城壁と城門の大部分が撤去された。天安門広場の南端にあった中華門（清代の大清門）から天安門までの道路が開放された。民衆は長安街を自由に通ることができ、前門から中華門に入り、天安門まで直通することもできる。このように、北京の中心に位置した天安門広場はさらに際立つようになり、北京における政治集会の中心となった。五四運動、三・一八事件、一二・九運動などの民国史上の重大な事件は天安門広場で発生したのである。

２．公園などの開放

清末の 1907 年、北京の西郊にある万牲園が落成し、開放された。前身が皇室の庭園であった万牲園は、中国で初めての公共動物園となった。これは皇室宮苑を近代公園へと改造する先駆けといえる。

1914 年朱啓鈐は北京の名所を開放することを提案し、「民といっしょに楽しむ」ことを求めた。[43]前後してもともと国家祭典を行っていた社稷壇と先農壇を中央公園と先農壇に改造し、民衆に開放した。その後、故宮、地壇（京兆公園として）、北海、頤和園、天壇、中南海などが相次いで開放された。公園または博物院として開放されたもとの皇室宮苑は以下の表のとおりである。

公園の名前	開放の時間	旧名
中央公園（後の中山公園）	1914 年	社稷壇
頤和園	1914 年	頤和園
先農壇公園	1916 年	先農壇
天壇公園	1918 年	天壇
和平公園（労働人民文化宮）	1924 年	太廟
景山公園	1924 年	景山
京兆公園（地壇）	1925 年	地壇
北海公園	1925 年	北海
故宮博物院	1925 年	紫禁城
中南海公園	1929 年	中南海

これらの公園と故宮博物院を除き、民国期の北洋政府は京師図書館、歴史博物館を建設した。京師図書館は現在の北京図書館の前身で、1912 年開館し、1926 年に国立京師図書館と改名され、1928 年に国立北平図書館と再度改名され、1949 年に北京図書館と名づけられた。歴史博物館も 1912 年に創立され、1926 年開館し、1949 年に北京歴史博物館と名づけられた。

民国初年以来、北京の近代的公共領域の開発と利用は清末を大いに超えた。これは北京城が近代化の途中であることを空間上に体現するものである。皇室の私有空間が市民化と公衆化したことも政治と社会の進歩を示した。

３．道路の建設と電車の開通

[43] 原文は「輿民同楽」、「朱総長請開放京畿名勝」、「申報」1914 年 6 月 2 日。

王朝時代の北京は国家によって厳しくデザインされ建設された首都であった。明らかな特徴の一つとして、道路の碁盤式の整備が中央の絶対的な支配を保証した。

民国以後、北京の道路配置は変化し始めた。新しく建設した道路は、主に溝渠の埋め立てにより新設された道路や、城壁撤去または城門変更により新設された道路、都市計画による新しい道路を含んだ。溝渠から改造された重要な道路としては、南北新華街と南河沿大街があげられる。皇城の城壁が撤去された後、中華門と天安門の間の道路が貫通し、中華路と呼ばれ、南北の中軸線の重要な一部となった。元の皇城の長安左門と長安右門の間の道路が貫通し、中山路と呼ばれ、東西長安街とつながり、東西方向における重要な道路となった。元の皇城内部の道路と外部の道路はますます一体化し、市民にさらなる利便性を与えた。都市計画による新型道路は主に外城または香廠の新市区に分布され、すべて「路」と呼ばれ、広々としてまっすぐであった。その代表は香廠路、虎坊路、仁寿路などであった。

京都市政公所がその成立以来、1918 年までに建設した道路数は 121 に上った。北京の碁盤式の道路構成は近代化の過程においてしだいに豊かになった。新しく建設した道路も碁盤式の構造に則り、ネットワークの密度を高めた。

数年の準備期間を経て、1924 年北京電車会社が成立した。同年 12 月 18 日北京で初めての路面電車線が開通し、同路線は前門から西直門まで全長約 9 キロであった。このように、北京の公共交通には新たな手段が加わり、内城と外城の間、東城と西城の間がさらに便利になった。1930 年まで北京電車の線路が 6 つに上り、長さが総計 40 キロ近くに上った。

４．新市区香廠の建設

香廠新市区は朱啓鈐が西洋の都市計画の思想を古都北京で実践したものであった。香廠地域は北で前門地域とつながり、南で先農壇とつながった。ここは元は外城の荒地で、民国初年まで住民が少なく、空地が多く、生活環境が悪かった。ただ隣接した前門地域は繁華な商業区域であったため、発展する可能性があると京都市政公所は考えて、ここに模範市区を建設することを計画した。

京都市政公所は香廠地域で 14 の道路を計画し、前門地域までの道路を修繕した。新築の家屋に対して詳しく規定し、形式の美観と整体の調和を要求した。これ以外に公共施設も建設した。

完工後の新市区には万明路と香廠路に沿って、「両側に商店が林立しており、おおかた新式建築で、北京の最新の商業区といえる。この辺りには料理屋が極めて多く、その次は化粧品会社、衣料店…この新配置はほんとうに北京の最近の進化といえよう」。[44]このように、買い物、飲食、娯楽と住居の各機能を含む区域の建設の試みは成功したと見られていた。そのなかで、新世界商場と城南遊芸園は有名な娯楽場所であった。

ただし、香廠地域の繁栄は一時的であった。朱啓鈐が離任すると、後続工程が中断した。

[44]原文は「両旁商店林立，多為新式建築，可謂北京最新式之商埠。該路一帶飯莊極多，其次化粧品公司，綢緞店……此項新布置未可謂非北京最近之進化」。陳宗藩『燕都叢考』、古籍出版社、1991 年、第三編注。

その間、新興の王府井などの商業区の発展は香厰地域に打撃を与えた。1928 年の遷都以後、大きな人口減少にともなう不景気による影響を、香厰地域は免れられなかった。陣内秀信らによると、香厰地域の衰退は「避けられない」。なぜなら、「前近代までの都市組織をしっかりと受け継ぎつつ展開する北京の近代化にあって、大事業を推進することになるこの種の都市開発は、果たしてどこまで有効性を持ち得ただろうか」というのである。[45]

朱啓鈐が主管した京都市政公所は北京の古都改造に対して慎重な態度をとり、道路のネットワークを以前どおり保持し、新しく工事した道路もなるべくもとのネットワークと融合させ、城壁に対して相当に保守的な姿勢をとり、都市の公共領域を開放し保護した。これらの方策は古都の姿をよく保存できた。西洋風の建築が一定の規模で出現し、ある程度古都の姿を変えたが、全体的に見ればこの変化は穏やかで緩慢であり、都市の全体的なイメージに影響を及ぼさなかった。

二、袁良と北平市政建設

袁良は日本の早稲田大学を卒業し、1933 年 6 月に北平市市長に任ぜられ、その任期中に北京の発展に大いに貢献した。

1933 年末、袁良は 1934 年 1 月から 1936 年末までの市政 3 年期建設計画を制定した。そのなかで、「遊覧区建設計画」は袁良の任期の中の北平政府による市政建設の中核である。この計画は北平を遊覧区として建設し、外国から観光客を招き、外貨を獲得し、北平の経済を向上させると主張すると同時に、中国文化を宣揚し、国際理解を促成することを目的とした。計画は古跡と名所を修繕し、交通、宿泊、娯楽の施設を建設することを要求した。[46]この計画は政府が旅行業を発展させるという主張を核心的に体現した。

具体的には、１．この計画は北平遊覧区の範囲を規定し、郊外の名所も遊覧区のうちに画定し、遊覧資源の整合を重視した。２．遊覧区のうち、名所古跡の帰属と管理権を確認した。３．名所古跡を修繕する。４．交通施設を改造し、道路網を完全にする。５．宿泊施設を完全にする。６．娯楽施設を建設する。７．北平遊覧社を創立し、これによって旅行案内と接待などの活動を調和させる。

1935 年 11 月、袁良は旧都文物整理委員会を成立させた。その後、特別支出金を配分し、計画を制定し、順序を立てて文物古跡の整理と修繕を行った。激動の時局に直面し、経費欠乏という状況のなか、委員会は北京の文物保存事業に大いに貢献した。1937 年までに、天壇、香山碧雲寺、西直門箭楼、東南角楼などの何十もの修繕工程が完了された。西直門から頤和園までのアスファルト道路もこの特別支出金を利用して建設された。

学者の鄧雲郷は北平の市長を次のように論じた：「やはり袁良はいくらか仕事をしたと

[45]陣内秀信，朱自暄，高村雅彦編『北京：都市空間を読む』、東京 ： 鹿島出版会、1998 年、225 頁。
[46] 「北平市遊覧区建設計画」。梅佳「三十年代北平市政建設規画史料」、『北京檔案史料』1999 年第 3 期。

言える。皇城の城壁を撤去し、あちこちのごみを掃き清め、北京での初めてのアスファルト道路を工事し、城内以外に、西直門から頤和園まで直通の道路も工事した。この路面は狭いが、よかった。当時自動車は多くなかった。清華大学と燕京大学の旧式の大型バスが日々この道路を走っており、先生と学生たちに便利な交通を与えた。これらのことはすべて 1933 年から 1935 年までの二年間に竣工された。」[47]

総じて、袁良は北平の近代化を進めると同時に、古都の保存にも力を尽くしたのである。

第三節　全体性：建築、分布と自然

建築家の梁思成は北京城を次のように評論した。「北京は全般的な処理によって初めて完全に、偉大な中華民族の建築の伝統手法と都市計画の智恵と気勢を表わす。」[48]この論断は三つの方面から理解すべきである。

一つ目は、北京におけるそれぞれの伝統建築は優れているということ。

二つ目は、北京は国家によって計画的に建造された都市であるため、建築の分布は合理的で、美観を呈し、秩序立っている。北京の城壁、城門、道路と中軸線の全体的な分布は雄大な規模で、厳粛で、整然としている。

張恨水は『啼笑因縁』でこの分布を意識し、南方の読者にこう紹介していた。「北京の城は、東西南北が判然した處で、通りは皆北から南へ、東から西へと續く」。[49]

一と二は、建築の美を体現している。張恨水は 40 年代のエッセーで「東方の建築美を代表できる都市は、世界において北平を除けば他に見つからない。」[50]と感嘆した。この感嘆は張の、戦争によって北京城が破壊されることへの畏怖を表している。幸いにも、この北京城の建築全体は、日中戦争によっても破壊されなかった。1951 年に梁思成は「北京建築の全体的システムは世界中でもっとも完全に保存されている、そして伝統的で、活力がある、もっとも特殊な、もっとも珍しい傑作である。」[51]と述べ、陣内秀信らも「個々の建築の構成を周辺の都市のコンテクストから切り離さず、密接な結びつきのもとに捉えることが重要だ」と述べた。[52]

---

[47]鄧雲郷「袁良轶事」,『宣南秉燭譚』、河北教育出版社、2004 年、227 頁。原文は「似乎还数袁良多少做了一些事。拆除皇城城墙，清除各处垃圾脏土，修北京最早的柏油马路，除城里的而外，还修了西直门直通颐和园的，路面尽管很窄，但也不错了。当时汽车不多，清华、燕京两校的老式大型客车，日日奔驰于这条路上，也很给师生带来了方便。凡此种种，都是在一九三三到一九三五这两年中完工的。」

[48]原文は「北京是在全盘的处理上才完整地表现出伟大的中华民族建筑的传统手法和在都市计划方面的智慧与气魄。」梁思成「北京――都市計画中的無比傑作」、『新観察』1951 年 4 月。

[49]張恨水『啼笑因縁』第一回。日本語訳は飯塚朗訳『啼笑因縁』（生活社、1943 年）による。

[50]張恨水「五月的北平」、『独鶴與飛――張恨水経典散文』、陝西人民出版社、2009 年、196 頁。原文は「能够代表东方建筑美的城市，在世界上除了北平，恐怕难找第二处了。」

[51]原文は「北京建筑的整个体系是全世界保存得最完好的，而且继续有传统的、活力的、最特殊的、最珍贵的艺术杰作。」梁思成「北京――都市計画中的無比傑作」、『新観察』1951 年 4 月。

[52]陣内秀信，朱自暄，高村雅彦編『北京：都市空間を読む』、東京 ： 鹿島出版会、1998 年、43 頁。

その三は、建築群が山水、園林などの自然のイメージと有機的に結びついていることである。北京城内には、皇室園林の三海（北海、中南海）と民間の什刹海の水系がある。西郊には西山と昆明湖という山水システムが城内に望まれる。もっとも、皇室園林から私人の四合院に至るまで、緑が多く、あたかも「森の都市」であるといえよう。張恨水は『啼笑因縁』の冒頭の段落で、「到る處に樹木があるから、雨上りのあと、西山に行つてこの古都を眺めてみたら、樓臺宮闕は緑樹の間に半ば見え隠れて、まことに北方の雨の喜びを感ずるであらう。」と描写した。[53]老北京人の老舎もそれを懐かしみ「北平では人為の内に自然が現れ、ほとんどどんなところでも込み合うことなく、また静かすぎるわけではない。最も小さい胡同のなかの家にも木がある；最も広々としたところでも商店街と住宅が近くにある。」[54]と回想した。建築と自然の融合は容易に感知されることがわかる。日本の都市計画研究者陣内秀信も、北京は「『人工』と『自然』が見事に共存して成り立っている都市といえるのだ」と指摘した。[55]

なお、二と三は、北京城の計画性を体現している。首都として、北京は計画が建造に先行する都市である。もっとも、時代が下るにつれて、国家による計画も発展していった。明代、清代の各皇帝から民国の北洋政府、国民政府まで、北京城に対する修整を行っている。この計画建造の方法が、北京城の全体性を最大限に保ったのである。

林語堂の60年代に発表したImperial Pekingでは、旧北京の精神についてこのように評論している。

Three important elements have combined to give Peking its unique character: nature, art, and the life and character of the people. Nature provides the physical environment; the art of man has adorned it with towers, palaces, and temples; the way of life of the common people, rich and poor, their habits, customs and festivals, determine whether the life of the city is to be easy, leisurely and creative, or harsh with the hustle and bustle of money-mad pettifogging merchants. Peking is fortunate in that all three elements combine in harmony. The charm of Peking lies as much in the opulence of the imperial palaces as in the quiet, sometimes unbelievably rural aspect of the households.[56]

natureは自然、山水園林などを指し、artは建築の芸術を意味する。林は自然と建築の融合を認めたのである。さらに、林は人間のライフスタイルに加えて、さらに一歩進んで北京城の調和性を議論している。都市イメージの主観性を考えれば、その「北京式」のライフスタイルを持つ観察者こそ、北京の独自な都市イメージを捉えられるのではないだろ

---

[53]同注49。

[54] 老舎「想北平」、『宇宙風』第十九期、1936年6月16日。『老舎全集』第14巻、人民文学出版社2008年8月、56頁。原文は「北平在人为之中显现自然，几乎什么地方既不挤得慌，又不太僻静：最小的胡同里的房子也有树；最空旷的地方也离买卖街与住宅不远。」

[55]陣内秀信，朱自暄，高村雅彦編『北京：都市空間を読む』、東京 ： 鹿島出版会、1998年、21頁。

[56]林语堂 *Imperial Peking: Seven Centuries of China,* Chapter One，外語教学和研究出版社，2009年，3－5頁。

うか。

本章において、全体的な北京イメージのまとめると共に、北京イメージの特徴について建築学家と文学家との対話も呈している。建築学と都市計画から見る都市北京の歴史と実情は、文学家の筆によってどのように現れるのであろうかについて、次の章で探求する。

第二章　北京を舞台とする張恨水小説における北京イメージ

序論の第一節で列挙したとおり、本論文は張恨水が民国期に発表した北京を背景とする 13 編の小説を研究対象とする[57]。そのなかには北京（北方）で発表された 5 編、上海で発表された 8 編、「金粉世家」の如く上流社会の人物を主人公とする小説、「夜深沈」の如く下層社会の人物を主人公とする小説、北京を背景とする張の代表作を含む。この 13 編の作品で出現した場所、地名を整理し、作中における北京イメージを五要素に分類した結果、表１の一覧表を作成した。作成に際しては、以下の原則を設けた。１．コンテクストによってイメージの種類を判断する。例えば、「顔を上げて雄大な前門の箭楼を見つけた」という文章では、「前門の箭楼」を「ランドマーク」と判断して、「ノード」とは判断しない。２．胡同と街の名前が出現するときには人物の居住地を提示していることが多いが、統計の際には「パス」として扱う。3. 虚構の地名は除く。4. 小説の一章中に特定のイメージが繰り返し出現する場合、数回分を 1 回と数える。5. 地名に言及するだけでなく描写を伴う場合には別項目を立てて数える。

なお、表 1 に基づいて、表 2、表 3 と表 4 も作成する。

以下では、表１によって張恨水の北京認知地図をスケッチしたのち、民国期の北京地図や都市計画と対照しながら、この認知地図について考察する。

第一節　パス、エッジ、ノードとランドマーク

一. パス

北京地図と都市計画から見た北京のパスは、以下のようにスケッチできる。

まず城内道路について、幹線道路は、南北方向で崇文門大街と宣武門大街がそれぞれ東城と西城にあり、対称的に分布する。前門大街、中華路と後門大街が南北の中軸線にある。東西方向では、故宮の南に長安街が貫通し、故宮の北には景山前街が貫通し漢花園と西安門を繋ぐ。他の幹線はほぼ内城と外城の城門から伸びる。このように碁盤目状という明らかな特徴があるほか、幹線道路と支線道路の分布を考えれば、南北方向の道路を脊柱として東西方向に垂直に多くの胡同が突き出る魚の骨のような形をした道路構成が見られる。[58]もっとも、王南によれば、この東西方向に垂直に突き出ている胡同が住宅として快適な南北の向きになっているのに対し、南北方向の道路は商業の店先に適しているという。こ

[57] 未完成作品は除外した。

[58]趙迪、肖金亮「明清北京城市意象之初探」、『科技信息』2006 年第 11 期。

のように、「賑やかさのなかに静けさをのこす」という形で、商業区と居住区が有機的に結びつけられるようになった。[59]陣内秀信らも、「幹線道路と胡同からなる北京の道路計画は、高密で繁華な商業地と快適な環境の住宅とを合理的に分ける土地利用と結びついたものであることが読み取れる。」と論じた。[60]これはまさに北京のパスの独自性であると言える。

次に郊外道路について、主に以下の三つの道路がある。すなわち東郊には朝陽門から大黄荘まで約 10 キロの道路が、西郊には西直門から香山・清華大学の方向に約 23 キロ、阜成門から三家店まで約 26 キロの道路がある。[61]

さて、張恨水の 13 部の作品における北京のパスを考察してみよう。

本論文の考察する作品においては、パスは一般的に「街」「橋」として現れている。「胡同」は多くの場合住居空間として出現するが、北京のパスの独自性を考えれば、「住居」と同時に「通る」という意味が加わるので、「パス」ともなっている。13 部の作品のなかに、パスは人物の行動様式によって散見される。総計 31 のパスのうち、一回しか出現しないパスは 20 ある。これはパスの出現の偶然性を証明するのではないだろうか。出現頻度の最も高いのは長安街（8 回)、石頭胡同（6 回)、前門大街（4 回)、韓家潭（4 回）と廊坊頭条胡同（4 回)。そのなかでも、長安街は東西方向の幹線道路として重要性をもつ。前門大街は中軸線に当たり、重要な商業区でもあった。石頭胡同と韓家潭は清末と民国の著名な花街であった「八大胡同」の内の二つで、前門商業地域に属していた。廊坊頭条胡同も前門商業地域に位置していた。

分布からみれば、内城のパスが 18[62]、外城のパスが 11 ある[63]。外城のパスは宣武門、前門、崇文門の辺り、すなわち当時の外城の繁華地域に集中している。城外には西山までの大通りが２つあり、北京城と西山の連絡通路を示している。

パスに関する描写は種類も回数も比較的少なく、出現は偶然であるといえる。実は、単に街の名前に言及するというよりも、真の「パス」は「順路」として働く存在と言ってよい。どこからどのような順路に沿ってどこに到着する、という形の描写は、作家の都市に対する認識をもっともよく体現している。例えば：

西四牌楼に着くと、西から来たり、西へ行ったりする人がふだんより多いのが見える。……さらに西へ行くと、もうすぐ白塔寺に着く……[64]（金粉世家 1）

ここから南へ行くと、先農壇の外壇である。[65]（啼笑因縁 1）

---

[59]王南「伝統北京城市設計的整体性原則」、『北京規劃建設』2010 年第 3 期。
[60]陣内秀信，朱自暄，高村雅彦編『北京：都市空間を読む』、東京 ： 鹿島出版会、1998 年、46 頁。
[61]王亜男『1900 年―1949 年北京的都市規劃與建設研究』（東南大学出版社 2008 年）128 頁を参照。
[62]北新橋大街，草場胡同，崇文門大街，大喜胡同，东单大街，东四三条胡同，花枝胡同，槐树胡同，南下洼子，南長街，水車胡同，王府井大街，西河沿，西四大街，羊尾巴胡同，月牙胡同，長安街と府右街、総計 18。
[63]草場六条，韓家潭，廊坊頭条胡同，煤市桥，南横街，前門大街，陕西巷，石頭胡同，太平街，桜桃斜街、蓮花河、総計 11。
[64]原文は「到了西四牌楼，只見由西而来，往西而去的，比平常多了。…再往西走，…快到白塔寺…」
[65]原文は「由這里向南走便是先農壇的外壇」。

ただし、13 部の作品において、順路の形で描写された「パス」は非常に少ない。その原因は以下のように推測できる。案内書とは異なって、小説の読者は登場人物の移動の道筋よりも、点としての活動場所に興味をもつ。そこで作家は文章の冗長さを避けるため、ストーリー展開上、必要としない場合は順路を描写しない。もし「街」が物語の発生する場所であれば、ストーリー展開上必要であるため、「順路」としてパスが描写される可能性が高くなる。例えば、『夜深沈』のなかで、主人公の丁二和は、街でヒロインの月容に出会ったとき、道を教えて、「ここから北に行って、東に曲がれば、北新橋大街に着く。」「北新橋から先は東直門だ。」[66]丁二和の職業は馬車の御者であるため、路線の描写が時折出るが、これも物語の設計と関わっている。

二．エッジ

王朝が建築した都市として、北京のもっとも明らかなエッジは防衛の機能をもつ城壁である。このエッジは内城の城壁、外城の城壁、皇城の城壁、紫禁城の城壁を含んでいた。そのうち皇城の城壁は 10－20 年代の建設によってほとんど撤去された。これ以外の城壁はほぼ保存され、30 年代まで都市の主なエッジであったと見られる。城内のエッジも大半は「壁」の形で存在していた。家屋と四合院の外壁、より大型の建築または建築群の外壁がエッジの形成に一役買っている。例えば皇室宮苑、王府、廟宇などである。この壁により構成されたエッジを、朱文一は「エッジモード」と概括し、西洋の「ランドマークモード」とはっきりと区分して、中国伝統都市の独自性のひとつと論じた。[67]

北京のもっとも明らかな「エッジ」は城壁であるにもかかわらず、13 部の作品のなかで、直接城壁が描写されたり、言及されることは多くない。これは、「エッジ」の「連続状態を中断する」という性質に鑑みて、人物が都市のなかで活動するとき、特殊な場合以外はなるべく「エッジ」を避ける傾向があるためではないだろうか。ただし、「エッジ」は常に人物の頭のなかに隠れた存在でもある。「城壁」は直接言及されないが、「城を出る」「城に入る」「城の内」「城の外」という形で常に人物の意識のなかに存在している。

1901 年の前門東駅の落成と 1906 年前門西駅の落成が鉄道を城壁のうちに導入した。鉄道もエッジの一種であるが、13 部の作品のなかでは、城壁と同様に出現頻度が低い。

三．ノード

北京城の構造を見るに、ノードはほぼ城内と城外の交通要路である城門であった。そのほか城内道路の交差点もノードの一つであった。ノードとしての交差点は一般的に商業活動の場所で、牌楼や市口の形をしている。城を出る交通を考えれば、西直門、阜成門と朝陽門がもっとも重要なノードであった。

13 部の作品の中でノードは主に城門、道路の交差点または牌楼（大通りの交差点に設置される）として現れる。城門が 11 種[68]、交差点と牌楼が 6 種[69]ある。ほかに鉄道駅が 1 つ[70]

---

[66] 『夜深沈』第一回。原文は「由这里向北走，向东一拐弯，就是北新桥大街」「由北新桥过去…是东直门」。
[67]朱文一『空間·符号·城市：一種城市設計理論』、中国建築工業出版社、1993 年。
[68]東安門、東便門、東直門、阜成門、広安門、後門（地安門、前門（正陽門）、西便門、西直門、宣武門、永定門。

あって、23 回ほど出現しており、北京と地方の交通連絡の重要性を示す。

郊外への通路としての城門の数とそれらの出現回数を合計すると、西側には四つの城門（西直門、阜成門、広安門、西便門）があり、合わせて 17 回出現したのに対し、東側は四つのうち二箇所（東直門、東便門）が 4 回出現し、南側は三つのうち一箇所（永定門）が 3 回出現し、北側の三つはまったく出現しない。こうした状況はある程度郊外旅行の道筋を示唆している。西郊には西山や頤和園などの名所があるため、すでに北京イメージの切り離せない一部となっている。第一章に述べたように、西郊には西直門から香山、清華大学の方向に約 23 キロ、阜成門から三家店まで約 26 キロの道路があった。このように、西側の城門は重要なノードとなっており、よく言及されることがわかる。

前述のように、パスとしての道路の出現が少なくなるにつれて、ノードとしての交差点の出現も減少する。

ノードとしては、鉄道駅の西車駅と東車駅は高い頻度で出現している。鉄道駅は近代化の明らかな成果で、地方から北京への交通における革新的な進歩だといえる。1896 年に北京から天津へ向かう鉄道が開通して、1912 年には天津から南京浦口へ向かう鉄道（津浦鉄道）が全線開通した。民国期、北京から張恨水及び作品の主人公たちの故郷である江南地域へ向かう交通は、ほとんどこの二つの鉄道路線に頼っていた。このように、鉄道駅は北京と地方の間になくてはならない交通の要衝なのである。

四. ランドマーク

中国古代の建築規則はランドマークを形成しやすいものであった。もっとも明らかなマークは屋根の形式を取って現れた。[71]例えば皇室建築の廡殿（寄棟造）と瑠璃瓦は城内のもっとも高い建築群であったため、ランドマークとなりやすかった。雄大な城楼と寺塔の頂上も、高い近代建築も、同じくランドマークとなりやすい。

13 部の作品のなかのランドマークは、全て城門・塔・鼓楼のような伝統的な建物であることには注目すべきである。近代的イメージ、例えば鉄道駅やホテルのような高層の近代建築などは、まだ方位を指示する機能を有していなかったと見られる。また、主要なランドマークである鐘鼓楼・景山・天安門・中華門と前門は、北京城を南北に貫く中心線を示す。この中心線は 15 世紀に明朝が北京城を建造した時から定められ、1920 年代から 30 年代にかけて創作された作品においても方位を指示するランドマークとして驚くほどの安定性を示し続けている。このように、ランドマークに基づく北京の都市イメージは当時も伝統的に構成されたと考えられる。

そのなかで、前門と箭楼は鉄道駅の直前にあり、地方から初めて北京に来た旅客にとって、震撼させられる雄大な建築物であった。ランドマークとしても、また汽車から降りて内城に入ろうとするノードとしても、避けられないイメージであった。

---

[69]東単牌楼、煤市街口、四牌楼、西四牌楼、鮮魚口、珠市口。

[70]鉄道駅は西車駅と東車駅二つあったが、作品には言及されたとき、「車駅」と総称することが多いため、一つのイメージとして統計する。

[71]趙迪、肖金亮「明清北京城市意象之初探」、『科技信息』2006 年第 11 期。

第二節　ディストリクト

エッジに即して考えれば、もっと直観的なディストリクトは三重の城壁に囲まれた地域（内城、外城、消えた皇城、紫禁城）である。更に比較的短い「壁」によって、より小さなディストリクト（皇室宮苑、王府、廟宇など）が囲まれている。「壁」の存在のために、一つの建築群が一つのディストリクトを形成した。このようなディストリクトは、王朝時代の北京において権力が絶対的な中心を占めていたことを示している。近代化の結果、風格の類似した建築と一定の機能をもつ地域がそれぞれディストリクトを形成するようになった。例えば、王府井商業区、東交民巷、香厰などがそうである。

ディストリクトは都市の認知地図のなかで中心的な地位を占める。人々はディストリクトに入って、そのなかで観察し、参与し、満足することができる。ディストリクトがこれほど魅力的なのは、これらのディストリクトが独自の「文化の場」を創造し、人々に都市の独自性を感じさせたからである。表 4 に示した、出現する頻度の高いイメージは、その大部分がディストリクトである。

13 部の作品には、巨視的なディストリクトより、中位の、ミクロ的なディストリクトが多く出現している。つまり、建築グループあるいは一つの建築とその周辺は人物の活動が集中する場所で、独自の特徴をもつディストリクトである。

ディストリクトは都市の独自性を表すもっとも重要なイメージといえよう。ディストリクトは 13 部の作品のなかで公園、寺社、市場、遊覧地などとして多種多彩に描写されている。ディストリクトは北京のイメージを代表しているといえる。

ディストリクトの多様性を考えると、さらに詳しい分類が必要である。全部で 34 種類のディストリクトのうち、巨視的な視点から城壁が分割する地域に注目すると、内城には 14 種[72]、外城には 10 種[73]、郊外には 10 種[74]ある。ディストリクトの機能的特徴は、商業場所（10 種[75]）、遊覧地（18 種[76]）、居住空間（6 種[77]）に分類できる。対してディストリクトの環境的特徴は、伝統空間（17 種[78]）、近代的に改造された伝統空間（11 種[79]）、近代空間（5 種[80]）に分類できる。

表 4 では 13 部の作品のなかで 7 回以上出現したイメージを統計し、順序どおりに並べ

---

[72]北京飯店、東安市場、北海、東嶽廟、故宮、隆福寺、什刹海、天安門広場、雍和宮、中南海、中央公園、北池子、東交民巷、太廟。
[73]厰甸、大栅欄、琉璃厰、天橋、城南遊芸園、陶然亭、先農壇、香厰、新世界、天壇。
[74]湯山、万牲園、西山、西苑、香山、頤和園、玉泉山、海淀、丰台、南苑。
[75]北京飯店、厰甸、大栅欄、東安市場、琉璃厰、天橋、新世界、東嶽廟、隆福寺、城南遊芸園。
[76]北海、故宮、什刹海、湯山、陶然亭、天安門広場、万牲园、西山、西苑、先農壇、香山、頤和園、雍和宮、玉泉山、中南海、中央公園、天壇、太廟。
[77]北池子、東交民巷、海淀、香厰、丰台、南苑。
[78]海淀、東安市场、東嶽廟、隆福寺、什刹海、厰甸、大栅欄、琉璃厰、天橋、雍和宮、陶然亭、湯山、万牲園、西山、西苑、玉泉山、丰台、南苑。
[79]北池子、北海、故宮、天安門広場、中南海、中央公園、先農壇、香山、頤和園、天壇、太廟。
[80]北京飯店、城南遊芸園、東交民巷、香厰、新世界。

る。中央公園は 11 部の作品の中で合わせて 61 回出現し、圧倒的な優位を示す。それより下は、西山（26 回）、東安市場（24 回）、鉄道駅（23 回）、天橋（23 回）、北海（20 回）などとなっている。描写を伴って出現する頻度の高い順では北海（9 回）、中央公園(8 回)、西山（6 回）、先農壇（5 回）、長安街（4 回）となっている。鉄道駅を除いて、これらのイメージはすべてディストリクトである。リンチの理論によると、これらのイメージはイメージアビリティ（Imageability）が強いため、容易に見られ、描写される。それではこれらのイメージのイメージアビリティはどのような要素に基づくのか。その答えとして、以下の数点が考えられよう。

1．民国期に開放された旧清朝皇室の空間イメージは非常に魅力的で、張恨水はしばしばこれらの空間に言及しており、意識的な描写を伴い出現する回数がもっとも多い。第一章に述べたように、最も早く開放されたのは社稷壇を改造した中央公園で、1915 年のことである。その後、先農壇、故宮博物院、北海、中南海、天壇が次々に開園した。1929―35 年の各公園の入場券の価格を比べると、頤和園は最も高い 460 銅元で、中央公園（1928 年以降中山公園と改名)、北海、中南海はいずれも 20 銅元である。そして人気指数を見ると、1935 年の入場人数は、中山公園が一位（519189 人）で、続いて北海（465002)、頤和園（37465）となっており[81]、入場券の安かった中山公園と北海が大人気であったことがわかる。

かつては立入禁止であった皇室空間は、快適な遊覧地のイメージが非常に色濃く、北京の代表的なイメージとなっている。出現頻度のもっとも高い中央公園、特にその園内の來今雨軒という建物は、当時の文化人のサロンであった。1921 年、中国現代文学史上で重要な文学団体である文学研究会が、ここで創立された。魯迅や張恨水もここへよく出かけて、作品を構想し創作することもあった。[82]注意すべきは、このようなディストリクトは外観はかなり伝統的だが、公園としての機能はまったく近代的であったという点であろう。

2．西郊の山水人文景観は北京城内からは遠く交通も不便だったが、北京イメージの形成に効果的に参与している。西山は太行山の支脈で、北京の西側にある遠郊の各県に伸びている。香山と玉泉山は北京城に近い西山の一部で、頤和園と同様に著名な景勝地を構成している。この一帯は北京城から 10 キロ以上離れているにもかかわらず、北京市民の車、馬車などによる行楽の目的地となっていた。そのなかでも香山、頤和園は皇室空間を改造して作られた近代的公園でもあった。城内の公園より距離が遠く、交通がある程度不便だったため、人気は相対的に低かったことがわかる。西山の南麓には八大処という寺院の集まりがあり、民国以前でも有名な巡礼地であった。西山は香山・玉泉山・八大処などの遊覧地の総称で、総合的に出現する頻度が高いことがわかる。

3．天橋や什刹海のような中下層民衆の空間も作家の関心を引いていた。天橋市場は 1914 年に設置され、のちに最大の平民市場となり、買い物の場所であるだけでなく、演芸

[81]許慧琦『故都新貌 ： 遷都後到抗戰前的北平城市消費(1928-1937)』、臺灣學生書局 2008 年、137 頁。
[82]張は『啼笑因縁』の自序のなかで、來今雨軒で小説を構想したと記述している。

活動も行われる場所であった。陣内秀信らは天橋を考察して、「都市の解放区としての外城では、きわめて成熟した都市文化が開花した」と高く評価している。[83]什刹海は内城の北部にある湖で、民国以前から平民の休憩所であった。文化人である張は上層社会に進出していた一方で、作品のなかに下層民衆の楽園である空間も興味深い様子で取り込んでいる。

4. 東安市場は官立常設市場として 1903 年に紫禁城の東側に設けられた。1906 年にはすでに北京のもっとも賑やかな市場となっていた。[84]生活用品、食品と百貨の売り場、本屋、飲食店、京劇劇場、映画館などを含む総合市場であった。1920 年の火災の後、再建された市場は西洋のモチーフを取り入れた煉瓦造りの重層的な洋風建築群に生まれ変わった。ここは張の作品のなかで、主に中上層階級の人物が出入していた場所である。表４によると、東安市場は言及された回数がもっとも多い商業場所でもある。

以上、13 部の作品のなかで外城にあるイメージは 33 種、内城にあるイメージは 34 種（うち東城 19 種、西城 16 種[85]）、城外にあるイメージは 13 種、中軸線にあるイメージは 10 種[86]と、総計 89 種ある。内城と外城、東城と西城それぞれの分布はほぼ平均している。総合的に見て、張の北京認知地図は基本的に完全な北京地図を成しているといえる。

第三節　イメージの出現頻度：外部要素と内部要素の共同作用

一般的に都市イメージの形成に影響を与える要素には、内部要素と外部要素の二つがある。内部要素は主体自身の経験や需要によるイメージ構成であるのに対し、外部要素は主体の外在環境の認識によるイメージ構成である。

まず、認知地図の形成過程を考察してみよう。リンチの理論によれば、人々の環境に対する認識は自身の需要から始まる。初めて都市に来た人がもっとも早く認識する場所は住所、仕事の地点と生活用品が買えるところである。これらの最初に認識された点は基本的なノードとなり、これらのノードを連接する道路は基本的なパスとなる。周囲の環境を見慣れるにつれて、生存の需要以外の各種の需要によって、これらの基本的なノードとパスはだんだん伸びていく。こうして最終的に、パスとノードのシリーズで構成される認知地図が形成される。

---

[83]陣内秀信，朱自暄，高村雅彦編『北京：都市空間を読む』、東京 ： 鹿島出版会、1998 年、166 頁。
[84] 「若論繁華首一指，請君城内赴東安。」『京華百二竹枝詞』、1906 年。北京古籍出版社 1982 年版による。日本語訳は「どれが市内一番賑わい市場かと言えば、内城にある東安市場に行きなさい。」
[85]長安街は東西に貫通するため、東城と西城それぞれについて数える。
[86]前門大街は外城にあるものとして数えると同時に、中軸線としても数える。

一、住所と通勤地から考察する張恨水の北京イメージ

北京に着いたばかりの張恨水は懐寧会館に身を寄せ、間もなく潜山会館に移った。いずれも安徽省の県の会館で、会館が集まっている宣南地域（宣武門の南）にあった。張の小説「春明外史」の主人公楊杏園が安徽会館に住み、「記者外伝」の主人公楊止波が皖中会館（皖は安徽省の略称）に住んでいたという描写は、作者が初めて北京に着いた時の情景を再現している。

さて、張恨水の北京における住所や通勤地について考察することにしよう。上述の通り、1919 年に北京に着いたばかりの張は懐寧会館に泊まり、間もなく潜山会館に移った。懐寧会館は閻王廟街（今の迎新街）、潜山会館は西草場胡同内にある山西街に位置し、いずれも宣武門の南の外城地域にあった。1926 年に張恨水は家族を北京に呼び寄せ、会館から未英胡同 36 号の四合院へ移住した。未英胡同は西長安街の南、宣武門大街の東に位置していた。1930 年に張は上海で世界書局と契約書類を作成した後、北京へ戻り、大柵欄 12 号に引っ越した。この「大柵欄」は一般に前門の「大柵欄」のことと考えられているが、実は後の「鐘声胡同」のことである。なぜなら、前門の「大柵欄」は繁華な商業地域で、「曲折」する「七つの中庭」があるはずはない。[87]劉東黎はこの「大柵欄 12 号」が「前門の外の賑やかな市場」に位置してはおらず、「静かな後街にある」と論じている。[88]更に張の息子も「一軒の庭が曲がった広々とした家を借りた。」住所は大柵栏 12 号「(前門外の繁華街ではない。北京には三つの大柵栏胡同があり、同じ漢字だが、読み方が違い、北京地元の人はみんな知っている。)」と記した。[89]「大柵欄」の旧名を持っている鐘声胡同は西長安街の北、西単北大街の東に位置する。1933 年の年頭、張は南方に移住したが、秋には北平に戻り、大方家胡同 12 号に住むようになった。大方家胡同は朝陽門内大街の南に位置していた。1935 年に張は上海へ行き、抗日戦争が終わるまで北京には戻らなかった。1946 年に張は北京へ戻り、北溝沿（今の趙登禹路）甲 43 号邸宅を購入して入居した。1951 年に張は西四磚塔胡同 43 号（後の 95 号）に引越し、逝去するまでそこに住んだ。

1924 年まで、張恨水の仕事の地点は頻繁に変わっている。この間、彼は前後して北京「益世報」の編集者、蕪湖「工商日報」の記者、世界通訊社の編集長、北京「今報」の編集などを務めた。それ以外に、職を辞して家で上海の「新聞報」「申報」のために記事を書いていたこともある。この時期、「益世報」の新聞社は南新華街にあった。

1924 年に張は成舎我の「世界晩報」（のちに「世界日報」）に入社し、6 年間勤めた。「世界晩報」は創立当初は西単手帕胡同 35 号にある成舎我の住宅を本社としていたが、

[87]張恨水はエッセー「影樹月成図」のなか、大柵欄 12 号の住居を回想した：「以曲折勝。前後左右，大小七個院子…」。

[88]劉東黎『北京的紅塵旧夢』、春風文芸出版社 2002 年、146 頁。原文は「並非今日前門外的閙市，而是坐落在僻静的後街」。

[89] 張伍『我的父親張恨水』、春風文芸出版社 2002 年，131－132 頁。原文は「租到了一所庭院曲折、比較寛大的房子」「 （不是前門外的閙市，北京共有三処大柵欄胡同，字雖同，但読音絶不同，老北京均知。)」

1925 年に「世界日報」が創立され、「晩報」と共に一緒に石駙馬大街（現在の新文化街）90 号に拠点を移した。

1930 年張恨水は「世界日報」を辞職して、以後は創作に専念した。1931 年、彼は原稿料で北華美術専門学校を創立し、自ら学長になるとともに国文の教員も兼任した。この学校は東四十一条 21 号にあり、1937 年の戦争勃発まで運営された。

1946 年に張恨水は北平「新民報」の責任者に就任し、1948 年までその役を務めた。北平「新民報」の所在地は東交民巷の瑞金大楼である。

張恨水の北京での居住地の大体の位置を赤い数字で以下のように表示した。1．懐寧会館。2．潜山会館。3．未英胡同 36 号。4．大柵欄 12 号。5．大方家胡同 12 号。6．北溝沿甲 43 号。7．磚塔胡同 43 号。また通勤地の大体の位置を青い数字で以下のように表示した．南新華街―「益世報」の新聞社。2．西単手帕胡同 35 号―「世界晩報」の新聞社。3．石駙馬大街 90 号―「世界日報」の新聞社。4．東四十一条―北華美術専門学校。5 東交民巷―「新民報」の新聞社。

なお張恨水の同時期における住所と通勤地をひとつひとつ対応させると以下のようになる。赤の 1、2 は青の 1 に対応する；赤の 2 は青の 2，3 に対応する。赤の 3 は青の 3 に対応する。赤の 4、5 は青の 4 に対応する。赤の 6 は青の 5 に対応する。

図 1 を考察すると、赤の 4 から青の 4 まで（大柵欄 12 号から北華美術専門学校まで）の通勤距離と、赤の 6 から青の 5 まで（北溝沿甲 43 号から「新民報」社まで）の通勤距離がもっとも長い。これ以外の通勤距離はどれも相対的に短い。1930 年まで、張恨水の住所と通勤地は相対的に内城の西南部と外城の宣南の辺りに集中していた。内城の西南部は西単に近く、宣南は前門地域に近い。

では張恨水の通勤方式はどうであったか。近距離の場合、張は徒歩を選んだに違いない。赤の 4 から青の 4 までの 6 キロ前後の距離でさえ、張は徒歩で行ったことがある。張はあるエッセーのなかでこう書いた。「自宅は城の西南角にあり、通勤地は城の東北角にあった。行き来すると、…東長安街は通らなければならない道であった。この道を歩いて…」[90]このことから、張は徒歩を好んで選んだことが推測できる。ちなみに、張は長安街を歩くのは楽しいと考えていたらしい。『斯人記』の登場人物は「長安街は両側の木が青々とし、道が平坦です。ゆっくり歩いて帰れば快適でしょう。」と言っている。[91]1946 年―1948 年の間、張は赤の 6 から青の 5 まで（北溝沿甲 43 号から「新民報」社まで）を自動車で通勤していた。張の息子は「新聞社の所有者が父親専用の自動車を配置した」と、父親が自動車で鉄道駅へ自分を迎えに来たことを回想している。[92]この時の張は北京を自動車で

[90]張恨水「想起東長安街」、曽智中ら編集『張恨水説北京』、四川出版集団・四川文藝出版社、2007 年、30 頁。原文は「我的家在西南城角，而工作地点，却在東北城角，両下来往，使館区内的東長安街，是必経之地。而在這一条街上走…」

[91]原文は「長安街両辺的树木，長得青郁郁的，馬路平坦坦的，慢慢地走回去，是非常舒服的。」『斯人記』第二十回。

[92]張伍『我的父親張恨水』、春風文芸出版社 2002 年，266 頁。原文は「报社主人分配了一辆小汽车给他专用」。

移動していたと推測できる。

このように、1919－1935 年の間、張は北京において、多くの場合は徒歩で移動したと推測できる。徒歩は都市に対する認識に重要な役割を持つ。徒歩の場合、パスの選択と距離にかかる時間は主体によって自由に決められる。徒歩によるパス、ノードとランドマークに対する認識は人力車や電車、自動車を使った場合の認識よりはるかに意味深い。人々は交通機関により通過した地域に対して必ずしも認知地図を形成することができない。それに対し、徒歩で通過した地域に対しては、ほとんどの場合これを認知地図に取り入れることができる。

張は北京を認識するのに有利な以下の条件を備えていた。1．彼の住居と仕事の地点は北京城内の繁華な中心地域に近かった。2．彼は徒歩を選ぶ傾向がある。3．記者という職業のため、彼は北京城の内外にわたって行き来し、各階層が出入り場所に出かけていた。1924 年に『春明外史』を連載し始めたとき、張はすでに 5 年間北京に住んでいた。1929 年に北京イメージが最高の頻度で出現する『啼笑因縁』を創作するときまでに、張は 10 年間北京に住んでいた。抗戦前では北京を舞台とする最後作品『夜深沈』の創作までに、張は約 15 年間北京に住んでいた。張の息子の張伍が「もし胡同に十年か八年住んだことがなければ、北京人とはいえず、北京との間に紗のような隔たりがあって、結局は北京を認識しているわけではない」と言ったが、[93]張恨水は確かに北京の人としての条件を備えている。

さて、張恨水の北京における住居と通勤の経験は、いかにして北京の認知地図に影響を及ぼしたのか。まず、1924－1929 年に連載発表された『春明外史』に出現するイメージを分類すると、35 種のイメージのうち、宣南―前門の外城地域のイメージは 17 種[94]に上り、半分弱を占めている。これは 1919－26 年に張が宣南地域の会館に住んでいたことと明らかに対応している。これとは対照的に、1927－1932 年に連載発表された『金粉世家』においては、この地域のイメージは全 22 種のうち 4 種、五分の一弱程度に過ぎない。1930 年に発表された『啼笑因縁』においては、この地域のイメージは 26 種中 5 種であり、これも五分の一弱ほどである。張は『春明外史』を創作するとき、北京滞在の早期に見慣れた外城地域について惜しみなく言及し、これを描写した。この滞在経験は重要な内部要素として、『春明外史』のなかの北京イメージの形成に作用したのである。

続いて 1930 年から、張は北京城の東北角に位置する北華美術専門学校に通勤するようになり、1933 年には自宅を東城（中軸線の東の内城部分）朝陽門付近の大方家胡同に移した。こうして、張の仕事と生活の重心は東城に移った。東城のイメージは作品のなかにどのように出現しているのか。表 1 の備考を参照に、1930 年以前に創作された 6 部の作品のなかのイメージを統計すると、東城にあるイメージは 75 種のうち 9 種、すなわち 12%を

[93] 張伍『雪泥印痕－我的父親張恨水』、団結出版社、2006 年、216 頁。原文は「您如果沒在胡同里住過十年八年的，您就算不上是北京人，也就和北京隔着一層紗，始終也沒認識北京…」

[94]草場胡同、韓家潭、煤市橋、陜西巷、石頭胡同、西河沿、桜桃斜街、廠甸、城南遊藝園、大柵欄、陶然亭、先農壇、香廠、新世界、西便門、西車站東車站、鮮魚口。

占めている。1930 年以後に創作された 7 部の作品の中では、東城にあるイメージは 50 種のうち 10 種、20%を占めている。つまり 1930 年以後、張の作品にある東城のイメージは相当に増えたのである。これは張の東城の滞在経験と密接にかかわっているといえる。

二、1928 年以後：北京イメージのブーム

1928 年 6 月は重要な時期である。この時に、中華民国の首都は北京から南京へ移された。それ以後、北京は北平と改名され、故都となってしまい、経済は不景気に陥った。張恨水の 13 部の作品のうち、最初の 3 部である『春明外史』『京塵幻影録』『金粉世家』は 1928 年 6 月以前に創作が始められた。他の 10 部は 1928 年 6 月以後に創作された。この時期に張の作品のなかの北京イメージはいかなる変化を遂げただろうか。

北京イメージの登場回数を平均すれば、最初の三部の作品には 10 万字あたりイメージが 2.9 種、5.8 回出現する。それに対し、他の 10 部の作品には 10 万字あたりイメージが 5.1 種、10.0 回出現する。つまり、1928 年以後に創作が始められた作品においては北京イメージが大幅に増えている。

このイメージの数量の増加は北京の地位の改変に深く関わっているといえる。では、北京が北平と改名された後、張恨水はなぜいっそう意識的に北京イメージに言及しこれを描写したのか。

1929 年創作、1930 年発表の『啼笑因縁』の冒頭では、「幾百年か永い間の名稱を傳へてきた北京だつたが、いま北平と改められて、あの首善之區といふ四字の尊稱も失はれてしまつた。然し、ここには多くの偉大な建築や、久しい文化の跡を留めて、昔ながらに親しまれる。」[95]と物語を書き始められる。表 3 によると、『啼笑因縁』は北京イメージの出現頻度がもっとも高い作品である。これらのイメージはほかならぬ「偉大な建築や、久しい文化の跡」なのである。張は北京の北平への改名を強く意識していた。北京の改名は張の「偉大な建築や、久しい文化の跡」を作品のなかに再現しようという張の意識を喚起した原因の一つであると推定できよう。言い換えれば、1928 年の遷都は張がいっそう作品のなかに北京イメージを再現することをある程度刺激した。これはなぜだろうか。

まず文学の面からみれば、「故都」というイメージは中国文学の伝統のなかの重要なモチーフであるといえる。先秦時代の『詩経』に収められる「黍離」という作品は周の首都が鎬京から洛邑に移った後、鎬京の宮殿の荒れ果てた様子を描写し、世の栄枯盛衰を嘆いたものである。戦国時代の屈原の「哀郢」という詩は楚国の首都であった郢が打ち捨てられた様子を描写し、旧郷と母国を懐かしんでいる。この二つの作品以降、「故都」を描き、歴史の盛衰と転変を嘆ずるという文学伝統が伝えられてきた。その中では特に南京、長安などの都市が「故都」として描写されることが多い。故都の雰囲気はほぼ唐代詩人の劉禹

[95]張恨水『啼笑因縁』第一回。日本語訳は飯塚朗訳『啼笑因縁』（生活社、1943 年）による。

錫の「西塞山懐古」における「故壘は蕭蕭たり　蘆荻の秋」のように、蕭条たる秋の景色に代表される。中国の文人にとって「故都」というイメージは魅力的であるといえる。1930 年代、郁達夫はエッセーの名作「故都的秋」を創作し、故都北平の秋の景色を描いた。1928 年以降の張恨水は、故都である北平に対し、創作のインスピレーションを触発され、北平の都市イメージを呈示したのではないだろうか。

次に現実の面からみれば、原因は二つあると考えられる。一つ目は、30 年代華北の時局である。1931 年に日本軍が中国東北を占領してから 1937 年の日中戦争勃発まで、北平は常に戦争の暗い影に覆われていた。張恨水本人も脅かされたため一時的に北平を去ったことがある。張は国家の危機と故都の危機を感じ、それを作品中に表現したと推測できる。

より重要な二つ目の原因は、「文化古都」のイメージを立ち上げようとする努力である。この時期の北平は首都の地位を失ったため経済が不景気になった。民国早期に建設された香厰新市区は、一時的に繁華したもののすぐに衰えた。この香厰新市区の衰退にしたがって、1928 年以前に創作された『春明外史』には出現していた城南遊芸園、新世界商場、香厰というイメージは、その大部分が張の以後の 12 部の作品にはほとんど出現しなくなる。[96]この経済不況に対して、北平は観光業を発展させ経済を促進せねばならなかった。1933－1935 年、北平市長の袁良は「遊覧区建設計画」を制定して、名所旧跡を保護し、故都の雰囲気を作り出し、観光客を誘い、「世界文化の遊覧区」を造営するよう努力した。北平の文化界も「文化の古都」の雰囲気を作り出し、古都の文化を保存することに努めた。袁良が北平の市長に就いていた期間には、北平旅行の指南書が続々と出版され[97]、その中でも馬芷庠編集、張恨水審定の『北平旅行指南』は著名であった。『啼笑因縁』には小説をガイドマップ化しようという作品の意識もあったという。[98]『啼笑因縁』の発表と流行は北平の旅行業を促進する効果をもたらしたともいう。[99]この指南書は張恨水の小説作品と同じ動機を持っているのではないだろうか。一方、「文化古都」の北平を描写した文学書も次々と出現した[100]。このようにして、北京は当時においても伝統的気風に富む都市であると人々に認知され、これは時代の共通認識であったともいえる。論者の董玥によると、1928 年以後の北平は都市の過去を改めて作り上げ、形成中の国民国家の歴史と繋げようとしていた。[101]国民政府は伝統を発見するという方式で、北平を国民国家の文化的中心の象徴とした。

総じて、張の個人的な趣味と文化界の思潮という二点が、1928 年以降の北京イメージの増加に作用したといえる。

---

[96] 『京塵幻影録』のなかには城南遊芸園が一回、新世界が一回出現する。『京塵幻影録』は 1928 年までに書きあげられた。

[97] 1929 年北平民社『北平指南』、1935 年北平市府『旧都文物略』、1934 年北寧鉄路局『北平旅遊便覧』、1936 年経済出版社『北平旅行指南』などがある。

[98]阪本ちづみ「都市小説として『啼笑因縁』を読む」、『お茶の水女子大学中国文学会報』10、 1991 年。

[99]劉東黎『北京的紅塵旧夢』、春風文芸出版社 2002 年，148 頁。

[100]例えば、味橄『北平夜話』中華書局 1936 年、上海「宇宙風」雑誌「北平特輯」1936 年。

[101]董玥『民国北京城』、三聯書店 2014 年、81 頁。

三、上海発表作品における北京イメージの増加

表 2 は 13 部の作品の一部ごとについて、作中に出現したイメージの種類と回数を統計したものである。表 2 の総計を考察すると、『春明外史』『金粉世家』『啼笑因縁』の三作に出現する北京イメージの数量が最大で、質量が最高（描写を伴う回数も最大であるため）であることがわかる。この三部の作品は張恨水のもっとも著名な作品でもある。このように、全国を風靡した張の名作と北京イメージをよく表現した作品が一致していることは、偶然とは思われない。北京イメージを生き生きと描写したことが、張の作品が成功した原因の一つではないだろうか。

表 3 はそれぞれの作品に出現したイメージ数をその作品の字数で割って平均して、10 万字あたりのイメージ数を統計したものである。『啼笑因縁』には 10 万字あたりイメージが 9．4 種、24.4 回出現し、他の作品のイメージに対し圧倒的な地位を占めている。さらに、北京（北方）で発表された 5 部の作品と上海で発表された 8 部の作品を比べると、平均して前者は 10 万字あたりイメージが 3.6 種、6.9 回出現し、後者は 10 万字あたり 4.6 種、9.4 回出現するという結果が出た。上海で発表された作品に出現した北京イメージの種類と回数は北京（北方）で発表された作品より明らかに多い。このように、北京で発表された作品と比べて上海で発表された作品には北京イメージに関する描写がずっと多いといえよう。その原因として、以下の二点を指摘できるだろう。

まず、作品のなかの虚構の地名と場所は、前述の通りこの統計の対象外としているが、北京で発表された作品中には、上海で発表された作品より多くの虚構の地名と場所が出現する。例えば、『金粉世家』での主人公らの住所である「烏衣巷」「落花胡同」「圈子胡同」、葬儀場である「南平寺」、社交活動の場所である「西来飯店」などはすべて虚構の場である。

なぜ『金粉世家』のような北京で発表された作品に、多数の虚構のイメージが導入されたのか。北京の新聞社で記者また編集者として勤務していた張は北京社会の各方面を熟知しており、社会の時事問題を収集してこれを素材として小説を創作したため、彼の小説の内容は実在の人物や事件への取材を元にしていると、発表当時からたびたび取り沙汰されてきた。張自身も「当時の人に基づき、当時の社会出来事を利用して小説を書く際には、特に気をつけねばならないことは知っていた。小説を書く人が手当たりしだい取り出すと、（中略）人は故意にプライバシーを暴いたのではないかと疑うであろう。」と語っている。[102]『金粉世家』は総理の大家族を描いているため、北京の特定の官僚家庭をさすのではないか、という読者の過度な好奇心をかき立てる恐れがあり、作者は意識的に数多くの虚構のイメージを使用したと推測できる。『春明外史』などの社会時事を当てこする内容の作

[102]原文は「……知道以当時人，運用当時社会情形写小说，要特別加以小心。写小說的人是信手拈來，……而人家會疑心你是有意揭發陰私的。」張恨水「写作生涯回憶」十八。張占国ら編集：『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、30 頁。

品にも、虚構のイメージを紛れ込ませているほか、実在の人物と事件の場所を小説のなかに登場させる場合には、実在の地名の出現を避けたりあるいは曖昧にしたりしていることが多い。このように、北京イメージは北京発表の作品においては上海発表の作品と比べて少なくなったのであろう。

つぎに、北京で作品が発表される場合、張は北京の読者と同じコンテクストのなかにいる。そのため、同じ北京在住者と北京に関する情報を共有するためにわざわざ北京の都市イメージに言及し、紹介する必要はなかっただろう。『啼笑因縁』などの上海で発表された作品は状況がまったく異なる。作家は北京以外の読者に向けて北京の物事を物語っており、その場合、なるべく北京の特徴を描きだそうとして一つ一つの都市イメージに言及し、その由来・現状・風景・機能を詳しく説明する傾向がある。こうして張の小説は、上海の読者にとって「北京旅行ガイド」の役割を果たしていたという議論がある。[103]その結果、ある現象が起こった。当時の『啼笑因縁』の南方の読者が北京へ旅行するときには、必ず天橋を訪れたと言われているのである[104]。1990 年代に至っても、海外の華僑の読者が北京滞在中、天橋を訪れようとしたことがある。[105]この二事からも『啼笑因縁』の「天橋」に関する描写が、南方と海外の読者にとっていかに魅力的であったかがわかるだろう。

総じて、上海で発表された作品と北京で発表された作品のイメージの総数上の差異は主に作品の創作背景と読者グループ、つまり作品の個性によるものである。

四、伝統的イメージの優位

表 1 と表 4 に示したイメージの種類と構成は、いったいどのように形成されたのだろうか。

表 4 にある出現頻度の高いイメージのなかには、近代的なイメージ（鉄道駅、東安市場）が 3 つあるのに対し、伝統的なイメージは 12 ある[106]。このことから、北京イメージの形成においては、伝統的なイメージが近代的イメージと比べて感知されやすいと概括できる。

これについて初歩的な分析を行うと、外部要素と内部要素との共同作用による結果であると言うことができる。

第一に、最も明らかで、穏やかな外部要素はというと、北京は最初から国家によって計画造営され、何百年もの間帝国の首都として独自性を持ち続けてきたため、計画性や安定性という遺産がもっとも感知されやすいのは当然だろう。北京は民国初期に首都であった間こそ近代化に向けての改造が緩やかに進められていたが、1928 年の南京遷都後は、都市の近代化がほぼ停滞した状態であり、その安定した遺産はほとんど破壊されなかった。[107]

---

[103]阪本ちづみ「都市小説として『啼笑因縁』を読む」、『お茶の水女子大学中国文学会報』10、 1991 年。
[104]劉東黎『北京的紅塵旧夢』人民文学出版社 2009、148 頁。
[105] 張伍『我的父親張恨水』、春風文藝出版社、2002 年、114 頁。
[106]長安街は伝統的と近代的なイメージが混じたイメージであると考えられる。
[107] 1915 年に交通不便のため、前門地域の城壁が一部に取り壊された。当時社会から大反発を招いた。（史

もっとも、陣内秀信らが論じたように、「近代北京の変容は、中国の典型的かつ歴史的な都市に特徴的な道路、街区、敷地割り、建築の空間構成に至るあらゆるレベルの要素を受け継ぎながら、近代のニーズにふさわしい都市改造が推し進められた」[108]。そして、故宮・旧皇室園林・城壁・城門など、皇室の雄大なイメージはどんな主体(作家自身と作品の主人公)にとっても無視できないイメージとなっている。

第二に、13 部の作品はその大部分が 1928 年以後、つまり北平時期に創作された。特に、前述したように、この時期に創作された作品においては北京イメージの出現が大幅に増えている。作品における伝統イメージの優先された北京イメージはこの時期の政府と文化界の「文化古都」をめぐる共同の努力とぴったり一致する。

第三に、張と林が属している文化人グループは、当時の北平の文化消費の中核となっていた。多数の文人学者は、政治の中心である首都の遷移に従って南下する代わりに、文化の中心としての北平に関心をもち、北平における学術と教育の良き環境を維持していた。この時期、鄧雲郷は北平について「物価がとても安く、労働力もとても安い」、知識人にとって「生活を心配する必要はない」「そのため、野望のない、読書と学問が好きな人は、南京上海のようなところで名利の奪い合いをしたがらず、…文化古都で静かに読書をする」という場所であると述べた。[109]譚其驤は「首都時代の富貴と栄華は雲散霧消した。そのため全市は徹底的な買い手市場となり、衣食住と交通、飲食と享楽がいずれも供給過剰であった。商店の店員とサービス係の態度はこのよなくよかった。中等以上の収入をもつ市民は、この社会に生活して、確かにあらゆる所で満足した。」と回想した。[110]文化人や学者たちは主に興味と趣味により、伝統的気風に富む都市の景観を鑑賞しながら、ゆったり時間を消費するという北京独自の理想的都市イメージを構築しようとしていたものと推定できる。そのためには 13 部の作品のように、公園や遊覧地などの憩いの場、娯楽場所とそれに連接するノードがもっとも感知されやすい。また、作家の主観的要素からみれば、張は近代化がより進んだ上海を中心とする南方の読者の期待を考慮して、意図的に伝統的気風に富む北京を古き良き中国伝統文化の代表的都市として呈示したのではないだろうか。

明正著、王業竜、周衛紅訳、楊立文校『走向近代化的北京城 ： 城市建设与社会变革』、北京大学出版社 1995 年、86 頁。）1924 年以後、電車線路が設立されるため、牌楼を撤去する計画があったが、反発が強かったため撤去計画がキャンセルされた。(同書 275 頁。)

[108]陣内秀信，朱自暄，高村雅彦編『北京：都市空間を読む』、東京 ： 鹿島出版会、1998 年、168 頁。

[109]鄧雲郷『文化古城旧事』、中華書局、1995 年、6 頁。原文は「物価十分便宜，労働力也十分便宜」，「因而沒有什麽大野心的人，想読読書、做做学問的人，也就不想再到南京、上海這些地方去争名奪利…而在文化古城中靜靜地読書了」。

[110]譚其驤「文化古城旧事・代序」、同上、2 頁。原文は「作為首都時代的富貴栄華，已煙消雲散。因而全市成為一個徹底的買方市場，不論是衣、食、住、行，吃喝玩楽，都供過於求，商店店員服務性行業従業人員態度之好，無以復加。作為一個中等偏高收入的市民生活在這個社会里，確実令人処々満意。」

第三章　張恨水文学における都市の系譜：上海・南京・重慶

本章では張恨水の上海・南京・重慶における都市滞在経験をまとめ、彼の作品で出現した南京・重慶イメージを整理し、張の南京・重慶認知地図をスケッチし、都市と張との関係をより多面的に探求する。その上で、北京・上海・南京・重慶は張の都市系譜においてそれぞれどのような地位を占めていたか、文化と政治面からみる張の都市アイデンティティーはどのようなものであるのか、という問題を検討したい。

第一節　張恨水と上海

明清時代の上海は、松江府の治下の上海県として、経済と文化が発展した江南地域に属していた。アヘン戦争を終結させた 1842 年の南京条約により、上海は条約港として開港した。これを契機として、イギリスやフランスなどの上海租界が形成され、後に日本やアメリカも租界を開いた。1865 年に香港上海銀行が設立されたことを先駆として、欧米の金融機関が本格的に上海進出を推進しはじめた。1920 年代から 1930 年代にかけて、上海は中国最大の都市として発展し、イギリス系金融機関である香港上海銀行に代表されるように中国金融の中心となった。上海は「魔都」あるいは「東洋のパリ」とも呼ばれ、ナイトクラブやショービジネスが繁栄した。民国時代に至ると、上海は「繁華を極めて蘇杭を圧倒する」[111]ようになった。開港以前には上海は江南の上海であったのに対し、これ以後は江南が上海の江南となったのである。[112]

治外法権の存在のために、上海は「中国の政権が及ばない地域」となった。ここでは二重の基準が存在しており、一つは中国封建伝統の価値基準、もう一つは西方殖民主義の価値基準である。さらに、後者は常に決定的に作用する。」[113]このように上海は、伝統と近代が激しく衝突する場所であった。

なお上海は西洋文化が広まる中心地で、のちに中国近代文化と娯楽業の策源地となった。新式教育・新聞紙・出版業・ラジオ放送・映画などについては、上海は出現時間も数量も全国トップの地位にあった。

江南出身者として、張恨水は上海との間にも絆を有していた。北京へ行く前に南方各省で生計の道を探していたとき、張恨水は上海に数回留まったことがある。しかしそこで定

[111]原文は「繁華富麗圧蘇杭」。民国《南潯鎮誌》，卷三十一，農桑二。
[112]蘇智良「上海城市的現代化歴程」，文匯報 2013.4.8。
[113]陳伯海、袁進編集「上海近代文学史」、上海人民出版社、1993 年、25 頁。

職につくことはなかった。1914－15 年の間、張は重病を患い故郷へ帰った。張の心には上海における挫折の経験が深く銘じられたと推測できる。その頃より、張は上海の繁華街の雰囲気を嫌っていた。[114]しかし、とにかく数回の上海への訪れは張の視野を広げた。五四運動の高潮期である 1919 年 6 月、張は上海を訪れ、「自分の目で多くの熱烈な情景を見つけた」。[115]当時「蕪湖日報」に就職していた張は、いっそう向上心をもって勉強する必要があると感じ、まもなく辞職して北京へ行き、北京大学への進学を図った。

張の文学生涯は、上海と密接に関わっている。まだデビューしていない頃、彼は上海の「小説月報」へ投稿し、採用通知書まで受け取っていた。しかし、「小説月報」が鴛鴦胡蝶派の中心から新文化運動の陣地に改組されたため、最終的に発表されることはなかった。また、彼の初期の作品『真假宝玉』「小説迷魂遊地府記」は 1919 年に上海の「民国日報」に発表された。総合してみれば、1929 年以前には、「北方で長年にわたって創作しているが、上海で発表した作品はわずかだ。上海では別の創作グループがあり、そこには入りがたい。」[116]と自身で述べているとおり、張は上海文壇には入っていなかった。

ほかならぬ『啼笑因縁』を通じて張は上海文壇に進出した。『啼笑因縁』が発表された「新聞報」は 1929 年（『啼笑因縁』が発表される前年）には発行部数 15 万部と、全国最大の新聞となっていた。『啼笑因縁』は上海「新聞報」で発表されて、南方の読者に「すがすがしい空気を吸わせ、北方の社会背景を了解させた」と、鄭逸梅は述べている。[117]

1930 年、張は『春明外史』『金粉世家』の版権と 4 部の小説の出版[118]について上海世界書局と契約を結び、8 千元の原稿料を受け取った。上海文壇に進出した張は、経済的に余裕をもつようになった。彼の家計はほとんどが上海の発達した出版業と原稿料制度に頼っていた。彼は「私は上海がきらいとはいえ、生活は上海で作品を発表することに依存している。」と認めている。[119]

1933 年、華北の情勢が緊迫したため、張は上海へ行き、半年あまり滞在した後、北平へ戻った。「私は上海の何百万の人々が以下の三部曲を演じたと思う。すなわち、あらゆる手段で金を稼ぎ、それを享受し、怪気炎をあげる。それゆえ、上海では金を稼ぎやすいが、私は住むことに耐えられない。」と述べた。[120]

---

[114]袁進：『張恨水評伝』第二章（南京大学出版社、2012 年。）を参照。
[115]原文は「看到了許多熱烈的情形」。張恨水「写作生涯回憶」十二、張占国ら編集：『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、23 頁。
[116]原文は「我在北方，雖有多年的写作，而在上海所発表的，却是很少很少。上海有上海一個写作圏子，平常是不容易突入的」……張恨水「写作生涯回憶」二十、張占国ら編集：『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、32 頁。
[117]鄭逸梅「張恨水全集序言」、『鄭逸梅筆下の文化名人』、上海書画出版社 2002 年、167 頁。原文は「吸到了亢爽空気，領略了北方的社会背景」。
[118]張は『満江紅』『美人恩』と『落霞孤鶩』三部だけを完成した。
[119]原文は「我雖討厭上海，我的生活，却靠了在上海的発表文字」。張恨水『写作生涯回憶』三十七、張占国ら編集：『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、50 頁。
[120]原文は「我以為上海幾百万人，大多数是下面三部曲：想尽一切辦法掙錢，享受，唱高調。因之，上海雖是可以找錢的地方，我却住不下去」。張恨水「写作生涯回憶」三十三、張占国ら編集：『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、45 頁。

1935 年成舎我は上海で「立報」を創立し、文芸欄「花果山」の編集の仕事に張恨水を招請した。「彼（成を指す）は私が上海に長期で住むことができないことを知っており、三ヶ月の期限を約束した。」と張はのちに回想している。[121]友達で同僚の張友鸞は「当時上海社会は混乱していた。外国人は中国人より地位が高い。会党はのさばっている。朝から夜まで騒ぎ立てている。彼（張恨水を指す）と私はいずれも静かなところが好きで、このような都市はきらいだ。」[122]と述べた。三ヶ月が過ぎると、張は南京に移住した。張恨水の上海滞在経験は以上である。

一方、張恨水の小説作品には、上海をストーリーの主な舞台としたものはない。ただ、部分的なストーリーの舞台を上海に設定したり、上海に言及したりしたことはある。この場合、上海のイメージはほとんどがマイナスである。

「上海に住んでいる人には一年中一本の草も見られない人がいる。」[123]北京の住居で自然との親しみを楽しんだ張は、このように上海の住居を軽蔑的に表現している。北京の伝統民居である四合院の庭には、庭に常に植物が植えられている。いっぽう上海は「一寸の土地、金の如し」という場所で、その代表的な近代民居である石庫門はもともと土地を無駄なく使うため、限られた面積により多くの人を収容できるように、西洋人から「長屋」と呼ばれる建築方式を学んで建築されたものである。この住居の空間の快適性が北京の四合院に及ばないことは当然である。

「…上海へ行かない。上海へ行くと、女が水商売に転落することが多いためだ。」[124]「上海の華々しい俗世間を目で見ると、どんなものも忘れてしまう。」[125]「上海の物事、すべてが人を誘い込むのだ。…自分はすこし犠牲を払ってもかまわない。」[126]作中に登場する女性の口を借りて、張恨水は上海の堕落した楽園としての一面を指し示した。上海は、物質的に非常に魅力的で、女性を堕落させやすいといえる。『満江紅』に登場する桃枝は、知識人の家庭の出身であったが、貧乏のため上海で芸人となり、堕落してしまった。このような人物に対し、張は同情と心痛を抱いた。「貧乏人には耐えられないこの上海を去ろうと…内陸であれば、衣服がぼろぼろでも少なくともあちこちでブタと呼ばれることはない。」[127]張は上海における金銭至上主義を具象化して示した。このような描写には、張のかつての上海での経験が暗示されたのではないだろうか。

近代の上海は移民の都市である。上海は自然地理や文化伝統を江南地域と共有しており、

---

[121]原文は「他知道我不能久住上海，约以三个月為期」。張恨水「写作生涯回憶」三十六、張占国ら編集：『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、49 頁。

[122]原文は「当時上海社会很混乱，洋人高於中国人一等，帮会横行，一天到晚都吵吵嚷嚷的。他和我都習慣於寧静，不喜歡這様的都市。」張友鸞「老大哥張恨水」、張占国ら編集：『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、79 頁。

[123]張恨水『石頭城外』。原文は「住在上海的人有终年看不到一根青草的人」。

[124]張恨水『落霞孤鶩』。原文は「不到上海去。因為到上海去，女子売人肉的機会太多」。

[125]張恨水『平滬通車』。原文は「上海那花花世界你眼睛看到了，就会把什麽都忘了」。

[126]張恨水『満江紅』。原文は「上海這些事情，哪些不是引誘人的？……在自己受着一点犠牲，那又算些什麽」。

[127]張恨水『平滬通車』。原文は「要離開這窮人不能忍受的上海了…… 在内地，衣服穿得破爛一点，至少是不会到処讓人叫着豬玀的」。

多くの江南出身の人々が上海に移住し、生計を立てて、徐々に上海人となった。近代上海人の主体はほかならぬ江南移民である。江南移民は上海近代文化に大いに貢献した。[128]安徽出身の張は地縁と心理の面で近代上海を受けいれやすかったはずである。しかし、張恨水は上海の近代都市文明がもたらした成果（出版業、新聞業、原稿料制度）を享受すると同時に、精神的には終始上海と気が合わず、短期滞在にさえ耐えられなかった。これはいったいなぜだろうか。

張恨水個人の身分と性格からみると、伝統的な教育と古典文学を中心とした読書を通じて、張は伝統文人として自己を確立したといえる。張は伝統文人として、近代都市における成功した生活や仕事の経験を欠いていた。更に、近代都市である上海の空間イメージは張の審美趣味と一致しなかった。

さらに考察すると、張の上海ぎらいには文化アイデンティティーをめぐる問題もある。これに関する論述は張恨水の都市系譜を全面的に考察してから行いたい。

第二節　張恨水と南京

南京は、江南地域ではもっとも北京と類似した都市だといえる。南京は中国の著名な古都として、かつては三国の呉、東晋、南朝の宋・斉・梁・陳（六朝と総称される）、十国の南唐や明といった王朝の首都であった。特に明朝の開国の首都として、南京には世界一の城壁が築かれた。北京の紫禁城（故宮）も明の北京遷都の際、南京の紫禁城を模して建てたものであった。1912 年、辛亥革命により中華民国が成立すると、南京に一時的に臨時政府が置かれ、1927 年 4 月には国民政府の首都となった。1927－37 年にかけて、南京では大規模な都市建設が行われた。30 あまりの道路が建設・改造され、中山路を軸として、新街口を中心とした都市道路ネットワークが形成され、新街口商業金融区、国民大会堂、国民政府オフィス・ビルなどの近代建築が建設された。[129]1937 年までの南京は、近代化した首都を建設する途上にあった。

安徽出身の張恨水は、広義の江南の人として、地理的には南京と親しいといえる。張は北京へ行く前に南京に留まったこともあったが、南京との深い関わりは、1936 年から始まる。

「私は上海がきらいとはいえ、生活は上海で作品を発表することに依存している。上海を去ろうと思うが、交通の不便なところへ行くわけにはいかない。それで中間地点として南京を臨時に選んだ。」と張は述べている。[130]1936 年 4 月、張は南京で自分の新聞事業を始め、資本を投じて「南京人報」を創立した。百万の人口をもつ南京において、「南京人

[128]馬学強「近代上海成長中的『江南因素』」（「史林」2003 年第 3 期）を参照。
[129]経盛鴻「日軍大屠殺前的南京建設成就與社会風貌」（「南京社会科学」2009 年第 6 期）を参照。
[130]原文は「我雖然討厭上海，我的生活，却靠了在上海的発表文字，要離開上海，而又不能離得到交通不便的地方去。於是我臨時選択了個中止地点，南京。」張恨水『写作生涯回憶』三十七、張占国ら編集：『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、50 頁。

報」を発行し、一日で一万五千部を販売するという業績をあげた。[131]

しかし、戦争が迫るにつれて、張は事業を続けることができなくなった。1937 年 11 月、南京陥落が目前に迫ってきたので、病床にあった張はやっと南京を去った。こうして南京陥落直前の 12 月初め、「南京人報」はやむをえず停刊した。

張恨水が創作した小説の中で、明確に南京を背景とする作品としては、以下の表に示している 4 部がある。このうち『大江東去』は、大部分のストーリーは南京以外の場所で発生しているものの、作中に出る抗日戦争における南京陥落の情景の描写が有名であるため、研究に組み入れたい。

題名	発表時間	発表地点
満江紅	1931	上海世界書局
秦淮世家	1939	上海「新聞報」
负販列伝（丹鳳街）	1940-1942	上海「旅行雑誌」
大江東去	1940	香港「国民日報」

『満江紅』は 1935 年南京に移住する前に創作された。ほかの三部はすべて抗日戦争勃発後に創作され、人心を鼓舞し、勝利を望む意図が託されている。興味深いことに、この三部が創作されたのは、北京を背景とする小説の創作が中断された後であった。

この四部の作品に出現する南京イメージを整理し、出現回数によって並べて作成したのが表 5 である。表 5 に対して初歩的な分析を行うと、以下の点が指摘できる。

34 種のイメージのなかには、パスが 7、ノードが 9、ディストリクトが 17、ランドマークが 1、それぞれ存在する。前述したように、一般的に人はできるだけエッジを避けて行動しようとするため、出現しない場合がしばしばあると理解できる。さて、34 種のイメージのうち、26 種は城壁の内側にあり、8 種は城外近郊にある。[132]城南の繁華な地域にあるイメージは 13 種[133]、中部の新しく建設された地域には 7 種[134]、北部と東部の広々としている地域には 6 種[135]、城外北郊には 3 種[136]、東郊には 4 種[137]、西郊には 1 種[138]である。総合してみると、張の南京認知地図はどちらかというと全面的、均質的であるといえる。

以上の統計によると、城南の繁華地域にあるイメージの数がもっとも多い。しかも、出現する回数が 1 位である夫子廟と 3 位である秦淮河も城南地域にある。秦淮河は長江下流（揚子江）の右支流で、一般的には南京城内に流れる内秦淮河を指す。内秦淮河は東水関から城内へ入り、淮清橋・利渉橋・文徳橋・武定橋・鎮淮橋・下浮橋などを過ぎ、西水関で城内から出るが、その全長は 9.6 里あり、このため「十里秦淮」と呼ばれている。建康（南京）に首都が置かれた六朝時代、建康の都城内には繁華な居民区や商業区が栄え六朝

[131]張紀『我所知道的張恨水』、金城出版社 2007 年、101 頁。
[132]下関、浦口、玄武湖、紫金山、明孝陵、中山陵、莫愁湖、孝陵衛。
[133]桃葉渡、太平路、四象橋、水西門、門東、淮清橋、花牌楼、白鷺洲、中華門、光華門、秦淮河、夫子廟、府東街。
[134]鼓楼、中山大道、新街口、中山北路、中山门、唱经楼、丹鳳街。
[135]獅子山、虎踞関、北極閣、挹江門、鶏鳴寺、清凉山。
[136]下関、浦口、玄武湖。
[137]紫金山、明孝陵、中山陵、孝陵卫。
[138]莫愁湖。

文化が花開いた。南京が再び繁華な大都会となったのは明清時代になってからで、内秦淮河の両岸には人家が密集し、楼閣が立ち並び非常に繁栄した。明清時代、この地には科挙の試験場である江南貢院や、明太祖朱元璋が設立した官営の芸妓院である富楽院（旧院）があり、江南貢院と富楽院は内秦淮河を挟んで互いに向かい合っていた。夫子廟は厳密にいえば秦淮河北岸の貢院街に位置する、孔子を祭る場所を指すが、一般的には江南貢院など秦淮河周辺の地域が夫子廟と呼ばれている。歴史的に著名であり、現実上でも繁盛しているため、秦淮河と夫子廟は明代以来の南京の代表的なイメージとなっている。秦淮河と夫子廟のイメージは張の認知地図に高い頻度で出現する外部要素といえる。

張恨水は南京滞在期によく秦淮河と夫子廟に行って遊んだ。「南京人報」の新聞社は中山南路八条巷口にあり、城南地域に属していた。「出かける場合、十回の内九回は城南へ行った…とりわけ秦淮河畔の夫子廟へ…」[139]「夫子廟へ喫茶に行く。」[140]と張は回想している。張は友達や同僚とここで交遊することが多かった。繰り返し行なわれた個人的な訪問は張の内部要素として秦淮河と夫子廟の出現頻度をめぐる張の内部要素からみた説明となりうる。

1936－37 年の南京滞在期、張は唱経楼や丹鳳街のあたりに住んでおり、丹鳳街の様子や住民の生活を見慣れていた。小説『丹鳳街』はこれを原型として丹鳳街の下層民衆と彼らの生活を生き生きと描写している。「丹鳳街」のイメージは 4 部の作品のなかで出現回数が 17 回で 2 位となっているが、その 17 回の出現のすべてがこの作品において起きており、張の個人的な体験がかなり反映されているといえる。

出現回数が 4 位となっている清涼山は、南京城内の西部にある山で、有名な古跡とはいえ、30 年代までその周辺は未開発の状態で、広々とした風景が寂しいところであった。『満江紅』の主人公である于水村は、名利にこだわらない画家で、繁華な場所から遠く離れた清涼山に住んでいるという設定になっている。張恨水も清涼山の風景が大好きで、エッセーの「清涼古道」「秋意侵城北」の中で清涼山の近くの風景を鑑賞し描写している。清涼山は張恨水の審美と一致する場所だったのだろう。

出現回数がそれぞれ 5 位と 6 位である下関と浦口は南京の内外交通の要所であった。下関は長江のフェリーで、浦口は天津発の津浦鉄道の終着駅がある場所であった。

東郊にある紫金山とそこにある中山陵、明孝陵なども南京の重要なイメージである。特に中山陵は特別な意義を有するイメージとして『大江東去』に出現した。中山陵は孫中山（孫文）の陵墓で、1926 年から 1929 年にかけて建設された。牌坊・墓道・陵門・碑亭・祭堂・墓室が縦に一直線上に並んでいる。その全てが、花崗岩とコンクリート等を使って建築された近代建築である。孫文は中華民国の「国父」と呼ばれ、彼の陵墓は国民政府から最高の崇敬を受けている。1929 年に孫文の遺体が中山陵に葬られて以来、中山陵を参拝することは政府と社会各界の神聖な儀式となった。それにつれて中山陵は民国期にもっと

[139]張恨水「日暮過秦淮」、『両都賦』。原文は「十次出门有九次是奔城南…尤其是秦淮河畔的夫子庙」。
[140]張恨水「碗底有滄桑」、『両都賦』。原文は「上夫子庙吃茶」。

も象徴的な意義をもつ政治イメージとなり、最大の求心力をもつ民族主義の象徴でもあった。[141]

張は『大江東去』のなかで、日本軍が南京を攻め落として、建築と家屋を焼き払うところを主人公の目を通して描写しているが、そこでは以下のように書かれている。

> 再び東を眺めると、紫金山がいつもと同様に天の下にまっすぐに立っている。…突然白色の建築群の小さな影が眼前に見えた。ああ、これは中山陵ではないか？…あの陵墓の正殿は、白色の立体の形をして、依然として翼然たる亭の姿勢で、南の丘陵を俯瞰している。白石の階段は褐色と青緑の間にあって、高山の上で、二つの広い白影を描いている。鐘山は樹林に覆われ青い甲冑を纏い、高く長く、陵殿の背後を守っている。[142]

国家が侵略されるとき、張は中山陵がある紫金山を「甲冑を纏って守る」というイメージで描きだして人心を鼓舞し、抗日戦争の意志を確固とさせようと意図した。このように、南京のイメージは特殊の時期に独自性があるといえる。さらなる分析はこの章の第四節に譲る。

総じて、張恨水の作品のなかの南京イメージは、描写の頻度と範囲において北京と比べて劣っているが、ほぼ完全な認知地図を形成し、個人の独自な体験も一定の体現をしているといえる。

第三節　張恨水と重慶

重慶は長江上流の四川盆地東部に位置し、民国期の 20 年代に四川省の政治的な中心地となった。日中戦争でもともと首都であった南京が陥落したため、1938 年に中国の臨時首都（「陪都」）となった。

1938 年 1 月、張恨水は各地を転々としたあげくやっと重慶に着き、以後重慶で 8 年を過ごした。重慶「新民報」の所有者である陳銘徳の要請で、張は「新民報」に就職し、文芸欄「最後関頭」（「最後の瀬戸際」を意味する）を主管した。1939 年、重慶市区の住宅が爆撃されたため、張はやむをえず郊外の南温泉に引っ越した。南温泉の住宅は三つの茅屋で、暮らし向きはとても苦しかった。南温泉は重慶市区から 18 キロ離れている。張が就職した「新民報」社は、重慶市街区域の通遠門の外にある七星崗に位置していた。張は通勤の

---

[141]陳蘊茜「謁陵儀式與民国政治文化」（『開放時代』2008 年第 6 期）を参照。

[142] 原文は「再向東看，紫金山却像是平常一般的，挺立在天脚……忽然一叢白色建筑物的小影発現在眼前。啊！這不是中山陵？……那陵墓正殿，白色的立体型，依然是个有亭翼然的姿勢，俯瞰着南向的丘陵地帯。白石的台階，在赫色与蒼緑色中间，在高巒上，划了两道寛的白影。鐘山帯了樹木，披了青緑色的厚甲，高高地，長長地，屏囲在陵殿之后。」

ため、長江南岸の海棠溪から長距離バスに乗って市区へ行き、バスに乗れない時には全行程を徒歩で行った。[143]この経験は張の重慶イメージにどのような影響を及ぼしたのか。

重慶を背景とする張の小説は以下の５部である。

題名	発表時間	発表場所
牛马走（魍魎世界）	1941-1945	重慶「新民報」文芸欄「最後関頭」
偶像	1941-1945	重慶「新民報」晩刊
第二条路（傲霜花）	1943-1945	重慶「新民報」晩刊
巴山夜雨	1946-1948	北平「新民報」文芸欄「北海」、南京と重慶「新民報」転載
纸酔金迷	1946-1948	上海「新聞報」

このうち、『巴山夜雨』と『紙酔金迷』は抗日戦争の後に北平で創作された。この 5 部の小説は、戦争中の重慶社会のさまざまな面を暴露し、批判的な意図を含んでいる。

この 5 部の作品に出現した重慶イメージを統計して、表 6 を作成した。

表 6 によると、5 部の作品には総計 30 種のイメージが出現し、そのうち出現回数がもっとも多いのは海棠溪で、8 回である。重慶イメージの種類と出現回数は、北京に及ぶべくもないばかりでなく、4 部の作品中の南京イメージと比べても大いに劣っている。

民国期の重慶の中心地域は、重慶の古城壁に囲まれた地域、つまり長江と嘉陵江の 2 つの川に挟まれた狭い地域で、ほぼ現在の重慶市の渝中区に相当する。張恨水が就職した「新民報」新聞社もこの地域に位置していた。30 種のイメージのうち、12 種はこの中心地域にある。[144]

30 年代の重慶市区には、この中心地域のほかに、沙坪壩地域、嘉陵江以北の一部の地域、そして揚子江以東の一部の地域も含まれている。[145]30 種のイメージのうち、5 種はこれらの地域にある[146]。ほかに、近郊には 7 種[147]、遠郊には 6 種[148]ある。総じてみると、5 部の作品のなかの重慶イメージのうち、17 種は市区にあり（そのうち 12 種は中心的な繁華地域にある）、13 種は郊外にある（そのうち 6 種は遠郊にある）。南京の相当する地域と比べてみると、4 部の作品のなかの南京イメージは、26 種が市区にあり（そのうち 17 種は中心的な繁華地域にある）、8 種が郊外にある（全て近郊にある）。このように、5 部の作品の重慶イメージの中では、郊外のイメージの占める割合が高いとみられる。

なお、出現回数が最も多い海棠溪と南温泉は、張の通勤の重要なノードと居住地であったが、いずれも重慶の中心市区から遠く離れていて、重慶の代表的なイメージとはいえない。この二つのイメージは、ほぼ張の個人的な経験のために張の認知地図に存在している。すなわち、この二つのイメージの形成にあたっては、張の内部要素の果たした作用が圧倒

[143]張恨水は「我家住南温泉六年多，城鄉來去必須在海棠溪上下公共汽車…」と『山城回憶録補編』で述べた。曽智中ら編集『張恨水説重慶』、四川文藝出版社 2007 年、37 頁。
[144]中山公園、珊瑚壩、南紀門、林森路、打銅街、菜園壩、民族路、両路口、精神堡壘、都郵街、大梁子、儲奇門。
[145]李良ら「民国時期重慶城区的空間結構與外向拓展」（『三峡論壇』2014 年第 1 期。）の図 3 を参照。
[146]嘉陵江、揚子江、文化区、磁器口、沙坪壩。
[147]羅家壩、龍門浩、南山、黄桷埡、歌楽山、海棠溪、南温泉。
[148]牛角沱、北温泉、北碚、白市驛、青木関、漁洞溪。

的に大きかった。

総じて、5 部の作品における重慶イメージは、種類がやや少なく、出現頻度が低く、郊外イメージの割合が高く、張の通勤と住居に関わるイメージが目立つという特徴をもつ。その原因を考察するために、外部要素と内部要素とに分けて説明する。

まず内部要素について、郊外の住居と生活の困窮は、張の重慶に対する認識にある程度影響を与えたと推測できる。南温泉の居住地から重慶の市区およびほかの地域までの交通は、近代都市でありながら非常に不便だったといえる。市区までは長距離バスを必要とし、江北（嘉陵江以北）と南岸（長江以南）までは船で渡らざるをえない。時間と体力がかかるため、都市内部における移動はある程度制限されていた。また、重慶滞在期の張は、あまり経済的な余裕がなく、北京と南京での滞在期に比べて友達や同僚と外食し消費する頻度が低く、都市における生計以外の活動が制限されていたと推測される。

次に外部要素について、「山城」の別称を持つ重慶は山に沿うように築かれた町で、坂が多く入り組んだ構造の町並みを形成している。そのため、重慶の道路は二つの特徴をもっている。第一に、中心市区には坂道がとても多い。市区における散策はむしろ坂をのぼるように苦しいといえる。上流階層は自動車またはかごに乗って市区を移動することが多かった。第二に、重慶市区の道路はそのほとんどが曲がりくねった状態で、斜めに通っている。北京や南京のような計画的に建造された首都においては、南北方向と東西方向に垂直な格子状の道路網が分布している。このような格子状の道路網は方向を理解するのを容易にした。これに対し、重慶の道路は外来者にとって分かりにくく、位置確認が難しかったと思われる。更に、張恨水の重慶滞在期中の 1938 年から 1943 年にかけて、日本軍により断続的に 218 回重慶に対する戦略爆撃が行われた。空襲警報が響くと、重慶住民はすぐに防空壕などの避難所へ行く必要があった。張の作品には、この「跑警報」（警報で走る）のことが何回も描写されている。張も重慶市区にあった住宅が爆撃されたため郊外へ引越したのである。身の安全を考慮すれば、重慶市区をゆったりと散策することはほとんど不可能であった。以上の不利な要素が、張恨水の重慶認知地図の形成に影響を及ぼしたと推測できる。

以上は張恨水の重慶イメージについての初歩的な分析である。重慶は張恨水の都市系譜においてはいったいどのように位置づけられるのか、以下の節で議論したい。

第四節　エッセー集『両都賦』で確立された都市の系譜

『両都賦』は 1944 年 8 月 1 日から 1945 年 1 月 30 日まで「新民報」に連載発表された 26 篇のエッセーを集めたものであり、張恨水が自身の北平と南京での暮らしを回想した内容である。『両都賦』は比較的まとまった都市描写の作品であるため、彼の二都に対するイメージを探る有力な資料といえよう。

『両都賦』という題名の典拠は、漢代の班固「両都賦」およびその模倣作である張衡

「二京賦」と晋代の左思「三都賦」である。この三作は長安、洛陽などの都城の繁華壮麗な様子を描くとともに、各都市の政治的優劣を比較している。古典文学における都城賦のうち、単一の都市の描写ではなく二つ以上の都市を対比して描くものは、班固の「両都賦」を祖としており、また「両都賦」がそうした作品の代表的存在である。張恨水は自ら『両都賦』の序文を書いて、「漢班固、晋左思」に言及している。では、『両都賦』という題名を借りた張恨水は、どのような比較の意図を抱いていたのだろうか。また当時の「両都」である首都南京と故都北平が淪陥区にあったということは、「陪都」の重慶で執筆していた張恨水にどのような影響を及ぼしたのであろうか。そして張の『両都賦』は古代の「両都賦」を典型とする都城賦の現代的継承者であるのだろうか。

一、テクストが対象とする読者

26 篇のエッセーが「我」（私）による一人称の叙述を基本としているのは、エッセーという性格上自明のことである。張は「私」を用いて自らの北京と南京での暮らしを回想し、叙述している。人称に関して注目すべきは、実際には、「咱们」と「你」の使用である。「咱们」は中国北方の方言で、「われわれ」を意味するが、「我们」とは相違がある。「我们」を使う場合、相手を含めている可能性と、相手を含めていない可能性が両方ある。一方「咱们」を使う場合には、必ず相手を含めている。『両都賦』のなかで、「咱们」は6回現れる。南方出身の張がここでわざわざ北方方言の「咱们」を使ったのは、読者との一体感を表すためであろう。序文と最初の数篇で「咱们」を使用しているのは、張が連載の冒頭で読者の関心と注意を引き付けようとしていたためと見られる。この「咱们」と「我们」の使い分けについて、張は 1950 年代に創作した『記者外伝』で一人の人物の言葉を通じて示している。[149]『記者外伝』は自伝であり、この性質を考えれば、張は北京滞在の早期にすでにこの使い分けに注意を払っていたと見られる。また、26 篇全体で「あなた」（你）の使用は 69 回に及び、これもこのエッセー集の特徴といえる。「咱们」使用の微妙な効果とはやや異なり、「あなた」の使用は直接読者に呼びかけ、昔の北平と南京の風景を思い起こさせるという効果が期待できよう。

「咱们」と「你」のほかにも、エッセーのなかではさまざまな呼び方が使用されており、「咱们」や「你」と類似した役目を果たしている。例えば、「没有到过北方的南方人」（北方へ行ったことがない南方人）、「在北平住家稍久的人」（北平にしばらく住んでいた人）、「若是爱吃水果的朋友」（もしも果物が好きな人なら）など、実は一人一人の読者との対話を選択しつつ場景を想像し、さまざまな場景や読者に応じて、各種の異なった経験を持つ読者群の関心を引きつけ、読者と共有できる情景を描写しようとしている。そして、読者と雑談するように、その「場」をめぐる一体感を作りあげようとしている。

[149]張恨水『記者外伝』第二回を参照。

このように、「咱们」、「你」と他の呼び方の使用法は、重慶育ちの人とも、戦争のために北平か南京から重慶に移った人とも、そしてその他の三都以外の読者とも自らのエッセーを介して記憶を共有し、そうして再編成された記憶によって北平と南京のイメージを核とする共感を構成するための起点となっている。

さらに、『両都賦』では「咱们」、「你」（あなた）と「我」（私）、「我们」とは区別して使用されている。「我」（私）と「我们」は、個人の生活上の経験、またはある友達と共有した経験を述べる場合に使われている。これに対して、誰でも体験できる風景や生活場面などを描写する場合には、「你」（あなた）を使うことが多い。このことから、人称によってこのエッセー集の記述は大きく「個人」系と「共感」系に分けられると言えるであろう。この二系統構造は次に分析する「夢」の枠組みと深く関わっている。

二、テクストの基本構成:「夢」の枠組み

『両都賦』の一つのキーワードとして「夢」があげられる。「夢」は 5 篇のなかに繰り返し出現するが、真の「夢」は、「黄花梦旧庐」における友達と一緒に菊の鍋を楽しんだことを夢に見たという記述の一回だけである。これ以外は全て象徴的、抽象的な意味での「夢」である。

この「夢」は、現在の時空(戦争期の重慶)と昔の時空(北平・南京滞在期)の間の乗り越えられない隔たりを意味する。執筆時点の張にとって、昔の北平・南京での暮らしは手の届かぬ「夢」といえよう。「黄花梦旧庐」での「夢見」の記述ののち、目が覚めた張は「几秒钟的工夫，我在两个世界」（何秒間かの間、私は二つの世界にいた。）と嘆いた。すなわち、真の「夢」も、その二つの世界を隔てるという役割を演じているのである。この「夢」は北平・南京の美を創造するために不可欠な要素なのである。なぜなら、『両都賦』で描写されている昔の北平・南京の風景は実に日常的なものだが(張自身も何回も強調している)、[150]それが「夢」に現れることによって、厳しい重慶の現実との対比として奇観となっているといえるからである。

また、この「夢」という手法には、テクストの構成との共通性も見られる。全 26 篇を通読すると、目の前の重慶の季節や風景などから、北平あるいは南京の同じ季節の風景を連想させるという手法が頻出していることが分かる。『両都賦』の連載期間は 8 月から翌年の 1 月までで、張はエッセーのなかで、季節の変化にしたがって夏から冬にかけての北平・南京の風景を回想し描写した。その中には、重慶のことをまったく語らずに冒頭から北平・南京の描写に入るものもある。例えば、北平の北海公園の冬景色を描写した「冰雪北海」には、重慶や創作時点の季節について何も提示されていないが、この一篇は 1945

[150]例えば、「随時随地都是詩意。」（随時随所に詩意がある。）「只有南京極普遍。」（南京だけで普通的だ。）――「白門之楊柳」。「這是北平城里小小住家的。」（これは北平城の普通の人家だ。）――「翠拂行人首」。

年 1 月 30 日に発表されたものであり[151]、これを読む読者が真冬の重慶というコンテクストの中に存在していたことは言うまでもない。このように「現在の重慶」と「昔の北平・南京」という対比的構成はテクストにおいて常に成立しており、このテクスト構成を支えているのが現実と「夢」という対比でもあるのだ。

「夢」が覚める場所は「現在の重慶」だけでなく、「現在の北平・南京」でもある。4 篇の文末では、昔の生活を回想した後も、現在の重慶には戻ろうとせず、現在の北平・南京の光景を想像して悲嘆している。

このような文章は個人的な回想や感慨を語るのではなく、記憶を共有する人々の共感を呼び起こそうとしている。懐かしく思うのは、一個人にとっての過ぎ去った歳月ではなく、都市や国家の華々しい過去である。この喪失感はテクスト構成によって「個人」系を乗り越え、「共感」系へと飛躍したといえる。つまり、ここでは「夢」は個人的なものでなく、都市の夢、国家の夢にまで昇華している。これは現代エッセー集としての『両都賦』と、雄大さを極めた記述の古典的都城賦「両都賦」との共通点の一つなのである。

三、隠れた第三の都市－重慶

さて『両都賦』の中で南北両都を比較する意識は一体どこに現れているのだろうか。26 篇のうち、北平を描写したものは 13 篇、南京を描写したものは 12 篇あり、あとの一篇はそれぞれが半分を占めている。両都の割合はほぼ同じであるが、テクストのなかで、両都を直接に比較している箇所は非常に少ない。

エッセー集の構成からみると、張は両都の優劣比較を念頭には置かなかったようだ。両都を描いた目的は、彼が滞在したことのある場所という理由だけではなく、序文にもあるように、両都が陥落した首都であり故都であるという文化的・政治的な意義によってもいる。それゆえ、北平と南京はまったく対立的な存在となってはいないのだ。

事実、両都との比較対象としてあげられた都市は重慶であった。テクスト構成と「夢」の枠組みから判断すると、張は目の前の重慶を念頭に置きながら、かつての両都を回想したのである。両都の描写の最中に、ときどき重慶について言及が行なわれる。

エッセーの著者である張にとっても、張の読者にとっても、目下彼らが身を寄せる重慶はすでに『両都賦』の世界の前提とされる場所であった。両都の風景を描くときも、両都の描写を読むときも、両都と重慶との比較は自然なことで、無意識な行為といえる。もっとも、当時「陪都」としての重慶では、公務機関、学校、文化機関、難民などがなだれ込むにつれて[152]資源は乏しくなり、物価は高騰した。[153]張自身も重慶の家賃が非常に高いた

---

[151] 『新民報』1945 年 1 月 30 日。

[152]日中戦争の直前、重慶の人口数は 30 万余であったが、1938 年には 52.83 万に上り、1941 年に 70 万を上回り、1943 年には 90 万を上回り、1945 年には 125.5 万に達した（重慶市地方志編撰委員会『重慶市志』第 1 巻、四川大学出版社，1992 年）。また、日中戦争期間、西南内地に移転した 61 の大学のうち、32 校は重慶に設置された（侯徳礎『抗日戦争時期中国高校内遷史略』四川教育出版社 2001 年）。

め、郊外の南温泉に移住し、艱苦に耐えて暮らしていたのである。重慶の厳しい現実は、常に「両都」の背後に隠れていた。このように重慶は微妙な存在となっていたのである。張が「三都賦」という題目を使わず、直接に重慶を描かなかったのは、ただ両都を引き立てるだけの役目を重慶に与えたからではなかった。そうではなくて、都市像が抑圧された重慶は、「陪都」の身分とぴたりと合致していたからである。

なお、張の重慶イメージを一層明確にするため、『両都賦』以外の重慶を描写した作品を考察したい。①1944 年に成都「新民報晩刊」に連載発表された『山窓小品』は、張が重慶滞在期間に書いた文言のエッセー集であり、南温泉という重慶郊外の田舎の風景と生活を描写したものである。都市としての重慶は、このエッセー集には存在しないといえる。但し、『山窓小品』の数篇には、『両都賦』と類似した心理構造が見られる。例えば、「除夕苦憶」では、重慶郊外で過ごす寂しい除夜の中で、1935 年の南京での賑やかな除夜を懐かしく回想している。「短案」では、南温泉で使った机から北平の家の机を連想し追憶している。「跳棋」では、「予夢北平，且三醒而三梦之。」（私が北平を夢見るに、三度目醒めて、三度北平を夢見た。）というように北平での生活を強い懐かしさを感じている様子が描かれる。このように、今の重慶と昔の北平・南京との対照と、「夢」のイメージが常に存在しており、作者の心境と動機は、『両都賦』の創作とよく類似している。②重慶滞在期に張が創作した『八十一夢』、『牛馬走』（後に『魍魎世界』と改名）、『偶像』と『第二条路』は北平・南京から重慶に移った人々を主人公として、彼らの生活を主な題材にしている。地元重慶の人々への関心はわずかであって、都市重慶の風景と生活は、北平・南京の移民の目差しによって見つめられるだけである。例えば、重慶の霧雨への不快感と、重慶の揺れやすい家への文句。それは重慶という都市そのものへの反感ではなく、戦争という厳しい現実のなかの心境の反映なのだが、この時期の張の重慶イメージは一面的で、張の心中において未整理の状態であった。

かつて滞在した都市が壊滅しただけではなく、再び訪れることも不可能となり、現在の様子も想像できないという状況下にあっては、「夢」のイメージと枠組みが生じるのではないだろうか。そうした状況の産物としての代表作といえるのが『東京夢華録』である。『東京夢華録』は北宋の首都東京（汴梁）が金の進攻により陥落した後、南遷した宋人孟元老によって創作された。彼はこの都市筆記を著して、東京の都市区画・宮殿・寺院・店舗・名勝と、宮中および民間の行事・時令と、市民の風習や生活のくさぐさを巧みに語った。「夢華」というのは、『列子・黄帝篇』の中に出てくる、理想の国である華胥の国を夢見たという言葉を典故としている。作者の記憶の中の東京は、理想の国も及ばないほどの地であった。都市の記憶を回想することを理想の国を夢見ることにたとえた『東京夢華録』には、数多くの継承作がある。

張の『両都賦』は、この「失われた都市」回想の文学的系譜に入るといえよう。『両都

[153]日中戦争期の重慶の物価指数について、『中国抗日戦争時期物価史料匯編』（四川联合大学経済研究所，中国第二歴史檔案館編、四川大学出版社 1998 年）によれば、1937 年の重慶の物価総指数を 100 と指定すると、『両都賦』の創作時点の 1944 年のは 45840、1945 年のは 177674 であった。

賦』は前述の作品、特に『東京夢華録』と、次の四つの共通点を有している。

一、作者はある特定の都市に住んでいた経験を持つ。この都市は後に戦争で壊滅し、あるいは陥落し、作者の記憶の中の都市は現実には失われてしまう。作者が変貌した都市を再び訪れたとしても、あるいは陥落した都市を再び訪れることがかなわないとしても、記憶の中の都市との間には乗り越えられない隔たりがある。

二、作者は昔の都市で見慣れた物事を追憶し記述し、生々しい描写によって読者と記憶を共有しようとする。とりわけ「食」と「遊び」に関する享楽的な印象はもっとも鮮明であり、読者を引きつける。張の『両都賦』は『東京夢華録』と同様に、北平と南京の食べ物、食事処、名勝、遊覧地を重点的に描写しており、読者に深い印象を与えている。

三、「夢」の雰囲気が作り上げられている。記憶の中の都市はむしろ「雅びた節句のくさぐさ、ものやわらかな人々」に満ちた理想の国であろう。記憶の中の都市と現実の都市との間に乗り越えられない隔たりが存在しているからこそ、「夢」のようにとらえどころのない過去に「ただただ無念さが残るばかり」という心理が生じるのである。

四、回想される都市は単に作者個人だけに関わる都市ではなく、国家または王朝の全盛時代を象徴する都市である。こうした文学系譜が存在してきた理由は、戦争や王朝の更迭により激しく変化する時代に、このような都市の記憶が個人を超えた集団または民族の共感を引き起こしたことにある。その意味では、都市と個人のアイデンティティーは互いに結びついていると言えるのではないだろうか。

第四章　張恨水による「新中国」の叙述（1949ー）

本章では張恨水の都市系譜の延長線上に 1949 年以後の張の創作とそのなかの北京イメージを 1949 年以前のそれと比較しつつ整理し、特に先行研究に乏しい『記者外伝』をめぐって張の創作動機と成果を論じる。これによって、張恨水の北京イメージを完全に捉えて理解できるようになり、結論部分の張のアイデンティティー問題を全面的に考察する出発点ともなる。

第一節　「新中国」時期における張恨水の創作

1940 年代末から 1950 年の初めまで、通俗文学の名家である張恨水は、病気と称して長期間にわたって創作を中止した。それは 1930 年代に複数の新聞や雑誌で同時に何作もの作品を連載発表していたことと、きわだったコントラストを成しているといえる。

1955 年、張は全国政協新年祝賀会に招待された。毛沢東は張と会見し、「なぜ新作が出ないのですか」と尋ねた。張は「一つには長年病気を患っていたためです。もう一つには労農兵の生活を熟知していないため、任に堪えられない恐れがあります。」と答えた。その直後、毛は周揚を通じ、張に「労農兵のために奉仕することは、字面では理解できない。年長の作家はやはり自分なりの題材について書いたほうがいい」と伝えたという。[154]

当時、老舎は新劇『竜須溝』を創作し、新政府が民生に強い関心をもっていることを宣伝して、「人民芸術家」の美称を獲得した。張も類似のインスピレーションを得て、北京の胡同の生活をめぐり、解放後の新たな変化を反映した小説『半年之間』を書こうとしたが、いくつかの章節を書き終えた後、心にかなわなかったため、長期の創作計画を取りやめた。その理由について、彼の息子は「ずっと病気で、新しい生活についてよく知らなかったからだ。」と回想している。[155]

1954 年より、張は中国新聞社の要請で、海外の読者に向けて新中国の風采を反映したエッセーを発表した。[156]そのなかの一編「北京城郊的変化」（北京郊外の変化）に関して、張は「わざわざ北京の十三の城門の辺りの変化を一々見に行くと、新たな平坦な道路と、新

[154]克石『張恨水與京華旧居』、『海内與海外』2009 年第 11 期。対話の原文は「為什麼不見你的新作？」「一来生病多年 ， 二来対工農兵生活不熟悉 ， 恐怕難以勝任。」

[155]張伍『我的父親張恨水』、春風文芸出版社、2002 年、330 頁。原文は「因為他一直有病，対新生活不熟悉」。

[156] これらのエッセーは海外の新聞と雑誌で発表され、資料を収集するのが不便である。現在に至るまで、張恨水のどの年譜や作品目録にも載っていない。

しく建てられたビル、道路際いっぱいに植えられた木を見つけて、とてもうれしく感じた。」と創作の由来を述べている。[157]このエッセー集の中の他の作品も、同じく「原稿依頼を受けて、見物して、創作する」という過程をたどって創作されたと考えられる。これらのエッセーは新中国がもたらした変化を描写し賛美することを主題とした。国内で発表された「春遊頤和園」[158]と「陶然亭」[159]の二編もこの創作主題に合致している。「陶然亭」のなかで、張は、新中国が修繕した陶然亭公園が「以前の陶然亭と比べて驚くほどよくなった。」といい、[160]もし修繕がなければ、陶然亭は恐らく「なくなってしまい」「書物の上でその名残をたどっただけなのだろう」と感歎している。また東西長安街の撤去された二つの牌楼は「交通を妨げる建築」で、「ここに新たに立てられ、落ち着くところを見つけた。」とする。[161]ある論者は、「陶然亭」の描写は、張恨水の個人的な士大夫趣味と普通の労働者を結びつけるものであると議論している。[162]このように、この時期の張は、創作においてなるべく新中国のイデオロギーに近接するよう努力したと見られる。

同時に、1954 年から 1962 年まで、張は国内と海外で 15 部の中篇と長編の小説作品を発表した。『孟姜女』『孔雀東南飛』に代表されるこれらの作品は、そのほとんどが民間説話の改作であり、オリジナルな作品とは言いにくい。なぜ現実の題材を放棄し、古代伝説と民間説話を選択したのか。一つには既に言及したように「新たな生活をよく知らない」ためである。もう一つにはこのような題材は「穏当」で、「思想性に問題がない」[163]ためである。簡単に言えば、政治的に批判されないための考慮であった。

一方、この時期、張自身の創作インスピレーションは「思想性」の問題のため、作品にすることができなかった。作品になったのはほとんど原稿依頼によるものであった。当時の張の創作心理はあまり積極的なものではなかったといえる。1959 年 1 月のインタビューでは、張は「この半年間、創作したのはほんのわずかだ。…ただ中国新聞社の原稿依頼には必ず応じている。これは海外への影響を考慮して、海外華僑に私が依然として創作を続けていると知らせるためで、さもなければもはや創作する必要はほんとうになく、私はこのような生活に倦み疲れている。」「今の原稿料は非常に低い。千字あたり四、五元しかない。苦労して書き上げた作品は、発表後問題があると批評される恐れがあり、一日中びくびくしている。…いっそ書かないことにした。」と言った。[164]近年公開されたこのインタビ

---

[157]張恨水「我的写作與生活」、張占国ら編集：『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、74 頁。原文は「特意一一去看了北京十三個城門附近的変化，当看到新建的平坦馬路和一幢幢新楼房，馬路辺栽満了樹木，我感到十分高興。」

[158] 『北京文芸』1956 年 4 期。

[159] 張恨水『緑了芭蕉』、江蘇文芸出版社、2006 年。

[160]原文は「陶然亭和从前一比，不知好到什么地步了。」

[161]原文は「其実是東西長安街的两个牌楼遷移到这里重新修起来的。這两座妨碍交通的建筑在這里总算找到了它的帰宿。」

[162]肖鑫、鄭乃勇「在文化中歌唱――1956-1966 年间抒情散文的文化想象」江西社会科学 2007．8。

[163] 「経過再三考慮，他選択了一条比較穏妥的路。戯曲舞台上盛演不衰的『梁山伯与祝英台』、『白蛇伝』『孟姜女』和『孔雀東南飛』思想性応該是没有問題的，于是他就把這些舞台劇丰富情節写成小説。」蒋星煜「張恨水高産而清貧的一生」（『档案春秋』2006 年第 1 期）を参照。

[164]贾俊学「文聯旧档案：老舎、張恨水、沈従文訪問紀要」、『新文学史料』2012 年第 4 期。原文は「這半年

ュー資料は、50 年代後期の張の消極的な心理状態を示している。

ただ、50 年代に発表された『記者外伝』は一種の独自性をもつ作品である。次節ではこの作品について考察したい。

第二節　北京イメージを集大成した『記者外伝』

一、創作の背景

1957 年 10 月から 1958 年 6 月まで、上海「新聞日報」の文芸欄「人民広場」で、張は未完の長編小説『記者外伝』を発表した。この作品で張は自身の経験をもとに、安徽出身の楊止波が 1920 年代の北京で記者として見聞したことを叙述し、北京の風俗と時事を詳細に描写した。張は作品中に、1919 年に北京に着いたときから 1933 年前後に北京を去るまでのことを書こうとしたが、[165]実際に完成できたのはその半分、1923 年 6 月に大統領黎元洪が北京を去るところまでだった。

この小説が未完である原因については、張友鸞が「精力の衰え」「創作能力の衰え」と認めている。[166]江流は張の甥である桂力剛の手紙を引用し、「彼（張）は私（桂）に次のように言った。これ（『記者外伝』）は自分の最後の長編小説だが、ここで創作をやめることにするのは、この小説はすでに組み版にされたものの、『新しい時代を重んじる』という風潮の影響で、取り止めになったからだ」。[167]1959 年 1 月のインタビューでは、張は「作家出版社の指導者は、この作品は思想性が強くなく、出版する価値がないと批判したそうだ。」と言っている。[168]このため、張は第二部を書かないことにした。

この他にも、当時張はいくつかのインタビューで『記者外伝』について言及した。1960 年に作家出版社に拒否された後、張は依然として『記者外伝』の出版を希望し、通俗出版社に投稿したが、再び拒否されてしまった。[169]こうして、『記者外伝』は張が生きている間にはついに単行本として出版されることがなかった。

『記者外伝』の創作の開始と中断は、当時の政治情勢にも関わっていたようである。1956 年 5 月、毛沢東は最高国務会議で「百花斉放、百家争鳴」を提唱した。百花斉放百家

来很少創作……对中国新聞社的約稿倒是有求必応……主要是為了照顧到海外影響，使海外華僑知道我仍在従事創作活動，不然也真沒有再創作的必要了，我対這様的生活感到厭倦」「現在的稿費太低，一千字只給四、五元，而辛辛苦苦写出來的文章，又怕発表後有什麽問題，会受到批評，一天提心吊膽……索性不写算了」。

[165]同上。

[166]张友鸾「章回小说大家张恨水」，『新闻学史料』1982 年第一期。原文は「精力的不継」「写作能力的衰退」。

[167]江流「潜山懐人」、「清明」1982 年第三期。原文は「他（張恨水）對我（桂力剛）說，這（《記者外傳》）是他最後一部長篇小說，打算就此停筆了，小說已排版，但在'厚今薄古'的影響下，被擠掉了。」

[168]贾俊学「文聯旧档案：老舎、張恨水、沈従文訪問紀要」（『新文学史料』2012 年第 4 期）を参照。原文は「作家出版社的領導，批評這部作品的思想性不強，沒有出版的価値」。

[169]同上。

争鳴とは「多彩な文化を開花させ、多様な意見を論争する」ということである。この方針の指導の下、文芸界には短い春が出現し、共産党体制を批評・風刺する「現実関与の文学」が一時的にブームとなった。『記者外伝』の題材はこうしたものではないとはいえ、張はこの方針に鼓舞され、自分の得意とする題材を用いて創作しようとしていた可能性がある。しかし、1957 年 6 月から、政策が急転換されて、反右派闘争が発動された。多数の作家を含む 50 万人以上の知識人が「右派」として職場を追われ、処分された。そして 1958 年の「大躍進」以後には、革命的リアリズムと革命的ロマンチシズムの結合が提唱された。『記者外伝』の題材と手法はこうした時代の要求に合わなかったため、創作も発表できなくなり取り止めになったのであろう。

『記者外伝』が連載発表された「新聞日報」は、ほかならぬ『啼笑因縁』が発表された「新聞報」より編集部の改組と改名を通じて、共産党を支持する新聞編集者によって「公私合営」となり、1949 年 6 月に復刊された新聞である。[170]「新聞日報」はある面で民主党派と繋がりを持ち、1957 年の「反右」運動のなかではやや微妙な位置づけにあったため、『記者外伝』のような小説の連載を続けることはできなくなった。それにもかかわらず、「新聞日報」は結局自身の独立性を保つことができず、1960 年に中共上海市委機関紙「解放日報」に併合された。[171]

二、『記者外伝』における北京イメージ

『記者外伝』は張が抗日戦争勝利以後に再び描いた、北京を舞台とする長編小説である。[172]この作品で、張は意識的に記憶のなかの北京を再現しようとしたのである。

表 6 の統計によると、『記者外伝』に出現する北京の都市イメージは質量ともに突出しているといえる。総計 65 種、140 回（16 回は描写がついている）にわたり、イメージが意識的に言及されている。他の作品と比較すれば、『春明外史』では 35 種、57 回（描写は 8 回)、『啼笑因縁』には 26 種、66 回（描写は 12 回）である。このようにイメージの総数としては、『記者外伝』が圧倒的に優位を占めている。字数で平均すれば、『啼笑因縁』には 10 万字あたり 9.0 種、22. 0 回のイメージがあるのに対し、『記者外伝』は 10 万字あたり 19.7 種、42.4 回と、驚くほどの頻度で北京イメージが出現している。『記者外伝』が張恨水の小説作品のなかで北京イメージをもっとも多く含んだ作品であることは間違いない。

65 種のイメージのうち、外城に関するものは 30 種で、全体の 46.2%ほどを占めており、内城東城に関するものは 12 種、内城西城にあるのは 11 種、中軸線に関するものは 6 種、郊外に関するものは 5 種である。よって、外城に関するイメージが『記者外伝』では重心

[170]鄒凡揚「同劉思慕一起辦報」、『中国記者』1994 年第 3 期。
[171]鐘沛璋編集『当代中国的新聞事業　上』、当代中国出版社、2009 年、364 頁。
[172] 1947 年に張は「新民報」で北京を舞台とする『五子登科』を発表したが、『五子登科』に出てくる北京イメージはわずかであり、連載は未完に終わっている。

となっているといえる。ちなみに第二章で取り上げた 13 部の作品においては、全部で 87 種あるイメージのうち、外城に関するイメージは 33 種、全体の 37.9%となっている。

このような外城イメージの割合は、張のデビュー作『春明外史』を連想させる。『記者外伝』と『春明外史』は、明らかにいくつかの共通点を持っている。第一に、いずれも 20 年代の前半の北京を背景として、当時の時事を小説に織り込んだである。第二に、いずれも安徽出身で、会館に住んでいて、楊姓の記者を主人公としている。第三に、主人公は外城の会館に住んでいたため、いずれの作品でも外城イメージの描写に重点が置かれている。『記者外伝』における外城イメージはイメージ全体の 46.2%を占めており、『春明外史』における外城イメージはイメージ全体の 54.3%を占めている。第四に、いずれも主人公の経歴を大筋として、さまざまな人物や事件をつなぎ合わせながら物語が展開される。

研究者によると、『春明外史』は構成にしまりがなく、人物が多すぎてそれぞれの個性があまりないという欠点をもち、『金粉世家』『啼笑因縁』に及ばない。[173]ただ、張恨水本人は、デビュー作である『春明外史』を自身最高の作品の一つであると考える傾向にある。[174]作家が偏愛する自身の作品のストーリー構造を用いて、晩年に新たな作品を創作しようとしたことは、一定の意義を持つのではないだろうか。

類似した構造、類似した人物、類似した外城イメージを重点としているという共通点と、作家の『春明外史』に対する偏愛から、『記者外伝』は作家による意識的な『春明外史』の書き直しであると推測できよう。なぜ作家は晩年に『春明外史』を書き直そうとしたのか。この問題を解釈するため、『春明外史』と『記者外伝』の相違点を考察してみたい。

この両作の最大の相違点は語られる時間であるといえる。『春明外史』の特徴の一つは、北京において発生したばかりの社会ニュースが小説のなかに書き込まれたことである。[175]しかもこの作品は新聞で連載発表され、作家は毎日作品を創作し、それが翌日の新聞で発表されるという方式になっていた。この特徴と方式は、小説中で語られる時間と北京社会の現実の時間がほぼ同時に進んでいることを示している。このため、『春明外史』は「ニュース色が濃い」といわれる。[176]当時の北京読者は、『春明外史』を「世界日報」のニュース版の外にあるニュースとして取り扱ったという。[177]

一方、『記者外伝』の場合、張は『記者外伝』を半ばまで書き終えた後、「新聞日報」に渡して連載発表を任せたのである。『春明外史』が 20 年代に 20 年代の物事を語ったのに対し、『記者外伝』は 50 年代に 20 年代の物事を語っている。すなわち、『春明外史』は「現在」のことを語ったのに対し、『記者外伝』は「過去」のことを語ったのである。『記者外伝』には、過去の物事を回想していることを示す文章が時々出現する。例えば、新世界のビルを描写するときには、「現在から見れば、新たに建てられたビルのほうが遥かに

[173]袁進『張恨水評伝』（南京大学出版社 2012 年）第六、七、八章を参照。劉少文『大衆媒体打造的神話』（中国社会科学出版社 2006 年）第九章も参照。
[174]張明明『回憶我的父親張恨水』（百花文藝出版社、1984 年）のなか「成名作和代表作」を参照。
[175]劉少文『大衆媒体打造的神話』（中国社会科学出版社 2006 年）第三章を参照。
[176]袁進『張恨水評伝』、南京大学出版社 2012 年、102 頁。
[177]張友鸞「章回小説大師張恨水」、張占国ら編集『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、105 頁。

大きい。しかし当時は、…北京で一、二に数えられるビルだった。」と語っている。[178]北京飯店に言及するときには、「当時の北京飯店は、新北京飯店と旧北京飯店とに分けられていた。現在の北京飯店の半分の大きさだったが、当時はなにとも比べられなかった」。[179]このような表現からみて、『記者外伝』の語り手が 50 年代の北京において 20 年代の北京社会の物事を回想して描写していることは明らかである。これだけでなく、語り手はストーリーが発生する時点のイメージを描写すると同時に、20 年代から 50 年代にかけてのイメージの変化も暗に示している。すなわち、語り手は 20 年代から 50 年代までの時間の中を自由に出入することができるのである。

語られる時間という相違点に基づいて、他の相違点もあげられる。第一に、『春明外史』では、作家にはもともと小説の構造と人物の設計についての全面的な構想と計画はなかった。毎日の連載では、作家はその場のインスピレーションに頼り、時には最近の社会ニュースをモデルにして、数千字の小説を完成させる。これに対し、『記者外伝』は発表前に、あらかじめよく構想された作品である。そのため、両作は共に数多くの人物の事件を語っているものの、『記者外伝』のほうが『春明外史』よりストーリーや主人公の設定が精緻で、綿密である。この点からみると、作家が『春明外史』を書き直そうとした意図も次のように推測できる。一、『春明外史』の欠点を修正し、より完璧な作品を世に出そうとしたのではないか。二、『春明外史』のなかでは、官僚、軍閥などで実権を握る人物、社会の名士への風刺が暗に行われており、実在する人物の名前を隠してストーリーのなかで当てこするように処理されている。これに対し、『記者外伝』においては心置きなく段祺瑞、黎元洪などと人物の実名を出しており、軍閥混戦・清帝婚礼など、社会における重大事件を直接描写してもいる。これは新中国の 50 年代に、民国の 20 年代の物事を冷静に評論したものである。三、ただし、新中国のイデオロギーは遵守しなければならない。『春明外史』によく出現する前門地域の遊女屋は、『記者外伝』にはまったく出現しない。また『記者外伝』の主人公である楊止波は、『春明外史』の主人公である楊杏園とは異なり、梨雲のような遊女との付き合いは一切ない。なぜなら、新中国において、遊女との付き合いは非道徳的であるとされたからである。『記者外伝』のヒロインである孫玉秋は婚姻の自由を求める女学生で、五四時期の新女性と共通点を持つ人物である。このように、時代に合わない内容は『記者外伝』のなかでは書き換えられている。

北京イメージの描写と表現は、『記者外伝』では『春明外史』よりもいっそう明らかかつ意識的になされている。その理由は以下のとおりである。

第一に、先に示したように、『記者外伝』に出現する北京イメージの数量は非常に多く、頻度も非常に高い。第二に、イメージに言及するとき、そのイメージの由来や歴史を紹介し現在と比較する文章がしばしば添えられている。例えば、第二回、楊止波が初めて中央

[178]張恨水『記者外伝』第七回。原文は「照現在看来，那就一幢新建的大楼，比它要大得多。可是在当年…那是数一数二的大楼了。」
[179]張恨水『記者外伝』第二十五回。原文は「当时的北京饭店，分老北京饭店，新北京饭店，只有现在的北京饭店一半那样大，可在当时却已觉得莫可比拟了」。

公園へ行ったときのことを描写するにあたり、中央公園の当時の様子、現在の様子、公園のなかの社稷壇の由来、入場券の価格とその価格の変化を一々紹介している。このように、語り手が 20 年代から 50 年代までの北京に自由に出入しているため、以前の作品にはない描写方式が新たに使用されたのである。第三に、『記者外伝』には統計上、『春明外史』よりパスが多い。『春明外史』にはパスが 10 種あり、イメージ全体の 28.6%を占めているが、これに対し『記者外伝』にはパスが 23 種あり、35.4%を占めている。パスは作家の都市に対する認識の出発点であり、もっともその認識が反映されるイメージであるため、パスの数量の増加はある程度認識の強化を示しており、これはあるいは意識的に呈した結果であるとも考えられよう。

総じて、『記者外伝』とはいったいどのような作品であるのか。前に述べた特徴（偏愛する作品の書き直し、創作の前に存在した構想と計画、20 年代の北京社会の再現、多数の北京イメージの意識的な呈示）に鑑みて、『記者外伝』は作家が北京に関する事柄を総括した作品であるのではないだろうか。その「総括」は、以下のことを含んでいる。

その一、作家の北京生活の総括。北京における衣食住などが記述されている。その二、記者としての職業生涯の総括。記者としてどのように仕事をしたかが描写されている。その三、北京の社会と風俗の総括。社会の時事、出来事、年中行事などが描写されている。その四、北京イメージの集大成。以上のように、張恨水は生き生きとした民国期の旧い北京を再現している。

それでは、なぜ張恨水は晩年にわざわざ北京に関する事柄を総括する作品を出したのだろうか。作品のなかで、作家が過去の物事を回想し、物事の変化を示唆していることは意味深いといえる。新中国の 50 年代は大きな変化がもたらされた時代であった。『記者外伝』と同時代の作品である「陶然亭」などをみれば、語り手の背後にいる作家はこの変化に対して肯定的な態度を示しているが、それは時代の刻印と思想改造の結果だったのではないだろうか。わざわざ旧時代の物事を懐かしく記述し、描写することは、それ自体が時代に逆らう行為であるといえよう。時代の要求に合わなかったからこそ、『記者外伝』は半ばまでしか書けなかったのである。このように、作家がわざわざ旧い北京の様相を描いたのは、過去の北京を記念するためであり、時代の激しい変化のなかで、その旧い北京の様子を文字によって作品とし、博物館に入れて保存するためであった。

一方、この作品が創作された当時、都市建設にともない、人民政府によってこの古い北京は徐々に取り壊されようとしていた。その代表的な事件は北京の城壁と城門の撤去である。

北京の城壁・城門と一部の古代建築は、50 年代から 60 年代にかけて続々と撤去された。『記者外伝』が最後に発表された 1958 年までの北京城門の撤去状況は、以下の表に示したとおりである。

城門の名前	取り壊された部分	時間	備考
朝陽門	城楼	1956 年 10 月	内城の東門
阜成門	甕城	1953 年	内城の西門

永定門	甕城	1951 年	外城の南門
広渠門	城楼と甕城	50 年代	外城の東門
東便門	城楼	1958 年	外城の東門
西便門	城楼と甕城	1952 年	外城の西門
広安門	城楼と甕城	1955 年（甕城） 1956 年（城楼）	外城の西門
地安門		1954－55 年	皇城の北門

これに加えて、長安街にあった長安左門と長安右門も 1952 年に取り壊された。東四牌楼と西四牌楼は 1955 年に取り壊された。1954 年から 1956 年まで、牌楼は四つを残してすべて取り壊された。外城城壁は 1952 年から徐々に取り壊された。[180]張が『記者外伝』のなかに書き上げた一部の北京イメージは、既に永遠に消えてしまった。張の北京認知地図も修正を迫られていたのではないか。張は「北京城郊的変化」を創作するとき、「わざわざ北京の十三の城門の辺りの変化を一々見に行く」と述べた。そのとき、張がいったいどのような情景を見たのか、どのようなことを思ったのかは、恐らく『記者外伝』のなかに見ることができるのではないだろうか。

[180]以上の時間は王軍『城記』（三聯書店 2003 年）314－316 頁を参照。

結論　北京における南方人アイデンティティー

第二章では、張恨水作品のなかの北京イメージを客観的に統計し、分析した。では、張はいったいどのような気持ちで、どのような動機をもって北京イメージを描写したのか。この章では以上の疑問点について、さらに考察を深めたい。それは張の都市アイデンティティー形成を探ることでもある。

張恨水の北京を舞台とした作品の主人公は、その多くが南方人である。『春明外史』の主人公の楊杏園と『記者外伝』の主人公の楊止波は安徽出身、『金粉世家』の金氏家族は南方出身、[181]『斯人記』の主人公の梁寒山は南方人、『啼笑因縁』の主人公の樊家樹は浙江杭州出身で、『天河配』の男の主人公である王玉和は安徽出身、『似水流年』の主人公の黄惜時は安徽出身、『落霞孤鶩』の主人公の江秋鶩は「南方のなまり」を持ち、『現代青年』の主人公の周計春は安徽潜山（張恨水と同じ）出身である。張恨水が描写した北京は多分に南方人の目から見た北京であったのだ。

第一節　歴史上の江南と北京

張恨水の出身地である安徽省は、長江流域に位置し、中国南方に属する。清代には安徽は江南省に属し、安徽の読書人は南京（現在江蘇省の省都）で科挙試験に参加していた。安徽は広義の江南地域に属する。

明清時代、北京は政治の中心であって官僚と士大夫が集まり、江南地域は文化伝統と美しい風景によって文人士大夫を育み、北京へ送り出していた。明清両代の進士と人材の出身地を統計した研究によれば、輩出した進士の数においてトップスリーの省は、第一位から順に浙江省（6505 人）、江蘇省（5926 人）、江西省（5033 人）であり、輩出した一流の専門家と学者の数においてトップスリーの省は、江蘇省（317 人）、浙江省（190 人）、安徽省（87 人）であった。[182]進士や専門家、学者は、名実相伴うエリート階層であるといえる。江南地域はこれらの人材の主な供給地であった。

江南地域が北京へ人材を供給しているという状況は、現在まで続いている。民国以後、科挙は廃止されたが、著名な大学の教師と学生の出身地を参照することはできる。当時の大学は全国から学生を募集しており、現在の大学のように各省の採用定員と割合を規定し

---

[181] 『金粉世家』第四回：「燕西は笑って言った：われらは南方人、これは南方のしきたりによる」原文は「燕西笑道：『…我们都是南辺人，这是照南辺規矩呢』」。

[182]沈登苗「明清全国進士与人才的時空分布及其相互関係」、『中国文化研究』1999 年第 26 期，59－66 頁。

てはいなかった。例えば、北京大学に 1923 年に入学（／在籍）した学生の中では、江蘇・浙江・安徽出身の学生が高い割合を占めている。また 1918 年に北京大学に勤めていた教師の中でも、この三省の出身者が割合において圧倒的な優位を占めている。[183]なお 1927－37 年の清華大学の教師の出身地に対する統計では、教師 398 人のうち、江蘇出身者が 83 人、浙江出身者が 54 人と首位を占めている。[184]鄧雲郷は、1928－37 年の北京の大学生の出身について次のように述べる。「文化古都時期、…著名な各大学では、70－80 パーセントの学生は全国各地から来ており、北平出身の学生はわずかであった。地方出身の学生のうち、もっとも多いのが江蘇・浙江・上海出身者で、次いで福建・四川・広東・両湖（湖南と湖北を指す）などである。近くの北方の各省出身者はかえって少ない。…このことは明、清以来一貫している。南方各省は物産が豊かで、文化が発展し、読書人が多いのに対し、北方各省は貧乏で、読書人が少ない。」[185]当時の人材の出身地は、依然としてある程度江南地域に集中していた。

江南は北京へ人材を輩出する以外に、資源と文化も供給していた。物産が豊かな江南は税金と食糧の主な供給地で、隋朝以来、京杭大運河によって北方の首都へ資源を輸送し、明清時代にも「天下の財貨と税金の半分は東南地域が占める。さらに嘉興・湖州・杭州・蘇州・常州・鎮江の六府が東南の六割を占める。」[186]といわれた。すなわち、江蘇の南部と浙江の北部（つまり狭義の江南地域）は最も豊かなことで著名だったのである。それに対し、明清時代の北京は一貫して消費都市であり、江南地域から輸送された資源に頼っていた。

江南の読書人と共に北京に入ったのは、江南の独自の特色ある地域文化であった。江南地域の優れた詩文、山水画、庭園なども中国文化の発展に大いに貢献した。江南園林を例として挙げてみたい。自然を楽しみ、幽遠な境地を眺める江南園林は、明清時代に流行し、北京の皇室園林に大きな影響を及ぼした。清代に盛んになった北京の皇室園林、たとえば後に公園として開放された三海や頤和園、既に壊滅した圓明園は、広大で雄壮な皇室の気勢を表わしていたが、同時に江南文人の園林の風格を追求し、模倣するものでもあった。[187]

こうしてみると、江南地域は北京に対して、ある程度文化的に優位に立っていたといえよう。こうした状況から、江南士人たちの北京に対する感情は微妙であったといえる。北京は確かに帝国の首都であったが、その官職等の身分を除けば、江南の読書人は必ずしも北京に対して好感を持たなかったと推測できる。江南は気候が温和で湿潤であり、風景も

---

[183]藤井省三：『20 世紀の中国文学』放送大学教育振興会　2006 年、46 頁。
[184]蘇雲峰『従清华学堂到清华大学――1928-1937』（三聯書店 2001 年）119 頁を参照。
[185]鄧雲郷「文化古城旧事」、河北教育出版社 2004 年、155 頁。原文は「文化古城时期……各著名大学中，百分之七八十是全国各地的，家住北平的是很少一部分。外地学生中以江苏、浙江、上海人最多，其次福建、四川、广东、两湖等省，距离近的北方各省，反而少……这自然是明、清以来一贯形成的。南方几省富庶，文化发达，读书人多。北方各省贫穷，读书人少。」
[186]原文は「天下財賦，東南居其半，而嘉湖杭蘇常鎮六府者，又居東南之六分」。『明神宗実録』巻一六三。
[187] 『中国大百科全書·建築、園林、城市規劃卷』（中国大百科全書出版社 1993 年）「江南園林」の項目を参照。

きれいであるため、江南の読書人は北京に来ると、北京の寒冷な気候と風土に不満を抱く傾向があった。例えば、清代の小説家の呉敬梓は安徽出身であったが、『儒林外史』のなかで、江南の読書人である杜少卿が北京で官職につくのを断る場面で、妻に向かってこう言わせている。「馬鹿だな、おまえは！こんなに遊ぶにぐあいの好い南京という場所にいて、しかも私が家にいて、春や秋にはいっちょに外出し、花よ酒よと暮らせるっていうのは、楽しいじゃないか！どうして私を京師へやりたいんだね？かりにおまえ連れて行ったにしても、京師は寒いし、おまえは身体が弱いんだ、風が吹いてくりゃ、凍え死んでしまう、拙いじゃないか！やっぱり行かないほうが穏当だよ！」[188]江南の人々は北京の大風と寒冷を恐れる傾向が見られる。なお、清代の北京では、漢人は内城に居住することが禁止されていたため、やむをえず外城に居住した。皇室の庭園は立ち入り禁止の場所であり、西山は北京城より遠距離であったため、読書人たちの遊覧できる地はわずかであり、江南と比べて娯楽環境は劣っていたのである。張恨水は『啼笑因縁』のなかで什刹海の見物を描写するとき、関寿峰の口を借りてこう言っている。

> 「當時は、北京城内で、先農壇、社稷壇は凡て禁斷の地で普通人は行かれず、三海と頤和園は云はずもがなぢやから、北京城内の金持連中は、一日中酒色に倦きると、清遊の地を探して氣分を換へようとする。それがここと陶然亭丈けぢやつたのだ。現在の金持連は動もすると西山に行かうといふが、考へてもみなさい、當時は自動車なんかないんぢやから、誰が死体を引つばる騾馬の車なんかに乗つて、あんな遠くまで行くもんかね。」[189]

明清時代の北京の上流階級の遊覧地は、什刹海と陶然亭しかなかったことがうかがわれる。

第二節　南方出身者の目で見た北京イメージ

一、張恨水早期作品のなかの北京と江南

「江南」という言葉は、明清以来は江蘇省の南部と浙江省の北部の一帯を指すが、これは狭義の「江南」である。広義の「江南」は長江以南の地域を含んでおり、特に長江下流の江蘇・浙江・安徽・江西の各省を指す。張恨水の出身地である安徽省潜山県は長江以北に位置しているとはいえ、狭義の江南に近く、地縁からいっても江南と近しい。張は江蘇

[188]呉敬梓『儒林外史』三十四回。日本語訳は稲田孝訳『儒林外史』による（平凡社、1968 年。301-302 頁。）
[189]張恨水『啼笑因縁』十五回。日本語訳は飯塚朗訳『啼笑因縁』下 116 頁（生活社、1943 年）による。

省の南部にある蘇州に滞在した際に、蘇州の典型的江南風物と楽しんだことがある。[190]

地方の人々は、北京へ来る前には必ず帝国の首都に関するイメージを持っている。このイメージは詩文、図画、口頭による伝説などによって想像して作り上げられたものである。北京へ来た後、もとのイメージは衝撃を受け、改変される。自らの目で見た北京はしばしば、もとのイメージに合わない場合がある。

風光明媚な江南地域から来た張恨水は、北京での滞在の初期には北京の風物を楽しまなかったらしい。のちの作品にもたびたび不満が表れている。これらの不満は主に気候風土をめぐるものだった。南方人は北京へ来ると、冬の厳寒としばしば起きる大風に慣れることができなかったが、これは自然なことである。張は早期のエッセー「刮風無客不思家」（「大風に、郷を思わぬ客はなし」）にこう書いている。

> この間、北京にまた大風が起きはじめた。家を出ると、満天の土ほこりが目に入る。…すべての北京にいる南方人は思う、山は青く川は緑、鳥がさえずり花が香る、やはり江南はよい。[191]

『春明外史』のなかで、蘇州出身の梨雲は「風や雨の天気になるとすぐに、北京に住む気が失せてしまいます。北京という場所には、大統領がいなければ、誰もこないと思います。私は幽霊になったとしても、きっと蘇州に戻りたいです。」と言っている。[192]

これらの文章のなかでは、北京の気候の短所が江南との比較によって強調されている。「大統領がここにいる」というのは、帝政以来北京が首都という地位によって全国の士人を引きつけてきたことを示しており、ある程度において北京と江南の関係の一側面を物語っている。

気候以外に、文化上の優越感も時たま出現する。『京塵幻影録』のなかで、離職した総理はこう言っている。

> 「北京というところは、首都とはいえ、やはり俗だ。もし江南であれば、名勝地には茶楼や酒屋がうまく配置されて、観光客の気に入るようになっている。いわゆる「板前や酒売りに至るまで、六朝煙水の気あり」というものだ。」[193]

この部分の典故の出所は古典小説『儒林外史』の二十九回「板前や酒売りに至るまで、

---

[190]張恨水「写作生涯回憶」六を参照。張占国ら編集：『張恨水研究資料』，知識産権出版社 2009 年、15 頁。

[191]原文は「這幾天，北京又開始刮大風。一出門，漫天漫地的灰塵，就會迷住人的双目。到了這個日子，所有在北京的南辺人，都有一種感想，以為山青水緑，鳥語花香，還是江南好。」――「刮風無客不思家」『張恨水説北京』、四川文芸出版社 2007 年、頁 13。

[192]『春明外史』第三回。原文は「梨雲道：『一到有風有雨的天気，教人就不願意在北京住。我想北京這個地方，要是沒有大總統，誰也不会来的。我是做鬼，将来也要回到蘇州去的。』」

[193]『京塵幻影録』第十四回。原文は「北京这地方，虽然是首善之区，究竟太俗。要是在江南，遇到名胜地方，茶楼酒馆，都布置得很适宜，很合游人意思，所谓酒保茶佣，都有六朝烟火气。」

六朝時代の煙水の気あり」で、六朝の古都である南京の住民の教養レベルの高さを言う一文である。ここでは北京の文化が「俗」なのに対し、江南地域の都市は文化が発展していることが言われる。

総括として、『斯人記』の主人公である梁寒山による感想を引用したい。

> 幼いころ、…北京全図を見て、たいへん羨ましく思った。将来成人して北京へ一度遊びに行くことができれば、死んでも思い残すことはないと思った。今ほんとうに北京に長年にわたり来るようになり、よいと思うとはいえ、ここには多くの満足できないところがあるとも思う。[194]

「幼いころ」の心理は、帝政時代の士人が首都に憧れこれを慕っていたという心理状態を表している。いっぽう「満足できない」原因としては、全くの想像によって形成されたイメージと実際に目で見て形成されたイメージの間には、必ず大きな相違点があるということが考えられる。

北京に対する不満が言われるとき、江南や南方は比較対象として常に言及される。それだけでなく、単純に郷愁を表すために南方の風景や土産を懐かしく描写することもある。すなわち「古人は蓴羹鱸膾の思いを免れない。」[195]の類である。『春明外史』のなかには、南方の梅雨を描写した文章がある。

> われわれは江南に住んでいるとき、四、五月の時分が一番苦しかった。雨が降り出すと十日半月もの間ずっと降り続き、しまいには雨粒を見ても面白くないのに加え、ベッドに寝れば軒下にポタポタと響く音が聞こえ、大いに苛々させられる。上流家庭の家は高楼で、それはまだいいが、狭苦しい家に住む者にとっては、本当に耐えられず、青苔が壁の半ばまで生え、ベッドの足も湿気ている。この時期の街の果物売りは、ちょうど丸くて青い梅を天秤棒で担いで、狭い通りへ売りに行く。北京というところには、梅の木がなく、江南のような梅雨やら青梅やらもなく、ただ街で売られる青い杏は、青梅と似たりよったりで、これを見ると、芭蕉が壁より高く茂り、薔薇が棚いっぱいに咲く風景を思い出す。私たちはほとんどが南方人なので、このことを話すと、家が恋しくなってしまうだろう。[196]

---

[194] 『斯人記』第六回。原文は「小的时候…看到一张画的北京全图，心里就欣羡得了不得，以为将来长大成人，能到北京去玩一趟，今生死也无怨了。而今真个到北京来了许多年，不但不觉得怎样好，而且还以为这地方许多令人不能满意之处。」

[195]中国語原文は「鱸魚蓴菜之思，古人都所不免。」典故の出所は、晋代の張翰が故郷呉中（後の江南地域）の料理である蓴菜の吸い物と鱸のなますのおいしさにひかれるあまり、洛陽の官を辞して帰郷したという故事である。

[196]張恨水『春明外史』第四十回。原文は「我们住在江南，到了那四五月的时候，最是苦不过，连阴雨，一下总是十天半月，到后来不但看见雨点，心里不痛快，睡在床上，听见屋檐下滴滴搭搭的声音，就烦恼得很。上等人家的房屋，高楼大厦，那还罢了，小住户人家，那真不了，青苔长到墙中间，床腿也是湿的。这个时候街上的水果担子，就正挑着又圆又青的梅子，在小巷里去卖啦。北京这个地方，没有梅子，也不像江南，

ここでは南方人も梅雨に悩まされることが描写されている。ただそれは、悩ましくも懐かしいという気持ちと郷愁をもたらすものとされ、江南に対するマイナスな評価は下されていない。

張恨水は早期の作品、特に『啼笑因縁』以前の作品では、北京の風物や民俗を興味深く描写はするものの、語り手または人物の口を借りて肯定的に評価したり、または比較の結果肯定的に評価したりすることはほとんどない。これらの作品のなかでは、北京は江南と比べて、風景も文化も劣っているとする傾向が見られる。

二、転換点としての『啼笑因縁』

こうした傾向の転換点となったのが『啼笑因縁』である。『啼笑因縁』は 1929 年に創作され、1930 年に上海「新聞報」で連載発表された。この作品によって張の影響は北京から南方の上海にまで広がった。

『啼笑因縁』の冒頭の文章は以下のようである。

> 幾百年か永い間の名稱を傳へてきた北京だつたが、いま北平と改められて、あの首善之區といふ四字の尊稱も失はれてしまつた。然し、ここには多くの偉大な建築や、久しい文化の跡を留めて、昔ながらに親しまれる。とりわけ氣候が尤もよく、他の都ではいくら金をかけても一寸購はれまい。ここは塞外の樣な苦寒もなく、江南の樣な苦熱もなく、（中略）雨が降ると路がぬかり、部屋がじめじめとして幾日も外出が出来ぬといふのは、南方人の苦痛の種だが、北平の人は雨に逢ふと、却つて嬉しがるのだ。それといふのは、十日も二十日も雨がないし、一雨来ても直ぐに霽れ上つて、澄み切つた空には塵も揚らず、満城の空氣が殊の外すがすがしいからだ。北平の家はまた南方のとは全然反對で、住居は出来る丈け小さくして、庭をずつと大きくとるから、一寸中庭といふのは當らぬやうだ。そのやうに庭が大きく、到る處に樹木があるから、雨上りのあと、西山に行つてこの古都を眺めてみたら、樓臺宮闕は緑樹の間に半ば見え隠れて、まことに北方の雨の喜びを感ずるであらう。南方では雨をいとふ。殊に梅雨の頃は、舊暦の四月の初から、五月の中頃まで雨ばかりであるが、然し北平は、依然として晴れ渡り、而もここの温度は高くなく、その頃に漸く海棠の花が開き、楊柳の色も濃く、まさに絶好の季節である。[197]

有什么梅天，有什么青梅，那街上卖的青杏，却和青梅差不多，看见这种东西，令人想起芭蕉过墙，蔷薇满架的境况。我们这里，大概都是南边人，说起来了，恐怕都要想家呢。」

[197]張恨水『啼笑因縁』第一回。日本語訳は飯塚朗訳『啼笑因縁』上 2 頁（生活社、1943 年）による。

この引用文が示すように、『啼笑因縁』では張恨水は北京の気候の長所に重点を置いた。この部分に、「江南」「南方」「南方人」が 4 回ほど出現することは注目に値しよう。「南方」「江南」は張の出身地であるだけでなく、上海紙「新聞報」の読者の居住地でもある。張は北京滞在経験のない南方読者に北京の特徴を紹介する際に、多湿高温の気候を苦手とする南方人としての立場から、北京の気候の長所を強調したのである。

面白いことに、ここで描写された江南の雨は、前文に引用した『春明外史』の段落とほぼ同じ様子であるが、生じる感想は異なっている。『春明外史』の描写は郷愁を喚起し、「苦しくても懐かしい」という雰囲気に溢れている。それに対し、『啼笑因縁』の描写は「やはり北京がよい」という傾向によって貫かれている。描写は類似しているが、感情の基調は完全に変化しているのである。

『啼笑因縁』のなかに体現される作家の都市アイデンティティーを考察するため、物語を語る視点に注目したい。この作品のなかには、全知の語り手が存在しており、冒頭の引用文はその語り手が語ったものである。この部分での語り手の口調は、南方の読者に北京を紹介するガイドのようである。『啼笑因縁』全編のなかでは、しばしば語り手が出現し、全局を紹介する役目を果たす。例えば、

> 北京の城は、東西南北が判然した處で、通りは皆北から南へ、東から西へと續き、人の住む家も、中央に庭を挾んで四方に建てる。だからここの人は、年寄りでも子供でも四方を心得て居り、上下左右などといふことを云はず、皆東西南北といふである。[198]

この全知の語り手以外の登場人物は「視点人物」であり、その人物によって知覚された事柄のみが描かれる。中でも主要な「視点人物」は主人公の樊家樹である。作家は樊家樹の目を通して、彼の見物した天橋、先農壇、中央公園、北海、什刹海などの北京イメージを描写した。樊家樹は経済と文化が発展した江南地域の杭州出身で、北京へ進学予定の学生であるため、南方人の視野をもち、教養レベルが高く、鑑賞と評価の眼差しをもっている。この人物の視点を用いることによって、南方読者の心理に寄り添うことができる。樊家樹が見慣れない物事に言及するときは、作者は全知の語り手または北京経験がより豊かな人物の口を借りて詳しい説明や紹介を行なう。例えば、樊家樹が初めて什刹海を見物する場面では、別の登場人物である関寿峰の口を借りて、什刹海の由来や中央公園との比較などを語り、読者の理解を助けている。

こうしてみると、視点人物である樊家樹は南方出身の遊学・訪問者を、全ての局面を熟知した語り手は南方読者のためのガイドを、ほかの幾人かの人物は樊家樹のための地元の解説員の役割をそれぞれ務めているといえる。すなわち、『啼笑因縁』は充分に南方読者の視野と需要に気を配った作品なのである。作家自身が南方読者の視野を熟知していると

[198]張恨水『啼笑因縁』第一回。日本語訳は飯塚朗訳『啼笑因縁』（生活社、1943 年）による。

同時に豊かな北京体験を持っており、南方人と北京との間の橋渡しをしているといえる。

また、作家は樊家樹の観点を通じて、初めて江南に対する北京の優位性を表現している。

> 「西湖から歸つて来られた方が北海の景色になんか醉ふ筈がありませんわ。」
>
> 「いいえ。西湖には西湖のよさがあり、北海には北海のよさがあります。かういふ、湖と山に圍まれた槐の林は、西湖にはありませんよ。…北岸の紅色の牆壁が琉璃瓦との配合よく、緑の樹々の間に、この湖に照り返される日の光に映えている様子は何ともいえぬ美観です。全く素晴らしい絵画です。西湖ばかりぢやあない。全世界で北京にばかりかうした美しい景色があるのでせう。僕は今度杭州へ帰って、西湖に別荘を造る者の愚かさを知りました。東洋の美をもった家を造らうとせず、澤山西洋館を造らうとするのです。中でも洋風旅館ときたら俗で耐えられません。若しも宮殿式に紅牆緑瓦の楼閣を建てれば必ず洋館よりいいでせうに。」[199]

西湖は杭州の名所であり、江南の山水と人文景観の代表的存在で、その最高峰とされる。ここでは北海の風景の美しさが「世界中に北京しかない」とまで絶賛され、西湖に勝っていると断じられている。ただし、詳しく見てみれば、樊家樹がここで批判しているのは主に西湖の周辺に新たに建てられた洋風の建築であり、伝統的な西湖の雰囲気にそぐわない「俗」な近代建築である。言い換えれば、ある程度において、樊家樹は伝統的江南の近代化に抗議している。これは多少なりとも張恨水の審美と思想を反映しているのだろう。

総じて、『啼笑因縁』では、張は早期作品のなかの北京と江南のイメージを逆転させている。『啼笑因縁』は主に南方読者向きの作品であることを考えると、この逆転はいっそう意味深い。

三、抗戦期：重慶における「下江人」

1937 年に日中戦争が勃発して以降、張はもはや北京を舞台とした長編小説を創作しなくなった。[200]張の息子は「父親は北京に数年間滞在したが、その全てに新鮮味を感じ続けた」と回想している。[201]この「全てに新鮮味を感じる」能力は、張の観察力と創作の素材を獲得する能力を物語っているのであろう。常に北京の時事ニュースと社会のうわさからストーリーのインスピレーションを獲得してきた張恨水は、北京の生活を離れると、北京を舞台とした小説を創作しにくくなったと推測できよう。

---

[199]張恨水『啼笑因縁』第十四回。日本語訳は飯塚朗訳『啼笑因縁』（生活社、1943 年）による。

[200] 但し、1936 年に未完のままに終わっていた連載『夜深沈』が 1939 年に書き終えられたことを除く。

[201]張伍『我的父親張恨水』春風文藝出版社、2002 年、頁 102。原文は「父親雖寄居北京數年，但対一切都総葆有新鮮感」。

1938 年、重慶に到着してから後の創作について、張は自ら「武漢、香港、上海で発表された小説は、横暴な人に抵抗して屈服に甘んじない人物を題材とするものだった。四川で発表されたものでは、筆鋒を転じ、後方の人々の苦悶を晴らそうとした。」。[202]と述べている。1938-45 年に重慶で発表された作品は、確かに「後方の人々」のために重慶の社会生活を描写している。そのなかでも、南京と北平から避難してきた人物が描かれていることには注意すべきである。

1941-45 年に発表された『牛馬走』の主人公である区家は北平の教師の家系で、戦争のため重慶に移住した。作中ではしばしば北平と南京について言及され、たとえば区亜雄は「当年南京にいたとき…」[203]、区亜英の同窓である辺四平は「学生だったとき、北平に住んでいた…南京で公務員を務めたとき…」[204]と、それぞれ回想する場面がある。また同時期に発表された『偶像』の主人公である丁古雲は、北平から重慶に移住した芸術家であり、「われわれが北平にいたときのことを覚えている…」と懐かしんで回想する。[205]

1943-45 年に発表された『第二条路』(『傲霜花』) では、四川方言が登場する部分に、わざわざ括弧書きの注釈がつけられている。

> 近くの貧乏な教授たちを誘って散歩に行って、上は天文から、下は地理まで、龍門陣を張って二三時間をつぶした。(四川では世間話をすることを龍門陣を張ると言う。)[206]

これは重慶にいる外地出身の読者に配慮したためである。

エッセー集の「両都賦」の序のなかでは、わざわざ北方方言の「咱们」を使い、読者との一体感を表した。[207]この「咱们」を理解できた読者は、北方から重慶に移住した人々であったに違いない。

以上の作品は全て重慶「新民報」で連載発表されたものである。戦時下の重慶において、「新民报」を「四川人も下江人も自分の新聞と見なした。」という存在だった[208]。「下江人」とは四川方言で、長江下中流の各省の人を呼ぶ言葉である。論者の李永東は、張恨水の重慶にいた時期の創作は「下江人」読者に向けて書かれていたと論じる。[209]実際には、張の意識していた読者には狭義の「下江人」だけでなく、各地から重慶へ避難してきた人々、

---

[202]張恨水『八十一夢』自序。原文は「发表于汉港沪者，其小说题材，多为抵抗横强不甘屈服的人物。发表于渝者，则略转笔锋，思有以排解后方人士之苦闷」。
[203]張恨水『牛馬走』第一章。原文は「在北平和南京的时候...」
[204]張恨水『牛馬走』第二章。原文は「想起我们作学生时，家在北平...便是我们在南京当公务员的时候...」
[205]張恨水『偶像』第二章。原文は「记得我们在北平的时候...」
[206] 『傲霜花』第二章。原文は「在邀著附近的窮教授們在路上散散步，上自天文、下至地理，擺擺龍門陣也就消磨了両三小時（四川謂談天為擺龍門陣)。」
[207]本論文の第三章を参照。
[208]張明明『回憶我的父親張恨水』，百花文藝出版社、1984 年、131 頁。原文は「四川人和下江人都视为是自己的报纸。」
[209]李永東「論陪都語境下張恨水的重慶書写」、『中国文学研究』2009 年第 4 期。

たとえば北平などの北方地域から来た人々も含まれていた。張恨水本人は安徽出身で、重慶に来る前には南京で新聞業に従事しており、名実ともに「下江人」である。ただし、張は十数年の北京滞在経験をもち、「下江人」を代弁するだけでなく、北平から来た人々をも代弁していた。

エッセー集「両都賦」は、戦時に重慶に滞在した外地出身者の心の声をもっともよく表現している。本論文の第三章に論じたように、ここに収録された 26 篇はいずれも北平と南京の食べ物、食事処、名勝、遊覧地を重点的に描写しており、夢のように美しく懐かしい雰囲気を描き出している。

このほか 1939-41 年に発表された非現実主義的な小説『八十一夢』の第五夢「号外号外」では、南京が取り戻される光景が描写され、南京に戻ったら「夫子廟奇芳閣へ喫茶に行こう」[210]との憧れが語られる。さらに第三十二夢「日曜日」では、「僕は真に南京を懐かしむのだ」[211]と登場人物に言わせている。

以上の作品のなかで、戦前の北平と南京とに関する回想は繰り返し出現するモチーフであるといえる。特に、張の息子の回想によると、張恨水は公の場で何度も、北京は彼の第二の故郷であり、彼の心の支えであり、魂を託す場所であると表明したという。[212]

さて、なぜ重慶で発表された作品に南京と北平を重点とした回想の描写が出てくるのか。表面的な原因としては、この二つの都市が作家本人と深く関わっていたためである。実際、南京は中華民国の首都であり、政治の上で国家を代表していた。北平は悠久の歴史をもつ古都であり、中華民族の文化と伝統を代表していた。南京と北平は国民国家のアイデンティティーを象徴していた。よって、この両都イメージの描写は国民国家に対する想像を支える重要な部分であったといえる。

張恨水個人のアイデンティティーを考えると、南京は張の政治アイデンティティーを代表し、北京は張の文化アイデンティティーを代表していたのではないだろうか。

第三節　陶然亭のイメージ：張恨水の心理・身分の反映

陶然亭地域は外城の南部に位置しており、元代にはここに寺廟が建てられ、明・清両代には窯廠（瓦・陶器などを焼く工場）が開設された。陶然亭という建物は清の康熙 34 年(1695 年)に工部郎中の江藻が建てたもので、初めは江亭といった。「陶然」という名前は白居易の「更に菊黄にして家酪の熟するを待って、君と共に一たび酔うて一たび陶然たらん」[213]という詩句による。元代に初めて建てられた寺廟である慈悲庵は、始終陶然亭地域の名勝でもある。陶然亭地域は清朝の科挙士人が集中した宣武門以南の地域にほど近く、各地

[210] 原文は「上夫子庙奇芳阁吃茶」。
[211] 原文は「我真想着南京…」
[212]張伍『雪泥印痕－我的父親張恨水』、団結出版社、2006 年、200 頁。
[213]白居易「与梦得沽酒闲饮且约后期」。

からやってきた士人たちの評判を得て、全国的に有名になった。1950 年代に政府によって東西両湖が開削され、その周囲には築山が設けられ、さらに橋や小径が整備され、木や草花が植えられて公園とされた。

陶然亭というイメージは、張恨水の作品のなかでは、出現の頻度から見れば中央公園ほど目立っているとはいえず、またもともと有名であるため、天橋のように作品によって全国に名を馳せたわけでもない。ただ、張恨水の陶然亭に関する描写と描写に託された感情は時間につれて変化してきた。この変化は張恨水自身の心理的変化を反映しているのではないか。

北京へ来る前、張恨水は士人の詩文のなかで陶然亭を知り、北京の最高の名所の一つという強い印象を持っていた。「三十年前の北京紀行文では、十中七八が、必ず陶然亭に言及していた。」「私の場合、子供のとき、小説で陶然亭のことを読んで、西湖と同じように憧れていた。」[214]「陶然亭の名声は大変なもので、武昌の黄鶴楼、済南の趵突泉と同じである。北京へ来た人が家に帰ると、必ず『陶然亭には行きましたか』と聞かれたものだ。[215]」と回想した。

北京へ来た直後、張は陶然亭を訪れた。しかし、張は陶然亭の景色に失望して、「有名無実」と結論づけた。複数の作品のなかに、その心理が表されている。「故都に着いてから一週間足らずのうちに、私は陶然亭を訪れて、非常に失望した。」[216]『春明外史』のなかには、「有名無実」の陶然亭が二回登場する。

> 北京の陶然亭などは一つの土丘にすぎず、虚名を負っています。われわれは南方にいたとき、この亭はきっと景色がよいに違いないと思っていましたが、後になって一回訪れたところ、二度と行きたいとは思わなくなりました。[217]

> ある人は「われわれは幼いときから、北京の陶然亭は一番有名な名所だと聞いてきましたが、もとよりこんなところだったのです。なぜこれほど名声が広まっているのか、私は本当にわかりません。」と言った。またある人は「私はいつも、『陶然亭に行ったことがないなら、見に来なければならない』という言葉を聞いてきたし、私自身きっと素晴らしいのだろうと思っていました。もしこんな様子だと知っていたら、絶対来ませんでした。」と言った。[218]

---

[214]張恨水「乱葦隠寒塘」、『両都賦』。原文は「在三十年前的京華遊記上，十有七八，必会提到陶然亭。」「就以我而論，在做小孩子的時候，就在小說上看到了陶然亭，把它当了西湖一般的心向往之。」

[215] 原文は「陶然亭好大一個名聲，它就跟武昌黄鶴楼、済南趵突泉一様。来過北京的人回家後，家里一定会問：『你到過陶然亭嗎？』」張恨水「陶然亭」、『緑了芭蕉』、江蘇文芸出版社 2006 年。

[216]張恨水「乱葦隠寒塘」、『両都賦』。原文は「及至我到了故都，不満一星期，我就去拜訪陶然亭，才大為失望。」

[217]張恨水『春明外史』第三回。原文は「好像北京陶然亭，不過一個土墩，空負虚名。我們在南方的時候，心里以為這個亭，必定有些景致，到後來逛過一回，就不想第二次了。」

[218]張恨水『春明外史』第二十五回。原文は「有一個人道：『我們從小就聴見人家說，北京的陶然亭，是最有名的一処名勝，原來卻是這様一所地方，我真不懂，何以享這麽大一個盛名？』又有一個人道：『我是老

ここでは小説の人物の口を借りて、陶然亭に対する失望の感情が表現されている。こうした心理は、エッセーのなかで直接語られている張自身の感想と一致している。江南の美しい風景を見慣れた張にとって、真実の陶然亭の景色は想像していたような絶景のレベルに達しないものであった。

ただ、幾年かの北京滞在を経て、張はしだいに陶然亭の長所を知るようになった。1926年に創作が開始された『京塵幻影録』の冒頭では、語り手はこう書いている。

> 北京の陶然亭はもともと名勝の地である。ただの広々とした地に立つ廟宇にすぎないが、晩春から仲秋まで、ここには一面の浜荻と古城壁が広がっており、夕日がまだ沈みきらず、夕風が吹きはじめる頃合いになると、西山の夕日が浜荻の中の何本かの孤樹に照り映えて、幽寂にして荒涼たる情景が広がる。この煙霧に覆われた北京城のなかには、もともと行くに値するところはあまりない。年中ほこりの中で暮らす人が、たまたまここへ来て、すがすがしい空気を吸えば、精神は自然とこれによって爽快になる。[219]

ここでは陶然亭の景色が張によって初めて直接的に描写されている。1926 年の時点で、張は既に 7 年間にわたって北京に滞在していた。ここで描写されている景色は美しいとはいえないが、張は「煙霧に覆われた北京城のなかでは、行くに値するところはわずかだ」というマイナスの評価とのコントラストで、陶然亭の景色の長所を際立たせている。

1944 年に重慶で創作されたエッセー「乱葦隠寒塘」のなかで、張はさらに陶然亭の景色についてこう回想している。

> それは内城宣武門の外、外城永定門の内、南下窪子の南にある。そこには人家がなく、ただ広々とした平野に、一面の浜荻が生い茂り、幾つかの墓があるだけだ。浜荻の生えている低い土地は、水があると無いにかかわらず、北方人には「葦塘子」と呼ばれている。春は草があり、夏は高粱畑のようだが、秋が来ると、浜荻が黄色がかった褐色となる。浜荻の葉には穂が出て、球形の花がつく。この花は風に吹かれて、アヒルの綿毛や雪花のように空中に飛び交う。浜荻の叢の中には道があり、車馬が通行でき、われわれがもし秋に行けば、人の気配がなく晴れた空を雪が埋め尽くすような環境の中を進むことができる。…三十年前、廟のなかには清潔な家屋と木があって、休憩することができた。和尚に茶を淹れても

聴見你們説，陶然亭沒到過，要来看看，我也以為不錯。要知是這様子，我真不来。』」

[219] 張恨水『京塵幻影録』序章。原文は「北京的陶然亭本是一個名勝地方。雖然僅僅是空旷地上一座廟宇，可是由春暮起，到仲秋止，這里四野青蘆，一帯古堞，当那夕陽未下，晚風初起的時候，西山的余霞，映著葦塘子里幾株孤樹，満布著清幽蕭疏的氣象。在這煙霧沈天的北京城里，本来無甚可去的地方，終年在灰塵里度日子的人，偶然走到這里來，一吸新鮮空氣，精神自然為之一爽了。」

らい、高い小山の欄干の傍に座って、一万株もの黄色い浜荻のなかに、三三五五伸びている柳を眺めた。切れ目のところには浅い池があり、幾つかの白い影がのぞいていた。喧噪の俗世の外におり、それでいて全く興趣がないというわけでもない。北を望めば十万の人家があり、霧が立ち込めている。その上にはあるか無きかの風情で、西山の青い影がにじんでいる。南を望めば高い城壁が聳え、はるか遠く二つの箭楼が白雲の下に立っている。それだけだった。[220]

『京塵幻影録』の引用文とは異なり、ここの描写では北京のマイナスなイメージが払拭され、ほとんど直接的に景色の境地と特色が表現されている。文章には古典詩文の雰囲気があふれている。「煙霧に覆われた」というように空気が悪いとされた北京城に対して、ここでは「十万の人家があり、霧が立ち込めている」とその繁栄に重点を置いた描写がされていることは興味深い。光景は類似しているが、そこに寄せられる感情はまったく異なるものになっている。この引用文を見ると、普通の鑑賞が全面的な激賞へと変わっているのである。

それだけでなく、「乱葦隠寒塘」において、張は陶然亭に関わる個人的な記憶も記している。

私は北平に二十年近く滞在し、そのほとんど半分の時間を南城で過ごした。世間の出来事に煩わされたときには、いつも一人で陶然亭に行って、浜荻のなかに浅い池を探して、一時間もぶらついた。もし黄葉の散りかけた柳に出会えたらなおよかった。枯れた枝を撫でて、池のなかの青空を見ることができる。ここは人もなく市場の喧噪もなく、長所はないものの、繁華な場の煩わしさを洗い流すことはできるのだ。[221]

この文章からみると、張は北京滞在期に繰り返し陶然亭を訪れており、陶然亭は既に張の心の休憩所となっていたことがわかる。

同時に、張は陶然亭が盛名を馳せた原因を理性的にこう概括した。

---

[220]張恨水「乱葦隠寒塘」、『両都賦』。原文は「它在内城宣武門外，外城永定門内，南下窪子以南。那里沒有人家，只是旷野上，一片葦塘子，有幾堆野墳而已。長蘆葦的低地，不問有水無水，北人叫著葦塘子。春天是草，夏天像高粱地，秋天來了，蘆葦変成了赭黄色。蘆葦葉子上，伸出桿子，上面有成球的花。花被風一吹，像鴨絨，也像雪花，満空乱飛。葦叢中間，有一條人行土路，車馬通行，我們若是秋天去，就可以在這悄無人声漫天晴雪的環境里前往。…三十年前，廟里還有些乾凈的軒樹，可以歇足。和尚泡一壺茶末，坐在高坡欄桿邊，看万株黄蘆之中，三三両両，伸了幾棵老柳。缺口処，有那浅水野塘，露著幾塊白影。在紅塵十丈之外，却也不無一点意思。北望是人家十萬，霧気騰騰，其上略有略無，抹一帯西山青影。南望却是一道高高的城墻，遠遠両個箭楼，立在白雲下，如是而已。」

[221]張恨水「乱葦隠寒塘」、『両都賦』。原文は「我在北平将近二十年，在南城幾乎勾留一半的時間，每当人事煩擾的時候，常是一個人跑去陶然亭，在蘆葦叢中，找一個野水浅塘，徘徊一小時，若遇到一棵半落黄葉的柳樹，那更好，可以手攀枯條，看水里的青天。這里沒有人，沒有一切市声，雖無長処，洗滌繁華場中的煩恼，却是可能的。」

それではなぜ陶然亭はこれほどの盛名を馳せているのか。これには些かわけがある。第一に、帝制時代、北京の偉大な建築や宮殿庭園は一切開放されておらず、墨客騒人の鑑賞に供される場所は無きに等しかったといえるが、ただ二閘、什刹海、菱角坑、陶然亭といった数箇所の天然の風景を持つ場所だけは少しは顧みるに値し、そのなかで陶然亭は抜きん出て良い所だった。第二に、名勝の伝播は、終始われわれの筆の誇張に頼っており、これはわれわれが誇りに思ってよいことである。北京の南城は、当時上京して名声を求めた科挙受験生が集まった場所だったため、南北各地の受験生はこの名前を各地に持ち帰ったのだ。第三に、私は百年以上前の「江亭覽勝図」を見たことがあるが、そこに描かれた陶然亭は情景が物寂しく、実に悪くない。[222]

以上の議論からは作者の陶然亭に対する考察と思考が見てとれる。張の陶然亭イメージはなかなか深いものといえる。

エッセー「乱葦隠寒塘」はエッセー集『両都賦』に収録されている。第三章で論じたように、日中戦争という特殊な時期には、記憶のなかの北京が「夢」のように美しく見えるという作者の特殊な心理状態が働いた。「乱葦隠寒塘」も同様であろう。「乱葦隠寒塘」において、陶然亭の描写はクライマックスに達した。陶然亭というイメージは理性的でもあり感性的でもある完璧な状態といえよう。

しかし、50 年代に執筆されたエッセー「陶然亭」では、この民国期の陶然亭のイメージが逆転されている。

エッセー「陶然亭」中で描かれる初めての陶然亭訪問は、前の引用文とほぼ同じく失望をもたらしたとされるが、ここではより多くのディテールが描写されている。それらは例えば、「ごみがいっぱい」「地面がでこぼこだ」「家屋がぼろぼろになっている」「木がばらばらだ」「ハエと蚊だらけ」など、まったくマイナスなイメージであった。[223]このマイナスのイメージは三十年にわたって続く。

この三十年あまりの間、陶然亭は年々ますます悪くなっている。私は三回北京へ来たことがあり、滞在時間も毎回長かったので、一、二回は陶然亭に行ったことがあるのだが、結局「地匝万蘆吹絮乱」の詩以外には何もないように感じる。

---

[222]張恨水「乱葦隠寒塘」、『両都賦』。原文は「然則陶然亭何以享有這大的盛名？這有点原故：第一，在帝制時代，北京的一切偉大建築，宮殿園林，全未開放，供給墨客騒人欣賞的地方，可以説等於没有，只有二閘、什刹海、菱角坑、陶然亭，両三処有天然風景的地方，聊可一顧，而陶然亭是更好一点。第二，名勝的流伝，始終頼於我們這支筆的誇大，這是我們值得自傲的。北京的南鎮，是当年上京求名的挙子麇集之処，所以天南地北的挙子，把這個名字帯到八方。第三，我看過一百多年前的一張「江亭覽勝図」，上面所写的陶然亭，水土蕭疏實在也不壊。」

[223]原文は「満地垃圾」「坎坷不平」「四周人家，房屋破破爛爛」「雖然有些樹，但也七零八落」「蒼蠅蚊子到処乱鉆」。

実に名声に釣り合っていない。[224]

「乱葦隠寒塘」のような長期滞在後の激賞は消えてしまい、北京滞在期に繰り返し陶然亭を訪れた記憶も修正されて、「一、二回行った」ということになっている。エッセー「陶然亭」のなかでは、民国期の陶然亭のイメージはあきらかに抑圧されていると考えられる。

細部の描写として、一つの例があげられる。「乱葦隠寒塘」では、陶然亭から南を眺めると、城壁と城門の箭楼が借景として見え、全体の景色のなかに幽遠な境地を秘めていると描写されている。それに対し、「陶然亭」では、政府によって築かれた小山が南の城壁を遮った、との描写に変わっている。「この小山がなければ、直接城壁が見えたのだが、このような面白さはなくなった。」[225]城壁が見えるのと見えないのと、どちらが審美的に優れていたのか、それについてはここでは議論しない。ただ作品の内容から見て、同じ景観に対する張の審美観が変化したことは確かである。

エッセー「陶然亭」は、その大部分の紙幅を以て 1956 年以後の陶然亭公園を描写している。張は全景を描写する手法をやめて、歩いたときに見える景色を順序立てて描写しながら、50 年代に政府によって修繕された新しい陶然亭公園について述べ、そのなかで、「昔と比べて、陶然亭は驚くほどよくなった。」という結論を下した。[226]その最後は以下のような文で締めくくられている。

> 以前の汚い土山のままだったなら、二三年で（陶然亭は）なくなってしまっていたことだろう。陶然亭を知っている人は、きっと書物の上でその名残をたどっただけなのだろう。今陶然亭に遊んでみれば、ほんとうにうっとりするほど楽しいのだ。[227]

このように、エッセー「陶然亭」は民国期の「旧い」陶然亭と新中国の新しい陶然亭公園という鮮明な対比を通じて、民国期の陶然亭イメージを抑圧し、新中国の陶然亭公園イメージを宣揚している。

以上の陶然亭イメージをまとめると、時間順に以下の五つとなる。

1．想像されたイメージ：北京へ行く前に詩文のなかの盛名によって想像された完璧すぎるイメージ。

2．南方出身の観光客のイメージ：江南の風景を見慣れた、北京へ来たばかりの張を失

---

[224]張恨水「陶然亭」、張恨水『緑了芭蕉』、江蘇文芸出版社、2006 年。原文は「可是這三十多年以来，陶然亭一年比一年壊。我三度来到北京，而且住的日子都很長，陶然亭雖然去過一両趟，総覚得：「地匝万蘆吹絮乱」句子而外，其余一点什麽都沒有。真是対不住那個盛名了。」

[225]原文は「如果没有这山，就直截了当地看到城墻这么一段，就没有这样妙了。」

[226]原文は「陶然亭和从前一比，不知好到什么地步了」。

[227]原文は「要照從前的穢土成堆，那過了両三年就湮没了。有些知道陶然亭的人，恐怕只有在書上找它陳跡了吧？現在逛陶然亭真是其樂陶陶了。」

望させたイメージ。これは1のイメージを否定するものである。

3．北京長期滞在者のイメージ：陶然亭の長所を徐々に認められるようになった頃のイメージ。

4．故郷を奪われた難民のイメージ：重慶で見た「夢」に出てくる、精神の故郷である北平の、素晴らしい境地としてのイメージ。これは 1、2、3 のイメージを感性的、理性的に昇華させたものである。

5.新中国宣伝のためのイメージ：過去との対比によって際立たせられた、50 年代に修繕された陶然亭公園のイメージ。これは3、4のイメージを否定するものである。

以上のような陶然亭イメージの変化は、明らかに作家の心理の変化、また作家の身分の変化を反映したものである。イメージ 1 と 2 は、作家の南方人としてのアイデンティティーを反映している。これに対してイメージ 3 と 4 は、作家が北京長期滞在者さらには北京人というアイデンティティーを得たことを反映している。特に 4 は、陶然亭という名所を地方の人々に紹介するような口調になっている。そしてイメージ 5 には、新しい陶然亭公園を知らない遊覧客という身分が反映されている。張自身も、また陶然亭の周辺で育った妻の周南でさえも、新しい陶然亭公園を識別できなかったのである。[228]イメージの 1 から 4 までにおいては、張の気持ちは南方人のアイデンティティーと北京人のアイデンティティーの間で揺れ動いているが、イメージ 5 に至ると、この不安定性は消滅した。二つのアイデンティティーの間の隔たりは解消され、どんなアイデンティティーの者も同じ感想をもつようになったのである。ある論者は「陶然亭」の描写が張恨水の個人的な士大夫趣味と普通の労働者の感覚を結合させたものであると述べている。[229]確かに、張はここに至って普通の労働者と同じアイデンティティー、すなわち新中国の公民という身分をもつようになったのである。

第四節　結び

以上、本論文は空間的・時間的に張恨水の北京イメージを整理し分析してきた。

空間の上では、本論文はリンチの都市イメージ理論から多大な啓発を受けた。本文中では張恨水の北京を舞台とする 13 部の作品を整理して、イメージの種類と出現した回数を統計することによって、作家の北京認知地図を大まかにスケッチした。またこれを参照しつつ、同じ方法で張の南京イメージと重慶イメージについても整理し、それぞれの認知地図の特徴とその成因を分析した。その特徴と成因について、以下の表に簡略に示す。

張恨水の北京認知地図の特徴と成因

特徴	外部要素	内部要素
パスとして長安街と前門地域	重要な幹線道路と商業地域	通勤と外城における居住

[228]原文は「她是从童年就生長在這里的人，現在連一点都不認得了。」

[229]肖鑫、鄭乃勇「在文化中歌唱――1956-1966 年間抒情散文的文化想象」、『江西社会科学』2007 年第 8 期。

ノードとして西側の城門	西郊との連絡	
ランドマークとして南北の中心線	15 世紀より定められた都市の中心線	
城内の皇室空間から改造された公園	アクセスと入場料／風景と文化的雰囲気	中央公園などへの偏愛
西山の山水人文景観	明清以来著名である	
鉄道駅	北京と地方を結ぶ交通の要衝	江南から北京へよく出入した
『春明外史』のなかの外城イメージ		宣南地域の会館における居住
1930 年以後の作品における東城イメージの増加		1930 年以後、東城における居住と通勤
伝統的なイメージが優位	近代化の緩慢さ／首都としての独自性・計画性・安定性	文化人として古都を熱愛
基本的に完全な北京地図		住居と通勤が城内、長期滞在、記者の職業、徒歩を好む

張恨水の南京認知地図の特徴と成因

特徴	外部要素	内部要素
かなり全面的、均質的		城内における居住と仕事
秦淮河と夫子廟	明代以来の南京の代表的なイメージ	よく遊びに行った
丹鳳街		住居に近い
中山陵	象徴的な意義をもつ政治イメージ	

張恨水の重慶認知地図の特徴と成因

特徴	外部要素	内部要素
郊外のイメージの割合が高い／比較的劣っている	「山城」の地理的特徴／戦争の爆撃	郊外における居住と生活の困窮
海棠溪と南温泉		通勤のノードと住居

時間の上では、張恨水の作品における北京イメージの描写と評価は時期によって変化してきた。その背景として、江南との関係がこの問題に微妙にかかわっているほか、文化アイデンティティーおよび国民国家への想像という問題がより深い意味を持っていると考えられる。その変化をめぐってとりわけ重要なのは、以下の三つの時点である。

一つ目は 1928 年、首都の南遷である。これにより首都の地位を失った北平は、「文化古都」となった。張が 1928 年以後創作し始めた作品においては、北京イメージが大幅に増加した。特に、1930 年に発表した『啼笑因縁』に見える北京イメージへの高い評価は、それまでにないものだった。以前の張の作品のなかでの北京と江南の序列は、この作品においては逆転されている。こうした変化の背景として、以下の歴史的事実に注目すべきであろう。1. 1928 年、国民政府第 74 次会議の討論のなかで、経亨頤が故宮博物院の撤廃を提案し、所蔵の文物を全て換金しようと提議した。これに対し、国民政府大学院古物保管委員会主席の張継をはじめとする著名な学者たちは激しい反論を唱え、その提案と提議を拒否した。2. 1930 年、国民政府が『古物保存法』を公布し、中央古物保管委員会を成立させた。3. 1935 年、王新命ら十名の教授は、「中国本位的文化建設宣言」を発表し、中国伝統文化を本位また主体として、現代国家を建設し、自国の民族の自信を強化しようと主張

した。この三つの事件の中で、国民政府や知識界は文物の保護と博物館の建設、さらに中国独自の文化建設に対して高い関心を示した。それというのもアンダーソンが述べたように、「博物館と博物館的想像力は、いずれもすぐれて政治的なものだからである。」[230]1928年に国家の統一をほぼ実現した国民政府の下で、中国は初めて現代のネーションステートに近い姿を取るようになったといえる。国家と民族の歴史に対する態度は、政府の合法性や国民の団結力にも大きく関わってくる。都市北京の場合、袁良が「世界文化の遊覧区」の計画と実践を通して、上述の「宣言」の理想を実現しようとしたことは、上の三つの事件の背後にあったロジックと合致している。にもかかわらず、1935 年に出版された、北平市政府編『旧都文物略』の序文中には、「(本書の) 主旨は民族の精神を発揚しようとするものであり、…ガイドの助けとなるだけでなく、…国民の気持ちを鼓舞し、国家の栄光を発揚することにも益するであろう」と記してある[231]。同年、北平経済新聞社は馬芷庠編集、張恨水審定の『北平旅行指南』を刊行した。その巻 1「古跡名勝之部」には、211 のスポットが紹介され、紙幅の半分以上を占めている。この『指南』は出版の直後に一万冊あまりを売り上げ、1936 年までに第三版まで発行された。[232]文言で著された『旧都文物略』とは異なり、『北平旅行指南』は通俗的な内容で、200 点近い写真のついた、大衆向きの読み物である。この本を作った人々は出版物に通じ、北京に対する国民の想像を作り上げようとしていた。董玥によると、北平においては、1928 年以降、系統的な都市計画と歴史の再建を行おうとする傾向が生まれ、都市の過去と統一されたネーションステートを結びつけようとする努力はいっそう明らかなものとなった[233]。張による北京賛美の小説創作はこのような都市再生の働きと連動していたものと思われる。

二つ目の時点は 1937 年、日中戦争の勃発である。1931 年に日本軍が中国東北を占領した後、政府と文化界は戦争の危機を感じ、民族の文化遺産を守ろうという意識をもつようになった。1934 年に故宮博物院の文物が南京へ移されたことは、その意識を体現している。戦争が勃発する前に張は北平を去り、勃発後にはもはや北京を舞台とした小説を創作しなくなった。しかし張は、重慶で北京を懐かしむエッセーを多数執筆している。特にエッセー集『両都賦』において、北平と南京に対する描写はその頂点に達した。陶然亭を例に取れば、張は以前のイメージを修正し、北平の旧都イメージを「夢」としていっそう想像を膨らませ、イメージを再構築した。その動機は、激賞に値する美しいイメージを通じて、人々の旧都に対する憧憬を喚起し、故郷奪回の文化的熱意を鼓舞しようとすることにあったと推測できる。この北平と南京のイメージは、文化と政治の両面から、抗戦意識の深化に対し有効に作用した。

三つ目の時点は 1949 年、新中国の成立である。張は新聞機構の要請により創作したエ

---

[230]ベネディクト・アンダーソン著、白石隆，白石さや訳『定本想像の共同体 ： ナショナリズムの起源と流行』、書籍工房早山、2007 年、293 頁。
[231]韓永進主編『民国文献類編　歴史地理巻 967』、国家図書館出版社、2015 年、102 頁。原文は「主旨在发扬民族精神……固不止为导游之助……或亦于振导民气，发扬国光，有所裨乎？」
[232]季剣青「旅遊指南中的民国北京」(『北京観察』2014 年第 3 期) を参照。
[233]董玥『民国北京城』、三聯書店 2014 年、75 頁。

ッセーのなかで、なるべく繁栄し発展する斬新な北京イメージを描き出そうとし、新しい北京と過去の北京との区別をはっきりさせた。こうして、新中国のアイデンティティーが構築された。ただ、張が熱意を持って創作した『記者外伝』は、民国時代の北京イメージを回想して再現し、集大成した作品であった。これは時代と合わなかったため、出版は不可能であり、未完に終わってしまった。アンダーソンが論じたように、新興国家の「国民建設」に際しては、民衆的ナショナリズムの熱情とマスメディア、教育制度、行政規則その他を利用した体系的な国民主義イデオロギーの注入とがしばしば認められる。[234]共産党政府と新聞機構は、民国における有名作家という張の身分を効果的に利用し、新中国の合法性のアピールとアイデンティティーの建設に参与させようとしたのである。

民国期の北京イメージを回顧すると、張恨水のケースが決して孤立した特殊なものではなく、同時代の多数の文化人が類似した心理をもち、類似したイメージを描写していることが分かる。民国期に初めて北京に来た地方出身者は、鉄道駅を出て、雄大な前門箭楼に震撼した。作家の孫福熙と姜徳明はこの驚きと感動を書き記している。[235]1928 年の遷都の後、北平に滞在していた多数の文化人は北平の文化消費の中核となって、「文化古都」の雰囲気を維持することに努めた。抗日戦争が勃発した後、作家たちは民族の誇りと必勝への信念を読者の間に確立するため、北京憧憬により国民的文化アイデンティティーを形成しようとしてそれぞれの形で描き出した。著名な作家たちのなかで、特に老舎と林語堂は、張とは対照的に論じられてきた。老舎は 1944 年より『四世同堂』を創作し、北平陥落区の民衆の生活を描写した。そのなかで、天安門というイメージは民族の尊厳と精神の象徴として、「偉大」「母親」「感動的」と描写されている。[236]いっぽう林語堂は 1938 年に海外において英語で『北京好日』を創作し、1900 年代― 30 年代の北京を主要な舞台として，北京人の暮らしを紹介し、日本の中国侵略の不当性を訴えた。そのなかで、林は北京について「The city was planned by a master architect as no other city was ever planned on this earth」と激賞し[237]、北京を中国文化の象徴と位置づけた。これらの作品は、張の『両都賦』と同じく、抗戦時期の文化アイデンティティーと民国時代の国民国家の想像を表現している。

「文学を単純に、ある地域と場の描写として読むことはできないのは明らかである。多くの場合、文学はこれらの場を創造する手助けをしてきたのだ。」とある論者は述べている[238]。張恨水などの作家たちは単に民国時代の北京イメージを再現しただけでなく、民国時代の北京イメージを創造したと言えよう。張恨水が民国時代の北京イメージの創造に関与したのは、新聞編集者と通俗小説家として、マスメディアを通じて実現したのである。

---

[234] ベネディクト・アンダーソン著 ; 白石隆, 白石さや訳『定本想像の共同体 : ナショナリズムの起源と流行』、書籍工房早山、2007 年、274 頁。
[235]姜徳明編集『北京乎』、三聯書店 1992 年、156 頁、2 頁。
[236] 老舎『四世同堂』第 83 章。
[237]林語堂 *Moment in Peking : a novel of contemporary Chinese life*, Shanghai : Kelly & Walsh, 1939, P171.
[238]Mike Crang: *Cultural geography,* London;New York: Routledge, 1998, P44.「It is clear that literature cannot be read as simply describing these regions and places – in many cases it helped to invent these places.」

詳しく言えば、以下の三つの方面から理解できろう。

一つ目は、発達新聞業・出版業などを背景として、張恨水は多数の読者を得て、影響力を最大化した。『啼笑因縁』を例にとってみよう。『啼笑因縁』が連載された上海「新聞報」の発行部数は、1921 年 5 万部台、1923 年 8 万部台、1924 年 10 万部台、1929 年（『啼笑因縁』が連載された前年）15 万部に上り、全国発行部数が最大な新聞となった。[239]これ以後は 15－18 万部を維持していた。1935 年前後、「新聞報」は一人の会計士を誘って新聞社でその日の印刷部数が 18 万あまりであったと証明させ、翌日に新聞で登載したという話がある。[240]劉少文は当時これが「天文学的数字」、「（新聞は）数千部の発行があれば生存できた」と評論した。[241]張恨水が「新聞報」に多数の読者を獲得したと同時に、「新聞報」は『啼笑因縁』が大好評であったため、発行部数の増加を実現した。例えば、広告主が自分の広告を『啼笑因縁』が登載されている版に近くに掲載してほしいと要求したというエピソードもある。[242]『啼笑因縁』単行本の発行部数に関して、張自身は「海賊版を除けば、私が推量できる限り、この本が前後二十版を超えた。第一版は一万部、第二版は一万五千部。以後各版は四、五千部があり、二、三千部もある。」と回想した。[243]1933 年 1 月 30 日「新聞報」では縮約版『啼笑因縁』単行本の広告が登載された。この広告によると、これまでの『啼笑因縁』の単行本は 5 万部あまり売り上げた。1980 年代に至っても、驚くべき影響力を見せた。江流は 1982 年にこう言った：「この数年以来、…『啼笑因縁』は、短い時間の間、四つの出版社は先を競って再版しており、その上売れ行きはとてもよい。」[244]張伍の統計によると、『啼笑因縁』は世に出て以来、映画とドラマに改編された回数が 14 回に上った。もっとも古いのは 1932 年に上海で製作された映画、最も近いのは 2004 年中国中央テレビの製作したドラマである。しかも、『啼笑因縁』は新劇、京劇、地芝居、講談、ピクチュアブックなどに改編された。劉少文は『啼笑因縁』が「30 年代の神話」、「作家とマスメディアが共同に創作した神話だ」と認めた。[245]王徳威は、1931 年が「張恨水年」だと称した。[246]

二つ目は、多数の読者をもっており、抗戦意識を作品のなかで深く体現した張恨水は、主流の文学・文化界によって認められて、影響力をいっそ拡大した。張は最初から新文学の系譜に属していなかった。茅盾は張に関して「通俗教育の方面から見れば、まあ利用で

---

[239] 方漢奇編集『中国新聞事業通史』第二巻、中国人民大学出版社、1996 年、178 頁、443 頁。
[240] 徐鋳成『報海旧聞』、上海人民出版社 1981 年、39 頁。
[241] 劉少文『大衆媒体打造的神話』、中国社会科学出版社 2006 年、192 頁。原文は「当时这确实已是天文数字，因为发行几千份的报刊即可维持生存。」
[242] 張友鸞「章回小説大師張恨水」、張占国、魏守忠編集『張恨水研究資料』、知識産権出版社 2009 年、100 頁。
[243] 張恨水「写作生涯回憶」、張占国、魏守忠編集『張恨水研究資料』、知識産権出版社 2009 年、34 頁。原文は「除了……私人盗印翻版的不算，我所能估计的，该书前后超过二十版。第一版是一万部，第二版是一万五千部。以后各版有四、五千部的，也有两、三千部的。」
[244] 江流「潜山懐人」、「清明」1982 年第三期。
[245] 劉少文『大衆媒体打造的神話』、中国社会科学出版社 2006 年、201 頁。
[246] 王徳威「文学的上海――一九三一」、陳子善編集『夜上海』、経済日報出版社 2003 年、255 頁。

きる工具だといえる。」と述べている。[247]1937 年つまり抗日戦争勃発の年に、張は中華全国文芸界抗敵協会の理事に選ばれた。1944 年には老舎が張は全国唯一の女子供でも知っている作家だと言っている。[248]1942 年に、張恨水は中央大学で小説史に関する講演を行い、大学生によって熱烈に歓迎された。

三つ目は、北京イメージに対する独自性が持つ文学描写は、多数の読者を魅了し、パブリック・イメージとなった。張友鸞は張恨水が南方読者に新たな北京イメージをもたらしたことに注目した。彼は「南方人は北京に憧れて、文字記載を通じて、『寝たまま遊ぶ』ことができる。南方の名家は、足跡が上海、蘇州、杭州、揚州から離れることなく、これらの地を主な背景として創作している。読者は当然ながら狭隘に感じたのである。『啼笑因縁』は北京を描いて、北京の風物を生き生き紹介した」と記した。[249]

「天橋」イメージを例にとって考察しよう。張友鸞は「特に天橋を鮮烈に描いた。今日に至ってこの小説を読んだ南方人は、北京へ来ると必ず天橋を訪れる。」と 1981 年に回想している。[250]張恨水の「天橋」は多数の読者を魅了した上、どのようにパブリック・イメージとなったのか。『啼笑因縁』が発表された 1930 年前後の北京（北平）ガイドブックの説明を紹介したい。1918 年に上海中華図書館が編集した『北京指南』の「街道地名表」では「天橋」のみが収録されていた。1926 年に上海商務印書館が出版した『実用北京指南』の「外城之概略」の部分では「天橋以南戯棚あり」と言及され、「食宿遊覧」の「戯園」、「坤書館」と「評書」の部分では幾つかの劇場が天橋に位置していると記されただけである。1929 年に北平民社により出版された『北平指南』では、天橋の近くの「天橋」を含む胡同の名前が収録されただけである。

1935 年馬芷庠編集の『北平旅行指南』の巻一「古跡名勝之部」には「天橋」という項目が立てられており、六百字以上の紹介がなされている。その紹介のなかでは、「水心亭」が詳しく描写され、『啼笑因縁』のなかの「水心亭」に関する描写と対照できる。もっとも、天橋が「大鼓書」の発祥地だといえると記しており、「大鼓書」の俳優も列挙している。『啼笑因縁』のヒロインである沈鳳喜は「水心亭」で「大鼓書」を演じる俳優である。同指南書巻二「食住遊覧之部」にも、独立した「天橋」という項目があり、「天橋平民娯楽場」を詳しく紹介している。こうして見ると、『啼笑因縁』の流行は、天橋が北平の名勝と著名な遊覧地になった要因の一つといえよう。この小説の「水心亭」と「大鼓書」に関する描写も旅行ガイドの役目を果たしたのである。言い換えれば、張恨水は「天橋」イ

---

[247] 茅盾「关于『吕梁英雄传』」、中華論壇 1946 年第 2 巻第 1 期。原文は「从通俗教育方面，也还不失为一个利用工具。」

[248] 老舎「一点点认识」、張占国、魏守忠編集『張恨水研究資料』、知識産権出版社 2009 年、88 頁。原文は「国内唯一的妇孺皆知的老作家。」

[249] 張友鸞「章回小説大師張恨水」、張占国、魏守忠編集『張恨水研究資料』、知識産権出版社 2009 年、109 頁。原文は「南方人向往北京，常借文字记载，以当“卧游”。南方名家们，足迹不离上海、苏州、杭州、扬州，写来写去，总以诸地为主要背景，读者自然感到狭隘。《啼笑因缘》写的却是北京，把北京的风物，介绍得活了。」

[250] 同上。原文は「描画天桥，特别生动。直到今天（1981 年），还有读过这部小说的南方人，到北京来必访天桥。」

メージの形成と発展に大きな影響を与えたのである。

董玥によると、現在考えられている「老北京」とは、明清時代の北京ではなく、民国時代に「伝統が発明された」北京である。[251]民国時代の北京は、明清時代の北京を継承して、これを近代的に改造した。北京は近代化の途中にあっても一貫して伝統のイメージを保持しており、これが北京イメージの独自性であり、このかけがえのないイメージは現在まで伝えられてきた。その過程で、張恨水文学は重要な役割を果たしたのである。

[251]董玥『民国北京城』「結語」を参照、三聯書店 2014 年、323 頁。

付録

表 1：13 部の北京を背景とする作品における北京イメージの統計

地名	作品の名前													備考
	北京で発表された作品						上海で発表された作品							
	春明外史	京尘幻影录	金粉世家	春明新史	斯人记	啼笑因缘	天河配	似水流年	落霞孤鹜	现代青年	美人恩	艺术之宫	夜深沉	
1.パス														
八大处大道（阜成门外）			1											城外・西
北新桥大街												1（1）	1	東城
草场胡同	1													外城
草场六条					1									外城
崇文门大街											1			東城
大喜胡同						1								西城
到香山和八大处的两条大道（西直门外）			1											城外・西
东单大街													1	東城
东四三条胡同						1								東城

地名	作品の名前													備考
	北京で発表された作品						上海で発表された作品							
	春明外史	京尘幻影录	金粉世家	春明新史	斯人记	啼笑因缘	天河配	似水流年	落霞孤鹜	现代青年	美人恩	艺术之宫	夜深沉	
府右街					1									
韩家潭	3				1									外城
花枝胡同												2		西城
槐树胡同									1					西城
廊坊头条胡同				1	1			2						外城
莲花河（荣光胡同）				1								1		外城
煤市桥	1													外城
南横街					1									外城
南下洼子					1							1		外城
南长街	1													東城
前门大街			1	1	1						1			外城（中心線）
陕西巷	2													外城
石头胡同	2							3（1）	1					外城
水车胡同						1								西城
太平街								1						外城
王府井大街	1				1									東城

地名	作品の名前													備考
	北京で発表された作品						上海で発表された作品							
	春明外史	京尘幻影录	金粉世家	春明新史	斯人记	啼笑因缘	天河配	似水流年	落霞孤鹜	现代青年	美人恩	艺术之宫	夜深沉	
西河沿	1													外城
西四大街				1										西城
羊尾巴胡同													1	東城
樱桃斜街	1													外城
月牙胡同													3	東城
长安街	1				4（2）						3（2）			東、西城
2.エッジ														
城墙	1	1	1			1					3		1	
铁路				1	1						4（1）			
3. ディストリクト														
北池子	1													東城
北海	5（4）		4（1）	2	1（1）	5(2)				2（1）				西城
北京饭店	1					4(2)								東城
厂甸	1		1											外城
城南游艺园	4	1												外城
大栅栏	1			3										外城

地名	作品の名前													備考
	北京で発表された作品						上海で発表された作品							
	春明外史	京尘幻影录	金粉世家	春明新史	斯人记	啼笑因缘	天河配	似水流年	落霞孤鹜	现代青年	美人恩	艺术之宫	夜深沉	
东安市场	2	1	3	1	6			3		2（1）			6	東城
东交民巷			1						1			1		外城
东岳庙						1						1		城外・東
丰台镇				1										城外・南
故宫（紫禁城）		2			1	1	1	1	1	3（1）				中軸線
海淀			2											城外・西
琉璃厂		1											1	外城
隆福寺（庙会）												3（1）		東城
南苑				1										城外・南
什刹海	1					4(1)					1	4（1）		西城
太庙		2（1）												東城
汤山			1										2	城外・北
陶然亭	2	2（2）			2（1）	1								外城
天安门广场	1	1					1（1）				1(1)			中軸線

地名	作品の名前													備考
	北京で発表された作品						上海で発表された作品							
	春明外史	京尘幻影录	金粉世家	春明新史	斯人记	啼笑因缘	天河配	似水流年	落霞孤鹜	现代青年	美人恩	艺术之宫	夜深沉	
天桥		2		2	3	7（2）					3	4	2	外城
天坛		2												外城
万牲园	2（1）		1										1	城外・西
西山	3（1）	4(1)	11（3）			4(1)		1	3					城外・西
西苑								1						城外・西
先农坛（城南公园）	1（1）	2		1	2（1）	8（3）			1					外城
香厂	3													外城
香山	1		2（1）						2			1		城外・西
新世界	2	1												外城
颐和园			5（2）			1		3						城外・西
雍和宫												1		東城
玉泉山						1								城外・西
中南海		1				1								西城
中央公园	3（1）	2	17	2	10（2）	9（1）	1（1）	5（1）	6(1)	3	3(1)			西城

地名	作品の名前													備考
	北京で発表された作品						上海で発表された作品							
	春明外史	京尘幻影录	金粉世家	春明新史	斯人记	啼笑因缘	天河配	似水流年	落霞孤鹜	现代青年	美人恩	艺术之宫	夜深沉	
4.ノード														
东安门					1									
东便门			1			1		1						外城
东单牌楼												1		東城
东直门												1		東城
阜成门	1		1									1		西城
广安门				1										外城
后门（地安门）						5								中軸線
煤市街口	1													外城
前门		2			2		1			4	2		1	中軸線
四牌楼						1								東城
西便门	2				1	1					3			外城
西车站、东车站	1	5	1	2		2	6	1	1	2			2	外城
西四牌楼			1	1						1				西城
西直门	1		3	1				1						西城
鲜鱼口	1										1			外城
宣武门											4			西城
永定门	1	1		1										外城
珠市口													1	外城

地名	作品の名前													備考
	北京で発表された作品						上海で発表された作品							
	春明外史	京尘幻影录	金粉世家	春明新史	斯人记	啼笑因缘	天河配	似水流年	落霞孤鹜	现代青年	美人恩	艺术之宫	夜深沉	
5.ランドマーク														
北海白塔			1											西城
鼓楼						1								中軸線
景山										1				中軸線
天安门		1			1	1	1							中軸線
正阳门（前门）			2			2	1			1				中軸線
中华门						1								中軸線

表２：13 部の作品における種類別のイメージの統計

作品	パス		エッジ		ディストリクト		ノード		ランドマーク		総計	
	種類	回数	種類	回数	種類	回数	種類	回数	種類	回数	種類	回数
春明外史	10	14	1	1	17	34(8)	7	8	0	0	35	57（8）
京尘幻影录	0	0	1	1	14	24(4)	3	8	1	1	19	34（4）
金粉世家	3	3	1	1	11	48(7)	5	7	2	3	22	62（7）
春明新史	4	4	1	1	8	13	5	6	0	0	18	24
斯人记	9	12（2）	1	1	7	25(5)	3	4	1	1	21	43（7）
啼笑因缘	3	3	1	1	13	47（12）	5	10	4	5	26	66（12）
天河配	0	0	0	0	3	3（2）	2	7	2	2	7	12（2）
似水流年	3	6（1）	0	0	6	14（1）	3	3	0	0	12	23（2）
落霞孤鹜	2	2	0	0	6	11	1	1	0	0	9	14
现代青年	0	0	0	0	4	10（3）	3	7	2	2	9	19（3）
美人恩	3	5（2）	2	7(1)	4	8（2）	4	10	0	0	13	30（5）
艺术之宫	4	5（1）	0	0	7	15（2）	3	3	0	0	14	23（3）
夜深沉	4	6	1	1	5	12	3	4	0	0	13	23

表３：13 部の作品の字数に基づくイメージの統計

作品	字数	10 万字あたり出現したイメージ	
		種類	回数
春明外史	95 万	3.7	6.0
京尘幻影录	60 万	3.2	5.7
金粉世家	111 万	2.0	5.6
春明新史	22.1 万	8.1	10.9
斯人记	32.6 万	6.4	7.4
啼笑因缘	27 万	9.6	24.4
天河配	30.6 万	2.3	3.9
似水流年	30.5 万	3.9	7.5
落霞孤鹜	24.7 万	3.6	5.7
现代青年	33.5 万	2.7	5.7
美人恩	17 万	7.6	17.6
艺术之宫	28.1 万	5.0	8.2
夜深沉	31.7 万	4.1	7.3

表４　出現した頻度が高いイメージの統計

イメージ	出現の回数	出現した作品の部数	描写がついた回数
中央公园	61	11	8
西山	26	6	6
东安市场	24	8	1
西车站东车站	23	10	0
天桥	23	7	2
北海（白塔を含める）	20	6	9
前门（箭楼を含める）	18	8	0
先农坛（城南公园）	15	6	5
什刹海	10	4	2
故宫	10	7	1
颐和园	9	3	2
长安街	8	3	4
城壁	8	6	0
陶然亭	7	4	3
西便門	7	4	0

表５　４部の作品における南京イメージの統計

地名	種類	总计	满江红	秦淮世家	负贩列传	大江东去
夫子庙	ディストリクト	29	11	17		1
丹凤街	パス	17			17	
秦淮河	ディストリクト	16	2	14		
清凉山	ディストリクト	12	10			2
下关	ノード	8	7			1
浦口	ノード	5	5			
鼓楼	ランドマーク	3	2	1		
光华门	ノード	3				3
后湖公园（玄武湖）	ディストリクト	3		3		
鸡鸣寺	ディストリクト	3			3	
挹江门	ノード	3		1		2
中山大道	パス	3	3			
紫金山	ディストリクト	3		1		2
唱经楼	ディストリクト	2			2	
府东街	パス	2		2		
明孝陵	ディストリクト	2	1		1	
新街口	ノード	2		1		1
中华门	ノード	2				2
中山北路	パス	2		1		1
中山门	ノード	2		2		
中山陵	ディストリクト	2	1			1
白鹭洲	ディストリクト	1				1
北极阁	ディストリクト	1			1	

地名	種類	总计	满江红	秦淮世家	负贩列传	大江东去
虎踞关	ディストリクト	1				1
花牌楼	ディストリクト	1		1		
淮清桥	パス	1		1		
门东	ディストリクト	1		1		
莫愁湖	ディストリクト	1			1	
升官巷	パス	1			1	
狮子山	ディストリクト	1	1			
水西门	ノード	1				1
四象桥	パス	1		1		
太平路	パス	1		1		
桃叶渡	ノード	1		1		
孝陵卫	ディストリクト	1		1		

表６　５部の作品における重慶イメージの統計

地名	总计	種類	牛马走	偶像	第二条路	巴山夜雨	纸醉金迷
海棠溪	8	ノード	4	1			3
南温泉	7	ディストリクト	2		2		3
渔洞溪（重庆上游六十里的一个水码头）	7	ディストリクト	7				
嘉陵江	6	エッジ		1	2		3
歌乐山	5	ディストリクト				1	4
黄桷垭	3	ディストリクト	1				2
储奇门	2	ノード	1	1			
大梁子	2	ディストリクト					2
都邮街	2	パス	1		1		
精神堡垒（今の解放碑）	2	ランドマーク			1		1
两路口	2	ノード	1			1	
民族路	2	パス					2
南山	2	ディストリクト		1			1
青木关	2	ディストリクト				1	1
沙磁文化区	2	ディストリクト			2		
扬子江	2	エッジ	2				
白市驿	1	ディストリクト		1			
北碚	1	ディストリクト			1		
北温泉	1	ディストリクト					1

地名	总计	種類	牛马走	偶像	第二条路	巴山夜雨	纸醉金迷
菜园坝	1	ディストリクト	1				
磁器口	1	ディストリクト					1
打铜街	1	パス					1
林森路（今の解放東路）	1	パス				1	
龙门浩渡口	1	ノード					1
罗家坝	1	ディストリクト	1				
南纪门	1	ノード	1				
牛角沱	1	ディストリクト	1				
沙坪坝	1	ディストリクト					1
珊瑚坝飞机场	1	ディストリクト	1				
中山公园（今の人民公園）	1	ディストリクト					1

表７　『記者外伝』における北京イメージの統計

地名	回数（描写がついた回数）	備考
1.パス	45（3）	
吉兆胡同	2	東城
帽儿胡同	1	東城
宣武门大街	5（1）	外城
西草厂街	3	外城
骡马市大街	4	外城
米市胡同	2	外城
肉市街	1	外城
丞相胡同	1	外城
东厂胡同	1	東城
新华街	4	外城
卢沟桥	2（1）	城外
前门大街	1	外城
前孙公园胡同	1	外城
无量大人胡同	1	外城
后孙公园胡同	3	外城
杨梅竹斜街	1	外城
粉房琉璃街	2	外城
石驸马大街	3	西城
广安大街	1	外城
香厂路	2	外城
东安门大街	1（1）	東城
观音寺大街	1	外城
长安街	2	東西城
2.エッジ	9（1）	
城墙	5	
铁路	3	
永定河	1（1）	城外
3. ディストリクト	42（14）	
北池子	1	東城
南池子	1	西城
北海	3（3）	西城
城南游艺园	6（3）	外城
大栅栏	1	外城
西交民巷	2（1）	西城
东交民巷	3	東城
故宫（紫禁城）	2	中軸線
琉璃厂	2	外城
陶然亭	1（1）	外城
天桥	1（1）	外城

地名	回数（描写がついた回数）	備考
西山	1	城外
先农坛	2	外城
香厂	3（1）	外城
新世界	7（1）	外城
沙滩	1	東城
八大胡同	1	外城
中央公园	4（3）	西城
4.ノード	38（1）	
朝阳门	1	東城
东华门	1	東城
崇文门	1	東城
广安门	1（1）	外城
后门（地安门）	1	中軸線
前门	8	中軸線
右安门	1	外城
和平门	3	西城
西车站、东车站	5	外城
西单牌楼	1	西城
西四牌楼	2	西城
宣武门	6	西城
东安门	2	東城
永定门	1	外城
西直门车站	1	城外
菜市口	3	外城
5.ランドマーク	6（1）	
正阳门（前门）	1	中軸線
北海白塔	2	西城
天安门	1（1）	中軸線
景山	1	中軸線
西山	1	城外

参考文献

作品：

張恨水『張恨水全集』、北嶽文藝出版社、1993 年。

曽智中ら編集『張恨水説北京』、四川出版集団・四川文藝出版社、2007 年。

曽智中ら編集『張恨水説重慶』、四川文藝出版社 2007 年

張恨水『独鶴與飛—張恨水経典散文』、陜西人民出版社、2009 年。

張恨水『緑了芭蕉』、江蘇文芸出版社、2006 年。

張恨水作、飯塚朗訳『啼笑因縁』、生活社、1943 年。

林語堂 *Moment in Peking : a novel of contemporary Chinese life*, Shanghai : Kelly & Walsh, 1939。

林语堂 *Imperial Peking: Seven Centuries of China,* 外語教学和研究出版社, 2009 年

老舎『四世同堂』、『老舎全集』、人民文学出版社、2013 年。

姜徳明編集『北京乎』、三聯書店、1992 年

著作、資料集：

張恨水研究：

張占国、魏守忠編集『張恨水研究資料』、知識産権出版社 2009 年。

張伍『我的父親張恨水』, 春風文芸出版社 2002 年

張正『魂夢潜山——張恨水紀伝』、山西人民出版社 2001 年。

張明明『回憶我的父親張恨水』、百花文藝出版社、1984 年。

張紀『我所知道的張恨水』、金城出版社、2007 年。

袁進『張恨水評伝』、南京大学出版社、2012 年。

劉少文『大衆媒体打造的神話』、中国社会科学出版社 2006 年。

朱周斌『懐疑中的接受—張恨水小説中的現代日常生活』、広西師範大学出版社、2010 年。

朱周斌『張恨水作品中的郷村與城市』、中国電影出版社、2015 年。

温奉橋『張恨水新論』、斉魯書社、2009 年。

都市イメージと都市空間：

ヴィン・リンチ著, 丹下健三, 富田玲子訳『都市のイメージ』, 岩波書店, 2007 年。

Kevin Lynch: Good City Form, The MIT Press, 1984-2-23.

村松伸『中華中毒 ： 中国的空間の解剖学』、作品社、1998 年。

村松伸ら『図説北京 ： 三〇〇〇年の悠久都市』、河出書房新社、1999 年。

楊東平『城市季風—北京和上海的文化精神』、新星出版社 2006 年。

閔学勤『感知與意象—城市理念與形象研究』、東南大学出版社、2007 年。

景秀明『江南城市：文化記憶與審美想象』、中国社会科学出版社、2009 年。

孫遜ら『都市空間與文化想象』、上海三聯書店、2008 年。

沈福煦『城市文化論綱』、上海錦繍文章出版社、2012 年。

朱文一『空間·符号·城市：一種城市設計理論』、中国建築工業出版社、1993 年。

北京研究：

藤井省三『現代中国文化探検:四つの都市の物語』、岩波書店 1999 年。

陣内秀信, 朱自暄, 高村雅彦編『北京：都市空間を読む』、東京 ： 鹿島出版会、1998 年

史明正著、王業龍、周為紅訳『走向近代化的北京城——城市建設與社会変革』、北京大学出版社、1995 年

陳宗藩『燕都叢考』、古籍出版社、1991 年。

鄧雲郷『宣南秉燭譚』、河北教育出版社、2004 年。

鄧雲郷『文化古城旧事』、中華書局、1995 年。
劉東黎『北京的紅塵旧夢』、人民文学出版社 2009 年。
許慧琦『故都新貌 ： 遷都後到抗戰前的北平城市消費(1928-1937)』、臺灣學生書局 2008 年。
董玥『民国北京城』、三聯書店 2014 年。
王軍『城記』、三聯書店 2003 年。
厳粛『北京市街巷名称録』、群衆出版社 1986 年。
陳平原ら編集：『北京：都市想像與文化記憶』、北京大学出版社、2005 年。
陳平原『北京記憶と記憶北京』、三聯書店 2008 年。
王煒ら編著『老北京公園開放記』、学苑出版社、2008 年。
王亜男『1900 年—1949 年北京的都市規劃與建設研究』、東南大学出版社 2008 年。

論文：

張恨水研究：

周成蔭「城市製図：新聞、張恨水和二十年代的北京」、『書城』2003 年 12 月。
李在珉「老舍与張恨水的北京叙述和想象」北京大学中文系博士論文 2006 年。
魏宏瑞「世説秦淮——地域文化視角下張恨水小説中的江南呈現」、『名作欣賞』2011 年第 34 期。
卞秋華「張恨水小説中的南京書写」、『中国現代文学研究叢刊』2013 年第 4 期。
袁昊「民国城市書写：『丹鳳街』與南京」、『中山大学学報』2017 年第 1 期。
張武軍「張恨水小説創作與重慶」、『紅岩』2009 年第 2 期。
李永東「論陪都語境下張恨水的重慶書写」、『中国文学研究』2009 年第 4 期。
尹瑩「小説中的重慶」、華中師範大学博士論文 2009 年。
克石『張恨水與京華旧居』、『海内與海外』2009 年第 11 期。
贾俊学「文聯旧档案：老舍、張恨水、沈従文訪問紀要」、『新文学史料』2012 年第 4 期。
陳秋慧「謹慎的伝奇—透視 1950 年代張恨水民間故事写作」、『湖北民族学院学報』2007 年第 2 期。
宋偉傑「老霊魂・新青年、與張恨水的北京羅曼史」、『中国現代文学研究叢刊』2010 年第 3 期。
蒋星煜「張恨水高産而清貧的一生」、『档案春秋』2006 年第 1 期
王衛平ら「現代都市小説中的北京想像—以老舍、沈従文、張恨水的創作為中心」、『北方論叢』2007 年第 1 期。
張友鸾「章回小说大家张恨水」,『新闻学史料』1982 年第一期。
朱小平「張恨水京華旧居尋踪」、『縦横』2009 年第 11 期。
贾俊学「文聯旧档案：老舍、張恨水、沈従文訪問紀要」、『新文学史料』2012 年第 4 期。
笠征「張恨水とその作品」、樋口進先生古稀記念論集刊行会編『樋口進先生古稀記念中国現代文学論集』中国書店 1990 年。
斉藤泰治「張恨水の「八十一夢」について--並びに張恨水の伝記ノート」、法政大学教養部『法政大学教養部紀要』 (53)。
高建平「張恨水代表作《啼笑因縁》小論—兼与左翼作家的批評商権」、『名古屋大学中国語学文学論集』9、1996 年。
高建平「談張恨水代表作《金粉世家》」、 『名古屋大学中国語学文学論集』10、 1997 年。
坂本ちづみ「都市小説として『啼笑因縁』を読む」、『お茶の水女子大学中国文学会報』10、1991 年。
阪本ちづみ「張恨水『平滬通車』論—「近代」に乗り遅れた男」、『お茶の水女子大学中国

文学会報』16 、1997 年。
阪本ちづみ「中国文学あれこれ(76)小説と映画化--張恨水『銀漢双星』の場合」、季刊中国 (87)、2006 年。
都市イメージ：
趙迪、肖金亮「明清北京城市意象之初探」、『科技信息』2006 年第 11 期。
鐘雅琴「城市意象與当代文化身分衝突」、『人文雑誌』、2009 年第 4 期。
張鴻雁「城市意象要素的本土化文化認知」、『城市問題』2004 年第 5 期。
米澤佑一「文字情報から見た観光地イメージの特性に関する考察」、Kwansei Gakuin policy studies review 6, 2006。
北京研究：
梁思成「北京――都市計画中的無比傑作」、『新観察』1951 年 4 月。
王均「現像與意象：近現代時期北京城市的文学感知」『中国歴史地理論叢』, 第 17 巻第 2 輯, 2002 年 6 月。
王南「伝統北京城市設計的整体性原則」、『北京規劃建設』2010 年第 3 期。
季剣青「旅遊指南中的民国北京」、『北京観察』2014 年第 4 期。
季剣青「過眼繁華：張恨水的北京叙事」、『文藝争鳴』2014 年第 8 期。
高興「民国文人看北京 (1927－1933)」、『北京社会科学』2011 年第 1 期。
高興「北京中央公園與民国文人的文化心態」、『北京社会科学』2012 年第 3 期。
李蕾「北平文化生態 (1928－1937) 與京派作家的帰趨」、『中国文学研究』2009 年第 4 期。
張鴻声ら「永遠的中軸線與消失的城垣_現代文人筆下的北京」、『揚子江評論』2010 年第 5、６期。
戴海斌「中央公園與民初北京社会」、『北京社会科学』2005 年第 2 期。
王煦「在伝統和現代之間―1933 至 1935 年的北平市政建設」、『歴史教学問題』2005 年第 2 期。
王兆勝「北京文化與 20 世紀中国散文」、『江海学刊』2004 年第 2 期。
張林傑「文化中心的遷移与 30 年代文学的都市生存空间」、『北京大学学報 (哲学社会科学版)』、2000 年第 6 期。
趙世瑜ら「明清北京城市社会空間結構概説」、『史学月刊』2001 年第 2 期。
孫洪銘「怎様保護老北京―関於北京旧城空間格局與風貌的保護和発展」、『城市開発』2003 年第 1 期。
于小川「近代北京公立市場的形成與変容過程的研究―以東安市場为例」、『北京理工大学学報』第 7 巻第 1 期、2005 年 2 月。